序

岐阜県の最北端に位置する飛騨市は、北は富山市、南東は高山市、西は白川村に接し、面積792.31㎢のうち、森林が約92%を占める山間地域に、４つの町から成る自治体として、平成29年３月現在、約25,000人の人々が生活しています。

この４町において最も多くの人口を擁する古川町は、町の西寄りを清流宮川が貫流し、その周囲に形成されている市街地には、古墳や古代寺院・古代遺跡などの貴重な文化財が数多く分布しています。これは、現高山市国府町とともに古代飛騨における生活の中心地であったことの事実を裏付けるものです。

さて、本報告書の「信包中原田古窯跡」は、圃場整備事業に伴って実施した発掘調査の結果をまとめたものですが、須恵器としての蓋・坏類などの供膳具をはじめ、壺や甕・鉢類などの貯蔵具、水瓶ないし浄瓶などの供養具に及ぶまで多種にわたって確認され、７世紀末から８世紀初期の須恵器窯であることが判明しました。また、窯の構造は半地下式の無階有段登窯で、側壁に板石や角礫を使用していたと想定されています。さらに、灰原からは寿楽寺廃寺に葺いた瓦と同種の軒丸瓦や鴟尾なども出土し、近隣には瓦窯の存在も想定されるなど、貴重な発掘結果であることは間違いありません。

今後、本報告書はもちろん、現地保存された須恵器窯跡、その周囲に眠っている瓦窯跡など、考古学研究の礎として、文化財保護への関心を高めるための一助として、大いに利用されることを願うものです。

終わりに、発掘調査の実施に対しまして深いご理解とご協力をいただきました遺跡周辺地域の皆様、そして、本報告書の作成も含めて多大なるご指導・ご支援を賜りました（故）大野政雄先生はじめ関係者の皆様に心からお礼申し上げます。

平成29年３月

岐阜県飛騨市教育委員会

教育長　山　本　幸　一

例　　言

1．本書は、岐阜県飛騨市古川町信包字中原田264番地（旧吉城郡古川町大字信包字中原田261・264番地）に所在する信包中原田古窯跡（岐阜県遺跡番号G06F06433）の発掘調査報告書である。

2．本調査は、旧古川町（現飛騨市）が昭和53年度に古川町大字信包字中原田で実施した五ヶ村圃場整備事業施行中に発見された古窯跡（瓦・須恵器類）とその灰原の発掘調査である。調査ののち、灰原地区は圃場整備事業によって失われたが、古窯跡は遺跡保護のため地権者牛丸勝郎氏ならびに五ヶ村圃場整備組合のご助力により埋め戻されて保存されている。

3．発掘調査は、古川町教育委員会（現飛騨市教育委員会）が主体となり、（故）大野政雄氏（岐阜県文化財保護審議会委員・日本考古学協会員）が担当した。調査体制は以下のとおりである。

調 査 主 体　古川町教育委員会
調査担当者　大野　政雄　岐阜県文化財保護審議会委員・日本考古学協会会員
事　務　局　大平　秀憲　古川町教育委員会教育長（代表）
　　梅地　与秋　古川町社会教育課社会教育係長
調 査 期 間　昭和53年（1978）年９月中旬～11月下旬
調 査 面 積　20㎡

（肩書きは調査当時）

4．報告書作成作業は、平成27年度に飛騨市よりの業務委託を受けた株式会社玉川文化財研究所が担当した。委託業務名称は、埋蔵文化財発掘調査等事業（信包中原田古窯跡二次整理作業等委託／仕様書番号飛市教委－９号）である。

事　務　局　飛騨市教育委員会
　　清水　貢　（生涯学習課長）
　　鈴木　茂樹（生涯学習課長補佐兼文化係長）
　　清水　則久（生涯学習課文化係）
信包中原田古窯跡二次整理作業等委託業務担当
調 査 主 任　河合　英夫（株式会社 玉川文化財研究所調査研究部長・日本考古学協会会員）
調　査　員　西本　正憲（株式会社 玉川文化財研究所主任研究員・日本考古学協会会員）
補　助　員　木村百合子（株式会社 玉川文化財研究所主任研究員）
補　助　員　大貫　由美（株式会社 玉川文化財研究所整理作業員）

5．本件二次整理作業等委託業務に係わる履行期間は、平成27（2015）年５月８日～平成28年（2016）３月23日迄である。

6．本書の執筆は、河合英夫が担当した。なお、第１章第１節は三好清超が執筆した。

7．調査報告書の作成にあたっては、（故）大野政雄氏からご指導・ご協力を賜った。記して謝意を表する。

8．瓦および須恵器の土色は、小山正忠・竹原秀雄 1994『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社）による。

9．報告書刊行ののち、調査記録や出土遺物は、飛騨市教育委員会で保管・公開する予定である。

目　　次

序 …… i
例　言 …… ii
第１章　調査の概要 …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査の方法と経過 …… 1
　　１．発掘調査作業 …… 1
　　２．報告書整理作業 …… 2
第２章　遺跡の立地と環境 …… 4
　第１節　遺跡の地理的環境 …… 4
　第２節　周辺の歴史的環境 …… 4
第３章　発掘された遺構と遺物 …… 14
　第１節　信包中原田１号窯と灰原の概要 …… 14
　第２節　出土遺物 …… 18
　　１．須恵器類 …… 18
　　２．瓦類 …… 36
　　３．灰釉陶器・土師器・陶製品 …… 39
第４章　総　括 …… 67
写真図版
報告書抄録

挿図目次

第１図　信包中原田古窯跡の位置と周辺の地形１ ……3
第２図　古川・国府盆地とその周辺における主な遺跡分布図……5
第３図　信包中原田古窯跡の位置と周辺の主な遺跡…7
第４図　信包中原田古窯跡の位置と周辺の地形２ ……9
第５図　信包中原田１号窯跡……17
第６図　信包中原田１号窯跡出土須恵器分類図１ ….20
第７図　信包中原田１号窯跡出土須恵器分類図２ ….21
第８図　信包中原田古窯跡（須恵器類）１ ……24
第９図　信包中原田古窯跡（須恵器類）２ ……25
第10図　信包中原田古窯跡（須恵器類）３ ……26
第11図　信包中原田古窯跡（須恵器類）４ ……27
第12図　信包中原田古窯跡（須恵器類）５ ……28
第13図　信包中原田古窯跡（須恵器類）６ ……29
第14図　信包中原田古窯跡（須恵器類）７ ……30
第15図　信包中原田古窯跡（須恵器類）８ ……31
第16図　信包中原田古窯跡（須恵器類）９ ……32
第17図　信包中原田古窯跡（須恵器類）10 ……33
第18図　信包中原田古窯跡（須恵器類）11 ……34
第19図　信包中原田古窯跡（須恵器類）12 ……35
第20図　信包中原田古窯跡（須恵器類ほか）13……36
第21図　信包中原田古窯跡（瓦類）１ ……40
第22図　信包中原田古窯跡（瓦類）２ ……41
第23図　信包中原田古窯跡（瓦類）３ ……42
第24図　信包中原田古窯跡（瓦類）４ ……43
第25図　信包中原田古窯跡（瓦類）５ ……44
第26図　信包中原田古窯跡（瓦類）６ ……45
第27図　信包中原田古窯跡（瓦類）７ ……46
第28図　信包中原田古窯跡（瓦類）８ ……47
第29図　信包中原田古窯跡（瓦類）９ ……48
第30図　信包中原田古窯跡（瓦類）10 ……49
第31図　信包中原田古窯跡（瓦類）11 ……50
第32図　信包中原田古窯跡（瓦類）12 ……51
第33図　信包中原田古窯跡（瓦類）13 ……52
第34図　信包中原田古窯跡（瓦類）14 ……53
第35図　信包中原田古窯跡（瓦類）15 ……54
第36図　信包中原田古窯跡（瓦類）16 ……55
第37図　信包中原田古窯跡（瓦類）17 ……56
第38図　信包中原田古窯跡（瓦類・陶製品）18……57

表 目 次

第１表　古川・国府盆地とその周辺における主な遺跡 ……13
第２表　信包中原田古窯跡出土遺物（須恵器類）観察表……58
第３表　信包中原田古窯跡出土遺物（瓦類）観察表……63

写真図版目次

図版１　信包中原田古窯跡の遠景（平成28年３月撮影）
信包中原田古窯跡の近景（平成28年３月撮影）
図版２　信包中原田古窯跡の確認時遠景
信包中原田古窯跡の完掘遠景
図版３　信包中原田１号窯跡検出状況（下から）
信包中原田１号窯跡完掘状況遠景（南西から）
信包中原田１号窯跡検出状況（上から）
信包中原田１号窯跡完掘状況近景（南東から）
図版４　信包中原田１号窯跡前庭部付近土層断面（南東から）
信包中原田１号窯跡灰原付近土層断面
図版５　信包中原田１号窯跡燃焼部完掘状況（焚口部から望む）
信包中原田１号窯跡焚口部～燃焼部完掘状況（北西から）
図版６　信包中原田１号窯跡焼成部完掘状況（焚口部から望む）
信包中原田１号窯跡窯尻部完掘状況(南西から）
信包中原田１号窯跡完掘状況（南西から）
信包中原田１号窯跡調査終了時の視察風景
図版７　信包中原田古窯跡出土遺物（須恵器類）１
図版８　信包中原田古窯跡出土遺物（須恵器類）２
図版９　信包中原田古窯跡出土遺物（須恵器類）３
図版10　信包中原田古窯跡出土遺物（須恵器類）４
図版11　信包中原田古窯跡出土遺物（須恵器類）５
図版12　信包中原田古窯跡出土遺物（須恵器類）６
図版13　信包中原田古窯跡出土遺物（須恵器類）７
図版14　信包中原田古窯跡出土遺物（須恵器類）８
図版15　信包中原田古窯跡出土遺物（須恵器類）９
図版16　信包中原田古窯跡出土遺物（須恵器類）10
図版17　信包中原田古窯跡出土遺物（須恵器類）11
図版18　信包中原田古窯跡出土遺物（須恵器類）12
信包中原田古窯跡出土遺物（瓦類）１
図版19　信包中原田古窯跡出土遺物（瓦類）２
図版20　信包中原田古窯跡出土遺物（瓦類）３
図版21　信包中原田古窯跡出土遺物（瓦類）４
図版22　信包中原田古窯跡出土遺物（瓦類）５
図版23　信包中原田古窯跡出土遺物（瓦類）６
図版24　信包中原田古窯跡出土遺物（瓦類）７
図版25　信包中原田古窯跡出土遺物（瓦類）８
図版26　信包中原田古窯跡出土遺物（瓦類）９
図版27　信包中原田古窯跡出土遺物（瓦類）10
図版28　信包中原田古窯跡出土遺物（瓦類）11
図版29　信包中原田古窯跡出土遺物（瓦類）12
図版30　信包中原田古窯跡出土遺物（瓦類）13
図版31　信包中原田古窯跡出土遺物（瓦類）14
図版32　信包中原田古窯跡出土遺物（瓦類）15
図版33　信包中原田古窯跡出土遺物（瓦類）16
図版34　信包中原田古窯跡出土遺物（瓦類）17
図版35　信包中原田古窯跡出土遺物（瓦類）18
図版36　信包中原田古窯跡出土遺物（瓦類）19
図版37　信包中原田古窯跡出土遺物（瓦類）20
図版38　信包中原田古窯跡出土遺物（瓦類）21
図版39　信包中原田古窯跡出土遺物（瓦類）22
図版40　信包中原田古窯跡出土遺物（瓦類）23
図版41　信包中原田古窯跡出土遺物（瓦類）24

第１章　調査の概要

第１節　調査に至る経緯

信包中原田古窯跡は、飛騨市古川町信包字中原田（旧吉城郡古川町大字信包字中原田）に位置する。

当遺跡周辺は、戦前から瓦や須恵器などの破片が田畑から採集されていたため、古くから窯跡の存在が指摘されていた。昭和９年には郷土史家の角竹喜登氏や上杉一枝氏らが中原田地区一帯の確認調査を実施したが窯跡の発見には至らなかった。したがって、本格的な発掘調査は今回が初めてとなった。

発掘調査の対象となったのは、五ヶ村圃場整備事業に伴うものである。遺跡発見の経緯について、昭和53年９月15日発行の「北飛ニュース」は、工事施行中の同年９月４日大型ブルドーザーが圃場整備地内の丘陵裾を削り取っていたころ、多数の瓦や須恵器の破片が出土したと報じている。施工者から連絡を受けた古川町教育委員会（現飛騨市教育委員会）では、古川町史編さん委員である大野政雄氏（岐阜県文化財保護審議会委員・日本考古学協会員）ならびに岐阜県教育委員会文化課へ連絡を入れた。９月８日に現地を訪れた大野氏は、瓦や須恵器の破片が多量に出土している状況から圃場整備地区に灰原や、農道を挟んだ丘陵南東緩斜面に窯跡が存在すると予測した。

大野氏の指摘をもとに、古川町教育委員会では関係部局と協議を執り行った結果、圃場整備事業に影響を受ける灰原部分については発掘調査を行い、また窯体本体については存在を確認したのち発掘調査を実施し、その後は窯体を埋め戻して保存することとなった。

古川町教育委員会では、文化財保護法第57条の５の規定により昭和53年９月８日を遺跡発見日とし、昭和53年９月９日付け古教社第95号にて遺跡発見届出書を文化庁長官宛に提出した。また、同法98条の２の規定により同９日付け古教社発第96号にて、埋蔵文化財包蔵地の発掘調査の施行について文化庁長官宛に通知した。同通知では、発掘調査担当者を大野政雄氏、土地所有者の発掘調査承諾を同年９月９日、着手を同年９月18日とした。文化庁からは、昭和53年10月30日付け委保第５の3989号にて遺跡の発見と本発掘調査の実施について通知がなされた。

発掘調査は昭和53年９月中旬から11月中旬にかけて約２ヶ月間の予定で行い、その後、一部整理を進めたが、本格的な二次整理作業は町村合併を経て飛騨市に引き継がれ、平成27年度に飛騨市が株式会社玉川文化財研究所に委託して実施した。発掘調査報告書は平成28年度に刊行することとなった。

第２節　調査の方法と経過

１．発掘調査作業（昭和53年９月中旬～11月中旬）

信包中原田古窯跡は、昭和53年９月の旧古川町大字信包中原田地内の五ヶ村圃場整備事業施行中に発見され、協議が概ね終了した９月中旬から主に古窯跡の実態を解明するための発掘調査を開始した。

まず窯本体の位置および規模などを確認するため、窯跡の存在が予想される山林の伐採から開始し、その後、表土掘削に着手して表土直下で窯体の平面確認を進めた。この段階で調査地の地区割を行い、斜面上方の窯体から下方の灰原にかけて主軸ベルトを設定し、窯体の構造および灰原の確認を目的に主軸方向に直交する土層観察用のベルトを数本設けた。このうち斜面下方に設定したベルトにおいて、

厚さ１ｍ以上の灰原を検出した。灰原は圃場整備地区にまで及んでおり、窯跡発見の契機になった。

窯体部分は、すでに天井部が崩落していたため高さや構造などは不明であるが、前庭部、燃焼部、焼成部、煙道ともほぼ完全な形を留めており、その構造は半地下式の無階有段の登窯と考えられる。

調査時において窯跡出土資料として取り上げた遺物は瓦類と須恵器類で占められる。それらは遺物整理箱（55×39×14㎝）に換算して60箱分である（洗浄後の収納状態）。その大半は窯の前庭部付近から斜面下方の灰原にかけて出土したもので、瓦類と須恵器類の割合は整理箱で換算すると７対３で瓦類が主体であった。また、瓦類の中には鴟尾や軒丸瓦（八葉素弁蓮華文・八葉単弁蓮華文）なども出土しており、寿楽寺廃寺出土の鴟尾や軒丸瓦と同型式であることから両者間の受給関係が明らかにされた。なお、当時は瓦陶兼業窯として理解されていた。

発掘調査は11月中旬まで行い、11月21日に現地で新聞記者会見、22・23日現地説明会が実施され、その後、埋め戻し作業を経て、11月下旬に終了した。

調査終了後、報告書の整理作業は中断していたが、古川町内において上町遺跡Ｄ地点や向町地点（古町廃寺）、杉崎廃寺跡などの調査事例が起こり、盆地内出土瓦類の比較検討の必要が生じた。筆者らはこれら遺跡の発掘調査に関わったことから信包中原田古窯跡出土の瓦や須恵器などの洗浄・注記に携わることになり、平成３～５年にかけて実施した。さらに、瓦・須恵器類の一部については、大野政雄氏のご配慮により蛍光Ｘ線分析を行い、その成果を上町遺跡Ｄ地点の発掘調査報告書に掲載することができた（古川町教育委員会 1991）。

２．報告書整理作業（平成27年７月１日～平成28年３月23日）

飛騨市教育委員会は、過去の発掘調査における未報告分（信包中原田古窯跡）について、飛騨市と株式会社玉川文化財研究所との間で、〔埋蔵文化財発掘調査等事業－信包中原田古窯跡二次整理作業等委託－（飛市教委－９号）〕に基づく二次整理作業等委託業務を平成27年７月１日に締結し、飛騨市教育委員会事務局より業務委託を受けた株式会社玉川文化財研究所がその整理業務を担うこととなった。業務期間は、平成27年７月１日から平成28年３月23日までの９ヶ月間。本業務の管理技術者として河合英夫が担当することとなった。

信包中原田古窯跡の二次整理作業等委託業務として、以下の整理作業を行った。

１．遺構関連　周辺遺跡の分布図、窯跡の遺構図作成、同デジタルトレース、版下作成。遺構写真の焼き付けと版下作成。

２．遺物関連　出土遺物（瓦・須恵器類）の接合、同復元、同摘出。摘出遺物（瓦・須恵器類）の実測・拓本、同デジタルトレース。実測遺物の版下作成、実測遺物の写真撮影と版下作成。

３．原稿執筆および割付作業。

なお、調査終了後、整理開始までの期間が長かったこととや、調査担当者の大野政雄氏が逝去されたことなどに起因して、窯跡に関係する図面類の一部が確認できない状況にあった。そのため、今回の報告書の作成作業にあたっては、遺跡や遺構、出土遺物の詳細に関しては大野氏が残された記録類や「中原田古窯跡調査メモ」（昭53.11.21）ならびに写真資料（モノクロ・カラーフィルム）、社会教育課に保管されていた「中原田古窯跡発見届発掘調査関係綴」などをもとに調査の概要や窯跡の図面を作成した。瓦類や須恵器類などの遺物に関しては、個々に記された情報をもとに出土位置を判断したが、なかには断定できないものもあった。

第１図　信包中原田古窯跡の位置と周辺の地形１（１/2,500）

第２章　遺跡の立地と環境

第１節　遺跡の地理的環境

信包中原田古窯跡は、岐阜県飛騨市古川町（旧吉城郡古川町）信包字中原田264番地ほかに所在し、ＪＲ高山本線飛騨細江駅の南西約1.1㎞に位置する。古窯跡から古川町の市街地へは南東方向に５㎞ほどで、徒歩で概ね１時間ほどである。

飛騨市は、岐阜県の最北端に位置し、平成の大合併によって吉城郡内の４自治体（古川町、神岡町、宮川村、河合村）が合併し誕生した。北は富山県と県境を接し、南と東は高山市、西は白川村と接する。古川町は古川・国府盆地を中心に、北は流葉山から本堂山にかけての稜線により宮川村および河合村と接し、西は尾崎山・猪臥山の連峰により大野郡清見村（現高山市）、南は猪臥山・安房山の支脈により国府町（現高山市）、東は安房山から数河峠の背梁により神岡町に接する。また、北端に位置する神岡町および宮川村は富山県境と接している。

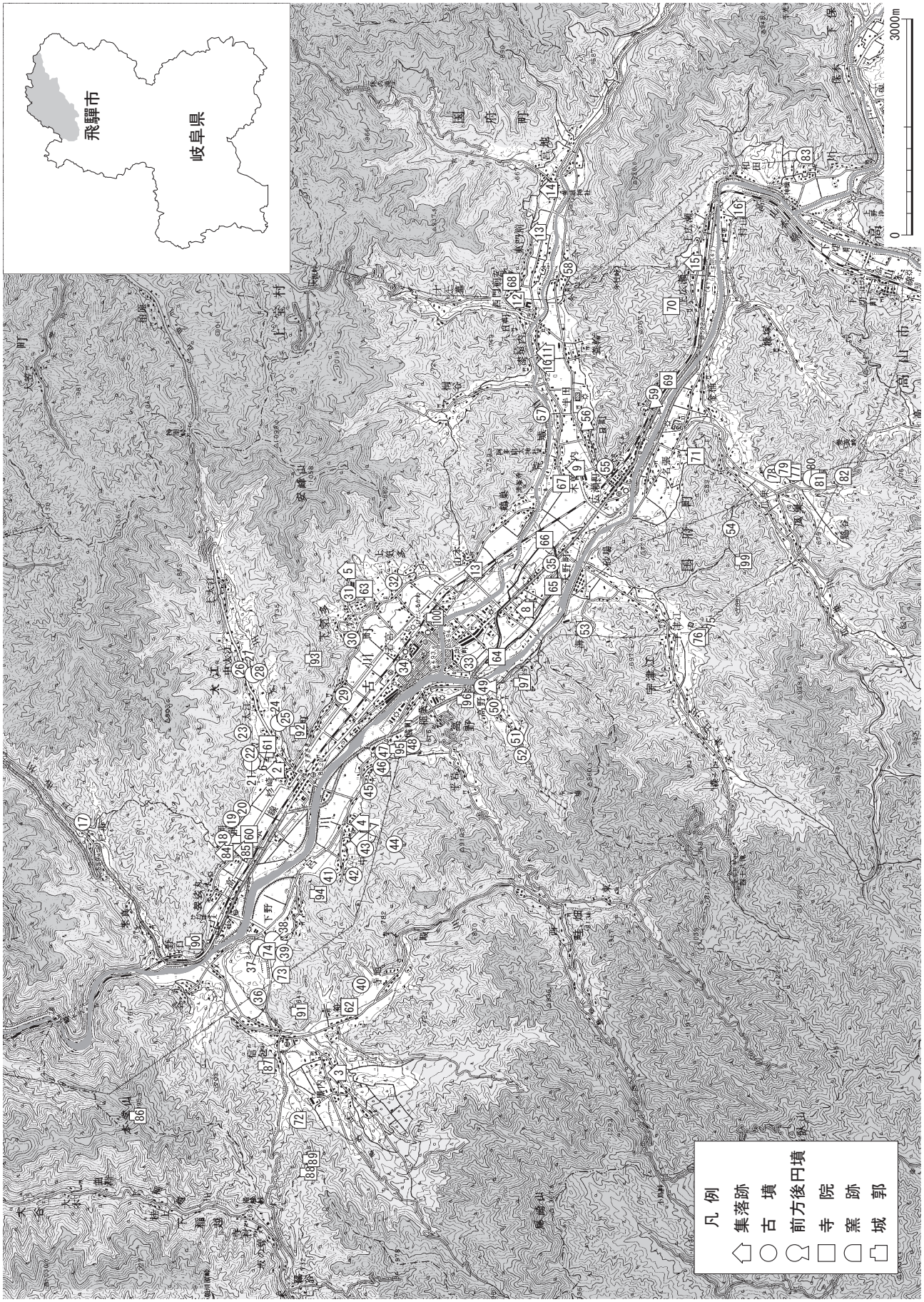
地勢的には、神通川水系高原川流域にあたる東部域と、同水系宮川流域にあたる西部域に分かれ、両者の間を山地が分かち、宮川沿いの古川・国府盆地と高原川沿いの河岸段丘上にややまとまった平坦地がある以外は、宮川および高原川とそれらの支流に沿って小規模な山間平坦地が点在する程度で、他は急峻な山地が連なっている。古川市街地の標高は480～500m、神岡市街地では400m程度である。

窯跡が所在する古川・国府盆地は、主に宮川流域に形成された細長く延びる山間盆地である。盆地のほぼ中央に市街地が形成され、周囲には1000m級の山々がすぐ近くを囲む。宮川は盆地のほぼ中央付近で荒城川と合流し、盆地の西側を北西に向かって緩やかに蛇行して北西端の古川町袈裟丸付近まで続く。長さは南東から北西方向に約10km、幅は古川町の市街地付近で最大でも1.8㎞程度と狭い。ＪＲ高山本線や国道41号もほぼ宮川に沿う。平坦地は主に宮川と荒城川の氾濫砂礫によって形成され、周囲はいくつもの支流により細長い段丘や小丘陵、扇状地、緩斜面などに枝分かれしている。

今次報告の信包中原田古窯跡は盆地の西北寄りに位置し、宮川左岸の下野から信包に至る丹生坂（はねざか）をやや上った南西側の丘陵先端付近に所在する。この丘陵は南西から北東に向かってなだらかに延びるもので、窯跡は丘陵先端付近の南東斜面中腹に築かれている。丘陵の頂部には向小島城跡が築造され、山頂からは古川・国府盆地を一望できる。窯跡の焚口付近で標高約507m、山頂との比高差は約140m、宮川左岸の下野地区で480m前後である。また、窯跡に近い宮川左岸の段丘上には６世紀初頭頃の造営とされる信包八幡神社古墳（前方後円墳・県史跡）が所在している。

第２節　周辺の歴史的環境

飛騨地方には現在のところ、７世紀から８世紀にかけて造営された古代寺院跡が、伝承地を含めて16ヶ所ほど確認されている。美濃や尾張では、同時期の寺院跡が40ヶ寺以上を数えるのにくらべると三分の一程度であるが、荒城・大野の二郡という国の規模からすれば、その数はむしろ多いといえる。さらに、これら16ヶ寺は、すべて宮川流域の狭隘な二つの盆地－高山盆地、古川・国府盆地－に集中しており、その密集度は特筆すべきものとなっている。



第２図　古川・国府盆地とその周辺における主な遺跡分布図（１/75,000）

飛騨市古川町内には、縄文時代から中近世に至る時代の遺跡が数多く発見されているが、ここでは信包中原田古窯跡に関連する盆地内の古墳時代以降、奈良・平安時代を中心とする主な遺跡について概観したい。なお、第２図に使用した「古川・国府盆地とその周辺における主な遺跡分布図」は古川町史の編纂時に作成した『飛騨古川　歴史をみつめて』をもとに作成した（飛騨市 2015）。同様に、周辺の主な遺跡については、『上町遺跡向町地点』（飛騨市教育委員会 2013）の報告書の記載に際して詳細に記したので、ここでは向町地点を参考にして記述した。

古川・国府盆地が古墳時代以降、高山盆地とともに飛騨の中心をなしていたことは古墳の数や古代寺院の様相からも窺い知ることができる。それを顕著に示す事例として古墳の数が挙げられる。現在までに知られているだけでも古川町で103基、国府町で387基を数え、すでに消滅したものも含めると500基を超すと推測されている（岐阜県教育委員会 1990、国府町史刊行委員会 2007）。これらの多くは横穴式石室を内部主体にもつ後期古墳とみられるが、発掘調査が行われた古墳はきわめて少ないことからその具体相については今後の課題でもある。

盆地内における古墳の成立の時期については、近年国府町の南垣内遺跡㊽で３基の円墳が調査され、５世紀初頭のものであることがわかってきた。古川町の上町Ｄ地点⑧では一辺の中央に陸橋をもつ、古墳時代前期初頭の方形周溝墓の存在も明らかにされており、飛騨に前期古墳が確認される日もそう遠くないものと思われる。また、近年国府町の三日町大塚古墳㊻では周溝の確認により前方後円墳の存在が確認され、飛騨地域では最大の古墳であることがわかってきた（国府町史刊行委員会 2007）。古墳の築造年代については主体部の調査を待たなければならないが、墳形の形状から４世紀代に遡る可能性も十分あり、飛騨における前期古墳の存在もいよいよ現実味を帯びてきたといえる。

前述までの資料が公になるまでは、飛騨地方で最古の古墳とされてきた国府町広瀬の亀塚（かめづか）古墳㊺は５世紀前半頃に位置づけられてきた大形の円墳である。明治28年に小学校建設により削り取られたが、明治期の字絵図によると径60ｍにも及ぶと考えられている。埋葬主体は、当時の記録によれば割石を木口積みした竪穴式石室で、甲冑・鉄刀・鉄剣・鉄鉾・鉄鏃などの副葬品が出土している（国府町史刊行委員会 2007）。一方、高山盆地における初期古墳の事例では、冬頭王塚（にんとうおうつか）古墳や赤保木（あかほぎ）５号墳などの小円墳がわずかに知られるのみである。埋葬主体はいずれも川原石積の竪穴式石室で、５世紀中頃から後半の年代が与えられている（高山市教育委員会 1971・1985）。なお、高山盆地に前方後円墳は、現在までのところ確認されていない。

このように飛騨における古墳時代初期の展開をみると、古川・国府盆地でもとくに旧国府町荒城谷寄りの南側に面する平野部から緩斜面にかけて築造されていく傾向が窺え、この地域が飛騨における初期の古墳を築造し得る豪族の中心基盤地域であったと考えられる。

盆地内における後期の様相は、古川町信包の信包八幡神社（のぶかはちまんじんじゃ）古墳㊳に示される定型化した大形の前方後円墳が注目される。明治24年に主体部の発掘が行われ、その際に勾玉をはじめとする馬具や武器類などの副葬品が出土している。これらの資料は京都国立博物館に保管され、近年八賀晋氏による測量調査の成果とともにまとめられている（飛騨市教育委員会 2004）。これらの成果によれば、全長64ｍの前方後円墳で、石室は扁平な割石を小口積みにして構築した無袖式の横穴式石室である。本古墳の年代観は馬具や鉄鏃の型式から６世紀初頭に位置づけ、飛騨の横穴式石室の導入時期としている。一般に飛騨の古墳文化を考えるとき美濃と飛騨の対比で捉える向きが多いが、藤田富士夫氏は扁平な割石を用いた小口積みの構築技術は美濃では確認できないことから、石川県下の竪穴系横穴式石室と関

第３図　信包中原田古窯跡の位置と周辺の主な遺跡（１/30,000）

連づけて説明している（藤田 1990）。この手法で築造された横穴式石室は信包八幡神社古墳を初現として、高山市小丸山古墳や国府町かうと洞２号墳㊹、国府町うしろご３号墳、古川町沢２号墳、さらに７世紀代の小石室墳などにも採用され、系譜的な繋がりが指摘されている。

また、飛騨地方における古墳で注目されるのは７世紀代、とくに終末期の頃の横穴式石室墳である。その多くは円墳であるが、７世紀後半頃の築造とみられる４基の方墳は注目される。方墳はいずれも宮川左岸の山麓に位置し、古川町中野の大洞平（おおほらだいら）１号墳・２号墳・５号墳㊸の３基と、国府町宇津江の海具江（かいぐえ）古墳㊸を加えた計４基で、これらは地域的にごく限られた範囲に造営された点でも注意される。これらの方墳や当該期の円墳でとくに注目されるのは、巨石を用いて築造された横穴式石室墳である。盆地内でもっとも古いものとしては、県下最大の横穴式石室墳である国府町広瀬のこう峠口古墳㊾があげられる。石室は全長18m、高さ３m以上の石室をもつ古墳で、巨大化と巨石化を特徴としており、近年の地下探査の結果では前方後円墳の可能性が指摘されている（国府町史刊行委員会 2007）。

巨石を横穴式石室の石材にする例は７世紀後半の古墳に多くみられるが、先の海具江古墳の場合は奥壁に巨石２枚、側壁に方２mの巨石を含む８石、天井は２石で架構し、古川町髙野の水上古墳㊿の場合は奥壁に巨石１枚、左壁は上下２段積みで６石、右壁は下段２石・上段４石、天井は２石で架構している。古川町内では髙野の光泉寺古墳㊷や中野の大洞平１号墳㊸などでも知られており、巨石を用いて構築された古川・国府盆地の石室墳は、近畿の後期古墳と比べても遜色のない石室といえよう。なお、国府町のかうと洞１号墳㊹では玄室に巨石を用いているが、羨道は割石を木口積みした形態である。

この他に盆地の山塊や山腹には小円墳からなる後期の群集墳が多く確認されている。前方後円墳に繋がる連続性には乏しいが、これらの分布をもとに盆地内の地域圏を類推すると、南東側では荒城谷の開口部付近を中心とする広瀬･半田一帯、宮川左岸の海具江一帯、南西側では宮川左岸の髙野一帯、やや下流の上野・中野一帯、北西側では下野・信包を中心とする一帯、北東側では宮川右岸の太江を中心とする一帯などの小地域を基盤とする、それぞれまとまりをもっていたことが看取される。

次に本窯跡とも関連する飛騨地方の古代寺院についてみると、古川と高山の両盆地における寺院の分布は、白鳳期の寺院では古川・国府盆地に11ヶ寺（杉崎廃寺㊿・寿楽寺廃寺(61)・沢廃寺(63)・古町廃寺(64)・上町廃寺(65)・塔ノ腰廃寺(66)・堂前廃寺(67)・安国寺廃寺(68)・石橋廃寺(69)・光寿庵跡(70)・名張廃寺(71)）、高山盆地に３ヶ寺（三仏寺廃寺・東光寺跡・大幢寺跡）の計14ヶ寺が知られる。これらに飛騨国分寺と尼寺を加えると、実に16ヶ寺を数え、これらの寺が狭小な飛騨の地に甍を並べていたことになり、飛鳥や奈良の寺院建立の姿を彷彿させる。この分布からもわかるように初期の寺院造営の中心は古川・国府盆地であったことが窺えるとともに、寺院造営主体者の地域領域の姿がみえるようである。

これらのうちで、調査が行われた寺院は、古川・国府盆地では杉崎廃寺㊿、寿楽寺廃寺(61)、古町廃寺(64)、石橋廃寺(69)の４ヶ寺と、高山盆地では三仏寺廃寺の１ヶ所のみである。

杉崎廃寺㊿は、古くから金堂の礎石と二重孔式の塔心楚の存在が知られており、県営土地改良総合整備事業が計画されたために、平成３年度から範囲確認に発掘調査が実施され、白鳳期に創建された主要伽藍が明確になるともに、伽藍中枢部の区画施設や内部に敷設された石敷などが明らかにされた。また西側の排水施設からは郷名が記された郡符木簡が出土しており、行政末端機構に結びつくものとしてとくに注目された。また、最近では寺域の確認調査が行われ、寺院空間の様相が判明しつつある（飛騨市教育委員会 2012）。

第４図　信包中原田古窯跡の位置と周辺の地形２（1/10,000）

寿楽寺廃寺㊶は、杉崎廃寺跡の東へ約1.5㎞に位置する。平成10年から12年にかけて岐阜県文化財保護センターにより調査が行われ、飛騨ではもっとも古い寺院の一つと考えられており、その創建は７世紀後半と推測されている。遺構は、講堂跡とそれに取りつく回廊跡が発見されている。遺物では、「高家寺」と墨書された郷名を冠した須恵器坏が注目される。また、鴟尾や塑像、蹄脚硯、三足火舎など、寺院に関わる資料も多く出土している。出土した素弁系蓮華文軒丸瓦は創建期の軒丸瓦とされ、この瓦は今次報告の信包中原田古窯跡㉓で焼かれている。この素弁系の軒丸瓦は特徴的な技法であり、近江衣川廃寺、信濃明科廃寺、甲斐天狗沢瓦窯などにも分布し、衣川廃寺が初現とされている。同系統の瓦が畿内（近江）から延びる交通路（東山道／駅路）に沿って点在することは、瓦の伝播を考える上でも注目される（櫛原ほか 1990）。また、尾張元興寺や河内野中寺と同系の忍冬文軒丸瓦も出土しており、この事例も有力寺院との係わりが窺え、飛騨で最古の寺といわれる所以である。

古町廃寺㊹は、上町遺跡Ｄ地点⑧の調査で瓦類がまとまって出土したことから、岐阜県遺跡地図の改訂版で命名された廃寺跡である（岐阜県教育委員会 1990）。寺院関連の遺構は確認されなかったが、出土した単弁八葉蓮華文軒丸瓦は盆地南部の芦谷窯跡（丸山窯跡）㉕や瓜巣わせ洞窯跡（下り谷窯跡）㉒などからの供給であるのに対し、盆地北部の杉崎廃寺や寿楽寺廃寺などの供給元である信包中原田古窯跡の供給領域とは異なっている。

石橋廃寺㊾は、国府町上広瀬に所在する寺院推定地で、戦前から塔心礎や人物戯画等が線刻された平瓦が知られていた。昭和60年代に調査が行われたが寺院に関わる遺構は発見されていない。また、飛騨地方では初めての畿内産土師器が出土している。

高山盆地では三仏寺廃寺がその代表例で、寿楽寺廃寺と並んで飛騨地方ではもっとも古い寺院跡の一つとみられている。創建年代は、寿楽寺廃寺と同様に７世紀後半に遡ると考えられている。「大寺山田寺」と篦書きされた平瓦も出土しており、のちの官の寺としての性格も有するとみられる。

飛騨に寺院があったことが、初めて文献に登場するのは『日本書紀』朱鳥元年（686）の大津皇子の謀反に連座して新羅僧行心が「飛騨の伽藍」へ移配されたという記事である。これが事実であれば、７世紀後半には中央にまで知られた寺院が飛騨にあったことがわかる。飛騨はまた、古代にあっては木工技術を背景に、調庸を納める代わりに木工が交替で京師に勤番し、造宮省や木工寮で各種建物の造営に従事する「匠丁の国」としても知られる。大宝令の賦役令斐陀国条は飛騨国のみに適用された、きわめて例外的な規程であった。

狭い盆地内に伽藍が立ち並ぶ景観は、当地域の先進性の象徴ともなっているが、律令制下における飛騨の特殊性を考慮すれば、賦役令斐陀国条にみえる工匠との関係が想定されるのである。

大宝２（702）年に大宝律令が施行され、飛騨国は東山道に属し、大野郡と荒城郡からなる下国で、国府の所在地は明確ではないが、高山市内に比定する説が有力である。国分寺は高山市内の現国分寺の場所にあったとみられ、国分尼寺跡はその西方の現辻ヶ森三社において金堂跡が確認されている。この頃になると政治や行政の中心は、古川・国府盆地から高山盆地に移ったものと考えられている。

白鳳期の寺に瓦を供給した瓦窯としては、古川町では信包中原田古窯跡㉓、国府町では芦谷窯跡㉕、釜洞窯跡㉗・㉘、瓜巣わせ洞窯跡㉒などがあり、中原田古窯跡以外は瓦陶兼業窯と考えられている。古川町内の須恵器窯としては、信包中原田古窯跡と同じ信包に所在する信包塩屋窯跡㉒や下野羽根坂窯跡㉔などがある。

一方、古墳や寺院関連以外で時期的に重複する遺跡として、古川町内では上町遺跡⑧、太江遺跡⑥、

岡前遺跡①、杉崎廃寺跡⑥⓪、中野山腰遺跡④、中野大洞平遺跡⑦などの調査事例がある。

上町遺跡⑧は、国道41号の国府古川バイパスの新設工事が契機となって発掘調査された遺跡である。昭和62年以来、これまでに30ヶ所以上の発掘調査が行われ、調査面積はすでに16,000㎡以上に達する。時期は古墳時代前期から古代、そして中近世に及んでおり、その範囲は東西約1.5㎞、南北約500ｍにわたると推測される（古川町教育委員会 1991）。古代の遺構では、竪穴住居跡や掘立柱建物跡が多く確認され、なかでもＤ地点で発見された東西や南北に配置された複数棟からなる掘立柱建物跡は、地方支配の拠点とも目される荒城郡衙関連の施設ないし豪族居宅をイメージさせる遺構と推測される（古川町教育委員会 2001）。このＤ地点の調査をきっかけに、バイパスの波及効果による土地利用の進展に伴い、国道41号沿いのＤ地点に面したトヨタ地点（古川町教育委員会 1994）や金子・氷見地点（古川町教育委員会 2001）、向町地点（飛騨市教育委員会 2013）などの調査が行われている。この間、上町から向町にかけての国道41号沿いが飛騨地方では前例のない、古墳時代から中近世に及ぶ屈指の遺跡であることが判明している。

太江遺跡⑥は、宮川右岸の太江の高台に位置する遺跡で、県道の拡幅工事に伴う一環として、寿楽寺廃寺の北側を含む一帯が平成10年から３ヶ年にわたって県文化財保護センターにより調査された。寺院跡については先に示したとおりであるが、周辺には古墳時代後期から平安時代にわたる居住域であることが判明し、両者の消長関係についてまとめられている（財団法人岐阜県教育文化財団 2005）。

岡前遺跡①は、杉崎廃寺跡の北側の高台に位置する遺跡で、平安期の竪穴住居跡が確認されたほか、飛騨では最初の和同開珎が出土した遺跡（財団法人岐阜県文化財保護センター 1995）として知られている。

杉崎廃寺跡⑥⓪は、古代の寺院跡として著名であるが、廃寺跡の周辺からは古墳時代前期から後期の竪穴住居跡や５世紀代の円墳も確認されている（古川町教育委員会 1998・飛騨市教育委員会 2012）。また、出土した弥生時代後期から古墳時代前期の土器には北陸系の影響が顕著に認められる。

中野大洞平遺跡⑦は宮川左岸の段丘上に位置する遺跡で、縄文時代および奈良時代の竪穴住居跡が確認されている（財団法人岐阜県教育文化財団 2006）。この遺跡の並びには縄文中期の集落跡として著名な中野山腰遺跡④が調査されているが、この地区からは平安時代の竪穴住居跡が発見されている（古川町教育委員会 1993）。また、宮川支流の殿川流域の段丘上には平安時代の山岳寺院跡とされる西ヶ洞廃寺⑥②が調査されている（財団法人岐阜県教育文化財団 2006）。

中世では、上町遺跡Ｄ地点⑧で得られた資料が特筆される。ここでは、掘立柱建物跡や竪穴状遺構、配石遺構、集石遺構、溝、道路遺構などが確認されている。遺物では12世紀から16世紀代の舶載磁器（龍泉窯系青磁碗類）や国産陶器（山茶碗・天目碗・常滑瓶・瀬戸灰釉瓶子・摺鉢・平鉢類）などが出土している。発見された遺構・遺物の多くは、宮川対岸の山塊に築造された古川城（蛤城）⑨⑦との関連が窺える資料と考えられる。杉崎廃寺跡の調査では中世と考えられる集石遺構が確認されている。地元では杉崎廃寺跡の礎石について宮谷寺跡という伝承がある。宮谷寺は小島時光の菩提寺とされるもので、杉崎廃寺跡の背後の谷を宮谷というが、その名称は宮谷のほとりにあってこそ然るべきあり、今後の考古学的課題でもある。

南北朝時代に至ると姉小路家綱が飛騨国司に補任され、初めは黒内城に入城し、のちに小島城⑨②へ移り北方に拠点を置いたとされる。一方、幕府は南朝に対抗し、佐々木（京極）高氏氏を飛騨国守護に補任し、南の益田から大野郡を勢力範囲に治めた。姉小路氏はこの抗争に敗れ、小島（小島城⑨②）、

小鷹利（向小島城⑨⑪）、古河（古川城⑨⑦）の三家に分かれて鼎立することになった。応仁の乱の影響は山国飛騨にも及び、戦国期には北部の江馬氏、南部の三木氏（京極氏の被官）が勢力をほぼ二分していた。当時飛騨は甲斐の武田、越後の上杉の対立抗争の渦中にあって去就が定まらなかったが、天正10（1582）年に三木氏が江馬氏を破り飛騨の大部分を平定した。その後、まもなく秀吉の意を受けた金森長近が飛騨を攻略して三木氏を滅ぼして飛騨一円を平定した。長近は入部当初、鍋山城を居城としたが、天正16（1588）年頃より高山城の築城に着手したとみられる。ほぼ同じ頃より飛騨では唯一の平城である増島城⑩⓪が荒城川沿いに築かれる。平成９年より本丸・二の丸曲輪を中心に確認調査が行われ、石垣・堀割などの曲輪の状況が明らかにされている（飛騨市教育委員会 2010）。

引用・参考文献

高山市教育委員会 1971『冬頭大塚発掘報告』

高山市教育委員会 1985「赤保木５号古墳」『高山市内遺跡発掘調査報告書』高山市埋蔵文化財調査報告第22号

岐阜県高山市教育委員会 1986『高山城跡発掘調査報告書Ⅰ』

岐阜県高山市教育委員会 1988『高山城跡発掘調査報告書Ⅱ』

国府町教育委員会 1988『飛騨国府シンポジウム 古代の飛騨－その先進性を問う－』

古川町教育委員会 1989『岐阜県吉城郡古川町 上町遺跡Ｃ地点発掘調査報告書』

藤田富士夫 1990「４ 北陸から見た飛騨」『第１回 飛騨国府シンポジウム 古代の飛騨－その先進性を問う－』国府町教育委員会

岐阜県教育委員会 1990『改訂版 岐阜県遺跡地図』

古川町教育委員会 1991『岐阜県吉城郡古川町 上町遺跡Ｄ地点発掘調査報告書』

国府町教育委員会 1993『半田垣内遺跡１次・２次発掘調査報告書』

古川町教育委員会 1994『岐阜県吉城郡古川町 上町遺跡トヨタ地点・０地点・栗原センター地点発掘調査報告書』

名古屋市教育委員会 1994『尾張元興寺発掘調査報告書』

財団法人岐阜県文化財保護センター 1995『岡前遺跡』岐阜県文化財保護センター調査報告書第20集

森浩一・八賀晋編者 1997『飛騨 よみがえる山国の歴史』 株式会社大巧社

古川町教育委員会 1998『岐阜県吉城郡古川町 杉崎廃寺跡発掘調査報告書』

国府町教育委員会 1998『桜本遺跡発掘報告書』

古川町教育委員会 2001『岐阜県吉城郡古川町 上町遺跡金子地点・氷見地点発掘調査報告書』

財団法人岐阜県教育文化財団 2002『太江遺跡・寿楽寺廃寺跡』岐阜県教育文化財団文化財保護センター調査報告書第74集

岐阜県吉城郡国府町教育委員会 2003『三日町大塚古墳』

飛騨市教育委員会 2004『岐阜県史跡 信包八幡神社古墳測量調査報告書』

国府町教育委員会 2004『海具江古墳発掘報告書』

財団法人岐阜県教育文化財団 2005『太江遺跡Ⅱ』岐阜県教育文化財団文化財保護センター調査報告書第94集

国府町教育委員会 2005『三日町大塚遺跡範囲確認調査』

国府町教育委員会 2005『かうと洞１号古墳・２号古墳調査報告書』
国府町教育委員会 2005『南垣内遺跡発掘報告書』
国府町教育委員会 2005『石橋廃寺調査報告書』
財団法人岐阜県教育文化財団 2006『西ヶ洞廃寺跡 中野山越遺跡 中野大洞平遺跡 大洞平５号古墳』岐阜県教育文化財団文化財保護センター調査報告書第98集
国府町史刊行委員会 2007『国府町史』 考古・指定文化財編
飛騨市教育委員会 2010『増島城跡』 飛騨市文化財調査報告書第３集
飛騨市教育委員会 2012『杉崎廃寺跡２』飛騨市文化財調査報告書第５集
飛騨市教育委員会 2013『上町遺跡向町地点』飛騨市文化財調査報告書第６集
飛騨市 2015『飛騨古川　歴史をみつめて』

第１表　古川・国府盆地とその周辺における主な遺跡（第１・２図に対応）

1	岡前遺跡／縄文・古代
2	御番屋敷遺跡／縄文（県史跡）
3	黒内細野遺跡／縄文・古代
4	中野山越遺跡／縄文・古代
5	沢遺跡／縄文
6	太江遺跡／縄文・古代
7	中野大洞平遺跡／縄文・弥生・古墳・古代
8	上町遺跡／弥生・古墳・古代・中近世
9	半田垣内遺跡／弥生後期末～古墳後期
10	桜本遺跡／古墳後期～奈良前期
11	立石遺跡／縄文
12	深沼遺跡／水田跡
13	森ノ木遺跡／縄文
14	荒城神社遺跡／縄文
15	宮ノ下遺跡／縄文・古墳
16	村山遺跡／縄文
17	戸市古屋敷１・２号墳／古墳後期
18	岡前諏訪神社裏１・２号墳／古墳後期
19	杉崎嵯峨山古墳群（１～10号）／古墳後期
20	杉崎嵯峨山古墳／古墳後期
21	稲荷神社古墳群（１～３号）／古墳後期
22	太江多度古墳群（１～８号）／古墳後期
23	太江前平１～３号古墳／古墳後期
24	太江中ケ野１～４号古墳／古墳後期
25	沼町天王洞古墳／古墳後期
26	太江福蔵１・２号墳／古墳後期
27	太江灰古墳／古墳後期
28	太江中日影古墳／古墳後期
29	種村古墳／古墳後期
30	小坂神社跡古墳／古墳後期
31	上気多１～３号古墳／古墳後期
32	上気多古墳／古墳後期
33	五阿弥塚古墳／古墳後期
34	中気多三塚１～３号墳／古墳後期
35	上町三塚１～３号墳／古墳後期
36	丸山古墳／古墳後期
37	羽根坂古墳群（４基）／古墳後期
38	信包八幡神社跡古墳（前方後円墳）／６世紀前
39	八幡古墳／古墳後期
40	寺地西ケ洞１・２号墳／古墳後期
41	中野宮田古墳／古墳後期
42	中野祢宜ヶ洞古墳／古墳後期
43	大洞平古墳群（５基）／古墳後期 方墳－１・２・５号
44	中野山越古墳群（12基）／後期古墳
45	上野水上洞古墳群（17基）／後期古墳
46	上野井西古墳群（５基）／後期古墳
47	上野井西１・２号墳／後期古墳
48	上野城山古墳群（５基）／後期古墳
49	高野溝添古墳／後期古墳
50	高野巾ノ上古墳／後期古墳
51	高野水上円墳／後期古墳
52	高野高泉寺円墳／後期古墳
53	海具江古墳／方墳（７世紀後）
54	かうと洞１・２号墳／（７世紀後）
55	広瀬亀塚古墳／円墳（５世紀）
56	三日町大塚古墳／前方後円墳（５世紀）
57	半田稗洞古墳群（１～５号）／古墳後期
58	南垣内円形周溝墓／４～５世紀
59	こう峠口古墳／前方後円墳（６世紀）
60	杉崎廃寺跡／白鳳（県指定）
61	寿楽寺廃寺（左近廃寺）／白鳳
62	西ヶ洞廃寺跡／平安
63	沢廃寺跡／白鳳
64	古町廃寺跡／白鳳
65	上町廃寺跡（久中廃寺跡）／白鳳
66	塔の腰廃寺跡（大日廃寺跡）／白鳳
67	堂前廃寺跡
68	安国寺廃寺／白鳳
69	石橋廃寺跡／白鳳
70	光寿庵跡／白鳳
71	名張廃寺跡／白鳳
72	信包塩屋古窯跡／須恵器窯
73	**信包中原田古窯跡**/須恵器窯
74	下野羽根坂古窯跡/須恵器窯
75	芦谷古窯跡（丸山古窯）／瓦陶兼窯
76	小手ヶ洞古窯跡群（２基）
77	瓜巣釜洞１号古窯跡
78	瓜巣釜洞２号古窯跡
79	瓜巣大洞古窯跡群（２基）
80	瓜巣小坂古窯跡
81	瓜巣中島古窯跡
82	瓜巣わせ洞古窯跡（下り谷古窯）
83	大畑古窯跡
84	岡前奥御堂跡／中世
85	岡前館跡／中世
86	本堂山城跡／中世
87	城見寺城跡／中世
88	小鷹利城跡／中世
89	黒内城跡／中世
90	野口城跡／中世
91	向小島城跡／中世
92	小島城跡／中世
93	下北城跡／中世
94	池之山城跡／中世
95	落岩城跡／中世
96	百足城跡／中世
97	古川城跡／中世
98	広瀬城跡／中世
99	高堂城跡／中世
100	増島城跡／織豊～近世前

第３章　発見された遺構と遺物

第１節　信包中原田１号窯と灰原の概要

信包中原田古窯跡は、宮川左岸の下野から信包に至る丹生坂をやや登った南西側の丘陵部先端付近に位置している。この小丘陵は南西から北東方向になだらかに延びるもので、窯跡は丘陵先端付近の南東斜面中腹に築造されている。また、灰原は斜面下方から水田面に至る約30m内の範囲に及んでいる。この灰原の分布およびその周辺の踏査より推測すると、この丘陵南東斜面には瓦や須恵器を焼成した複数の窯跡の存在が予想される。また、下野から信包に至る丹生坂の北緩斜面にも９世紀前半ごろと考えられる須恵器を焼成した羽根坂古窯跡が確認されており、この中原田から羽根坂一帯には瓦窯や須恵器窯が築かれていたものと推測される。

窯跡の位置する丘陵地帯の標高は、おおよそ海抜500mから600m程度で、南ないし南西へ向かって次第に高くなる。南西の丘陵頂部に築かれた向小島城跡の山頂で約650m、窯跡の焚口付近で約507m、宮川左岸の下野地区で海抜480m前後である。

丘陵地帯を形成する地層は、古川・国府盆地の周縁地域に広く分布する更新世堆積層である。この地層は比較的凝固度の低い砂礫・砂・粘土からなり、第三紀鮮新世末から第四紀更新世にかけて堆積したものである。この上部堆積層は全体に風化が進み、粘土化が進行している。信包や羽根坂の地域が瓦や須恵器の生産地として100年以上の歴史を保つことのできたのは、丘陵を構成する更新世堆積物層を窯の窯体構造の基盤として、また瓦や須恵器の陶土として利用したことにほかならない。

発掘区域内では１基の窯跡とそれに伴う灰原を検出した。また後述するが、区域内には未確認の須恵器や瓦の窯跡が存在する可能性があるため、本古窯跡を信包中原田１号窯跡と命名して説明を行う。

窯体の中心部は黄褐色粘土質の地山に掘り込まれているが、焼成部の窯尻寄りでは砂質岩や泥岩で構成された手取層を抜いて構築されている。天井は崩落しているが、前庭部、焚口部、燃焼部および焼成部の床面、窯尻などは概ね形を留めており、その構造は半地下式の無階有段登窯と考えられる。

灰原は、窯の前庭部先端から下方へ向かって扇形に広がっていたと考えられるが、瓦や須恵器類の散布状況から調査時には圃場整備による工事の影響でだいぶ削り取られていたと推測される。なお、その一部は、現水田下へ入り込んでいるものと思われる。写真資料から判断すると、調査した部分で灰原（遺物を含む黒色炭化物層）のもっとも厚いところでは１m以上に及ぶものと考えられる。

窯体や灰原から出土した瓦類や須恵器類は、主に窯跡の前庭部付近から斜面下方の灰原にかけての範囲である。瓦類の中には焼成部・燃焼部の注記がわずかにみられるが、大半は灰原からの出土で、窯体内からはほとんど出土していない。瓦類は大半が丸瓦と平瓦で、これらに混じって熨斗瓦や鴟尾、軒丸瓦（素弁八葉蓮華文・単弁八葉蓮華文）などもわずかに出土している。これらと同形式の鴟尾や軒丸瓦は、太江の寿楽寺廃寺からも出土しており、その需給関係が明らかにできたものと考えられる。須恵器類では注記を手がかりに出土位置をみると、灰原以外に、窯体、焚口付近、前庭部などからも出土しており、それら遺物の出土状況から判断すると、信包中原田１号窯は瓦類ではなく、須恵器を焼いた窯の可能性が高い。以下では、大野先生が遺された「中原田古窯跡調査メモ」を掲載し、窯の構造なども含めて須恵器窯なのか、あるいは瓦陶兼業窯なのか、再度検討を加えたい。

中原田古窯跡調査メモ

昭53、11、21

所　在　地　吉城郡古川町大字信包字中原田261・264番地

調査の動機　土地改良工事により灰原が窯跡の近くまで削り取られ、多数の遺物が掘り起こされた。昭和９年角竹喜登・上杉一枝（いずれも故人）らが２回にわたりこのあたりを調査したときには、窯跡の発見にはいたらなかった。

調 査 期 間　昭和53年10月～11月

調 査 概 要　１．時　　代　白鳳時代（奈良前期）

２．構　　造　地下式無段無階登窯

３．形　　態　全長11.2m、幅1.2m、勾配30度前後、主軸方向南東（Ｎ－135°－Ｅ）、天井が崩落し高さは不明であるが、前庭から煙道までほぼ形が残っている。

４．用　　途　瓦陶兼用窯

５．出土遺物　ａ．古瓦－瓦当（八葉素弁蓮華文瓦、八葉単弁蓮華文瓦、とくに後者は花弁を図案化した独剣的なデザイン）、丸瓦、平瓦、堤瓦、甎等破片。

ｂ．須恵器－フタツキ、タカツキ、マリ、ハチ、ツボ、ヘイ、カメ等すべて破片のみ。

６．ま と め　瓦を焼いた窯跡としては県下で最も古い７世紀中ごろ（約1,300年前）、この窯で焼かれた瓦は古川町大字太江字左近（現寿楽寺付近）に建てられた古代寺院の屋瓦に用いられた。

７．保　　存　雪の来る前に埋め戻して長く保存したい。

土地所有者　牛丸勝郎。

以上の大野調査メモおよび遺跡・遺構の写真資料をもとに窯体の構造について整理すると、窯体は砂礫混じりの黄褐色粘土をベースとしている。大野調査メモでは窯の構造について、地下式無段無階登窯としているが、アーチ状の地山を刳り抜いた痕跡が認められず、地下式では天井部の厚さが一定以上ないと強度が保てない。また、後述するが、焼成部の床面上にはテラス状の段が認められること、表土直下20～30㎝程度で窯体が確認できたことから推測すると、半地下式無階有段の登窯と考えられ、天井部は架構式になっていたものと思われる。

窯の規模は、調査メモには全長11.2m、幅1.2mとあるが、全長11.2mは前庭部までを含んだ数値と考えられ、焚口から窯尻までの窯体は8.5m程度であったと推測される。また、幅1.2mは焚口付近の最大幅と思われるが、窯体内は上部が下部よりせり出した構造になっていることから、実際はもう少し幅が広かった可能性がある。窯体の勾配は約30度であることから焚口部から窯尻までの比高差はおおよそ４m強と推測される。第５図は現存していた資料をもとに図上復元したものであるが、全体に細長い形態の窯で、横断面は概ねかまぼこ形を呈している。

焚口部から前庭部にかけては扇状に広がり、この部分が作業スペースと考えられる。床面幅は焚口部付近で1.1～1.2m程度・灰原に向かって1.3mほどのテラス面が形成されている。この下方が灰原であるが、その途中に幅2.4m、奥行2.0m、深さ30㎝前後の土坑状の掘込みがある。

焚口部から燃焼部へは次第にすぼまっている。焚口部から焼成部に至るまでの緩勾配を燃焼部と推測すると、燃焼部は緩やかな傾斜の床面をもち、長さは１ｍ程度と推測される。窯壁は厚さ10㎝前後と考えられ、焚口部から燃焼部の側壁には板石を立て、燃焼部の側壁には角礫を用いて構築している。また、燃焼部付近ではスサ入り粘土による補修箇所も部分的に認められる。焚口部付近では瓦も壁に埋め込まれている。なお、板石や角礫、スサ入り粘土の残片は灰原からも出土している。

焼成部は、燃焼部の傾斜変換部から窯尻に向かって30度前後の勾配で幅を狭めながら立ち上がる。焼成部の床面上には、テラス状の低い段が途中に数段認められる。焼成部の両側壁は燃焼部と同様に両側壁とも角礫を積んで構築され、その隙間にはスサ入り粘土が塗り込まれている。角礫は窯尻付近にも用いられている。

遺存する側壁の高さは50～60㎝、窯尻側では30㎝ほどと推測される。また、焼成部のテラス面には少量の瓦片が床面に密着した状態で残っているが、これらは焼台と考えられる。

焼成部の上方から窯尻にかけては削平されているため煙出しの構造は不明である。また、床面幅は窯尻寄りで40～50㎝と推測され、だいぶ狭くなっている。

つぎに、遺物整理の過程で出てきた疑問のひとつが、この窯で何が焼かれたかということである。この信包中原田１号窯が須恵器窯なのか、瓦窯なのか、それとも瓦陶兼業窯なのか。また、それぞれ別々に焼かれたのか。あるいは先にどちらかを焼いてから、時間が経ったのち別なのが焼かれたのか。

これらを検討するうえで、瓦類や須恵器類の出土状況が重要になるのであるが、出土遺物の多くが灰原からの出土であり、窯体内に残された資料から瓦窯なのか、須恵器窯なのか、あるいは瓦陶兼業窯なのか、直ちに判断できない。瓦類や須恵器類とも当地で焼かれたことは間違いないことから瓦陶兼業窯と呼ばれてきたが、実はその大半が窯の前庭部付近から灰原にかけて出土したものである。

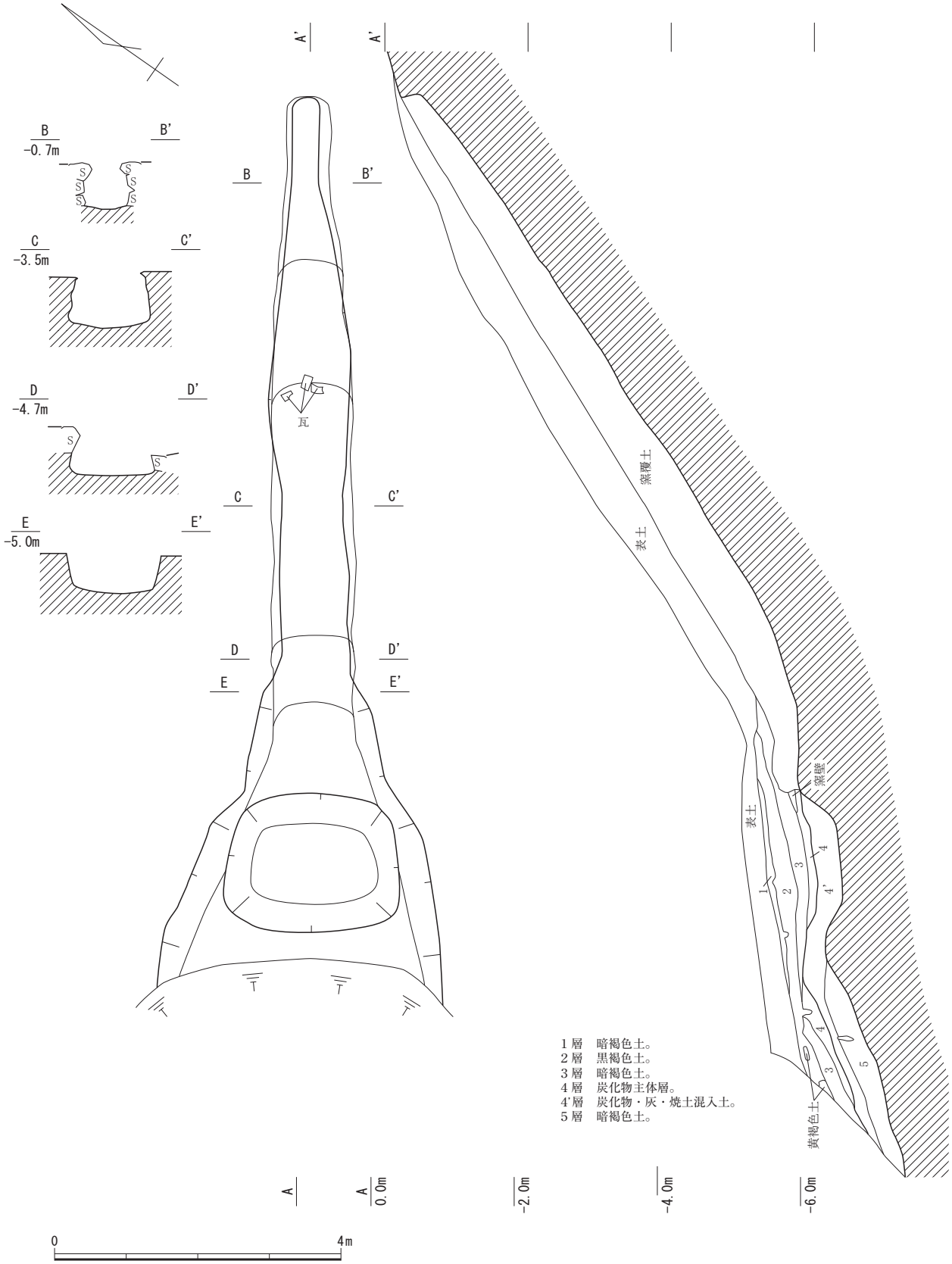
仮に須恵器窯とした場合、須恵器からみた窯の操業年代は８世紀第１四半期の前半頃と推測され、一方、瓦陶兼業窯とした場合では、供給先（寿楽寺廃寺）の創建年代との関係が問題となる。

再度、遺物整理によって得られた所見をもとに、何を焼いた窯なのか、結論を出してみたい。

まず瓦類では、焼成部や燃焼部の出土を示す注記がわずかにみられるが、大半は灰原からの出土で、窯体からはほとんど出土していない。注記から出土位置がわかる瓦は、焼成部の床面（テラス面）に密着した状態で出土したものと、焚口部の壁に埋め込まれていたものである。これらの瓦はいずれも製品の残存としてではなく、焼台や焚口などの壁に用いられていたと考えられるのが穏当であろう。また、燃焼部や焚口部、前庭部にかけても小破片が出土しているが、これらも瓦も壁や天井部などの架構用材であった可能性が考えられる。さらに灰原出土の資料であるが、造瓦技術の視点からみると、桶巻作りと一枚作りの平瓦が出土しているにもかかわらず、時期の異なる瓦を同一視してきたことも問題を複雑にしてきた要因と考えられる。

一方、須恵器類でも同様に、注記を手がかりに出土位置をみると、多くは灰原からの出土であるが、燃焼部、燃焼部下層、焚口部、焚口部下層、前庭部などの表記は瓦類よりも確実に多く認められる。また、上記の資料は形式的にも一括遺物として取り扱えるものであり、灰原出土の瓦類とは分離して扱うべきものと考えられる。

以上のような観察結果および出土遺物の検討をもとに、この窯で何を焼いていたかを推測すると、信包中原田１号窯は瓦ではなく須恵器を焼いた窯であったといえよう。



第５図　信包中原田１号窯跡（１/80）

第２節　出土遺物

信包中原田１号窯において出土した遺物は瓦類と須恵器類であるが、上述の観察結果の所見からは須恵器窯であることがわかった。以下では、窯跡および灰原出土資料の須恵器と、灰原出土の瓦とに分けて説明していく。

１．須恵器類（第６～18図、図版７～18）

須恵器類は、遺物整理箱に18箱分が出土している。これらの多くは灰原出土のものであるが、窯の燃焼部や焚口部、前庭部などからも若干検出されている。前章および前節でも述べたことであるが、出土状況の詳細については不明な点が多い。本来、検討すべき窯の操業面との関係や灰原の層位関係などにつても触れなければならないことであるが、この点については本報告では提示できないことをお断りしておきたい。

まず出土資料の掲載にあたっては、須恵器類の器種分類（第６・７図）を示したのち、器種ごとの概要を説明したい。その分類にあたっては、都城の土器集成（古代の土器研究会編 1991ほか）や猿投窯の器種分類（三河考古刊行会 1999ほか）などを参考にして種別した。提示した須恵器類の多くは、灰原出土の資料であるため、その性格上、時期の異なる須恵器類も含まれている。おそらく隣接地に別な時期の窯が存在するものと考えられる。

最初に器種ごとに、それぞれの概要について説明を行う。

須恵器には、蓋・坏・埦・盤・高坏などの食膳具、壺・甕・鉢などの貯蔵具、水瓶ないし浄瓶などの供養具、それに円面硯などの文房具がある。

蓋類には坏類・高坏類・壺類に対応する各種の蓋がある。坏類の蓋には、坏Ｈ蓋（坏蓋）、坏Ｇ蓋（返り蓋）、摘み蓋の３種類がある。坏Ｈ蓋は、古墳時代以来の坏Ｈ身（坏身）に対応する蓋である。坏Ｇ蓋は天井部に摘みを有し、内面に返りのある蓋である。坏類との関係では、ヘラ切り技法による平底の坏Ｇ身に対応するものと考えられる。摘み蓋は天井部に摘みを有し、口縁端部が折り返された蓋である。坏類との関係では、回転ヘラ削り技法による平底の坏Ａないし高台をもつ坏Ｂに対応するものと考えられる。高坏に対応する蓋（有蓋高坏蓋）は、古墳時代以来の伝統的な坏Ｈ蓋の天井部に摘みをもつものである。壺類に対応する蓋は、薬壺や短頸壺などの小形品に伴う蓋と考えられる。

坏類には、坏Ｈ身、坏Ｇ身、坏Ａ、坏Ｂ、埦Ａの５種がある。坏Ｈ身は、古墳時代以来の坏Ｈ蓋に対応するもの。坏Ｇ身はヘラ切り技法による平底の坏で、口径の違いから数種に細別できる。坏Ａは回転ヘラ削り技法による平底の坏で、口径・器高の違いから数種に細別できる。坏Ｂは坏Ａに高台を付けたものである。口径・器高などの違いから数種に細別できる。埦Ａは無台坏のうち、底部の切り離し技法が回転糸切りのものである。この資料は灰原から１点出土したのみである。

盤類には、いわゆる無台の盤と、脚台を有する高盤の２種がある。後者は脚台径の違いから数種に細別できる。

高坏類には、蓋の有無、坏部の深さ、脚の長短などの違いから数種に細別できる。これらのうちで、その中心は無蓋短脚高坏と推測され、長脚の高坏は古墳時代に遡るものと考えられる。

壺類には、長頸壺（瓶）、短頸壺、広口壺、横瓶の４種がある。長頸壺は口縁部形態、頸・胴部の違い、短頸壺・広口壺は口縁部の違いから数種に種別できる。なお、フラスコ瓶・平瓶・提瓶などは

確認されていない。

甕類には、大中小とバラエティに富み、口縁部の違いからさらに細別できる。出土量は器種の中でもっとも多いが、全容のわかるものはない。底部の形態は平底の個体が確認できないことからすべて丸底と推測される。外面は主に平行文叩きによって整えられ、内面は青海波文や同心円文などの当具痕を残すものが多い。内面に綾杉文叩きや無文当具あるいはナデ等によるものも例外的にみられる。

鉢類には、大小の２種がある。小形の器種は坏･椀類とも異なるが、それらは食膳具のうちに含め、大形品はいわゆる広口鉢である。杉崎廃寺や寿楽寺廃寺などで検出された鉄鉢類は出土していない。

水瓶ないし浄瓶とした器種は、高台部の形態より判断したものである。供養具に分類したもので、近隣の寺院に供給されたものと考えられる。

硯は円面硯のみで、焚口部や灰原から出土している。奈良文化財研究所の『平城京出土陶硯集成』（奈良文化財研究所 2006）の陶硯の分類に従えば、圏足円面硯に分類される。

つぎに図示し得た資料について、それぞれ器種ごとに要約したい。なお、詳細は後述の表２の出土遺物観察表（須恵器類）を参照願いたい。

有蓋高坏蓋（第８図１・２、図版７）

古墳時代以来の伝統的な器種で､高坏類に対応する蓋である。坏Ｈ蓋の天井部に摘みをもつもので、図示し得た資料は後述の坏Ｈ蓋に比して器高がやや高い。丸みを帯びた天井部から口縁部に移行し、口縁端部は丸く収めている。２点とも口径が12㎝台で、これらは灰原からの出土である。なお、窯体内からは確認されていない。本資料は､後述の長脚高坏（第11図99）とセットになるものと考えられ、出土量はきわめて少ない。

坏Ｈ蓋（第８図３・４、図版７）

後述する坏Ｈ身と対応する蓋で､古墳時代に広く普及した器種である。天井部は全体に浅く扁平で、天井部と口縁部との境界は不明瞭である。有蓋高坏の蓋と同様に口縁端部は丸く収めている。口径は12㎝台で、灰原からの出土である。なお、出土量は少ない。

坏Ｈ身（第８図５～９、図版７）

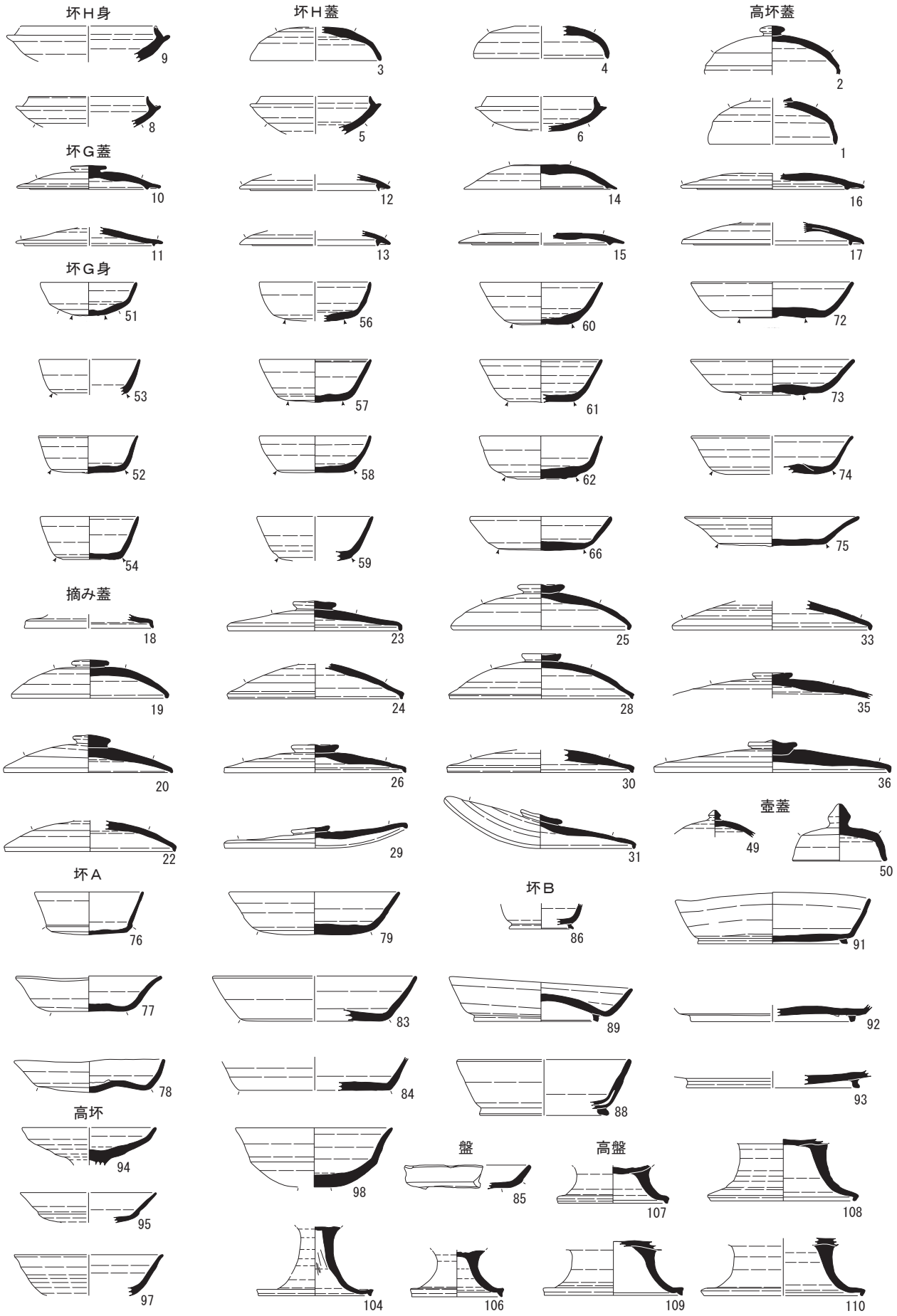
受部の立ち上がりは矮小化し、受部は水平ないし上向きに延びている。底部は全体に浅く、扁平な器形である。図示し得た資料は５点で、口径が10～11㎝台の小型のもの（５～８）と、12㎝台のもの（９）がある。いずれも灰原からの出土で、これらも出土量は少ない。

坏Ｇ蓋（第８図10～17、図版７）

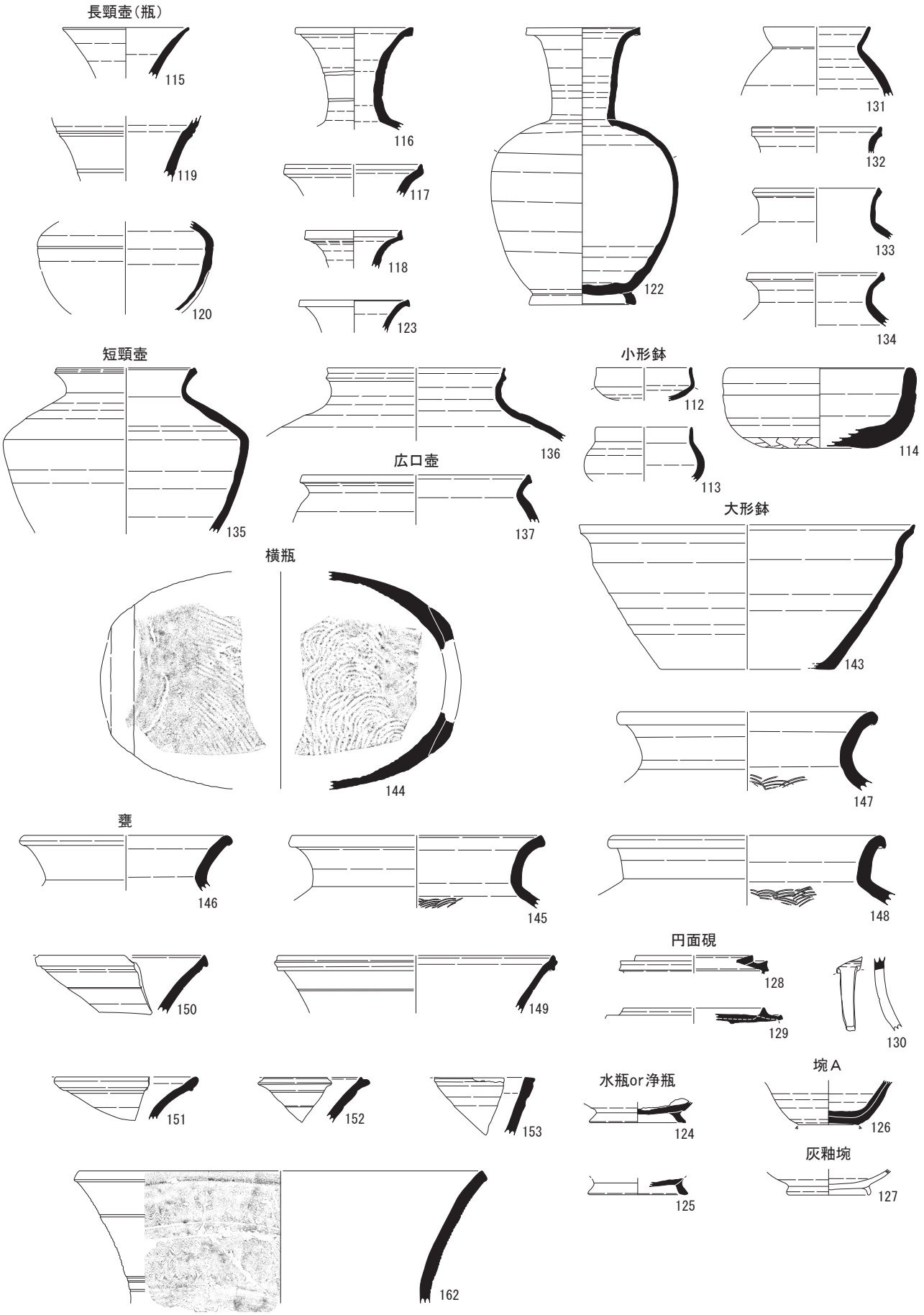
天井部に摘みを有し、口縁端部内面に返りをもつ。また、返り蓋とも呼称される。天井部は全体に浅く扁平な器形である。図示し得た資料は８点。口径の違いから13～14㎝台前半（１類）と、15㎝台（２類)、17㎝台（３類）の３種に分けられる。出土位置は、焚口部記載が１例で、他は灰原出土と推測される。坏類との関係では、坏Ｇ蓋１類が坏Ｇ身３類、坏Ｇ蓋２類が坏Ｇ身４類、坏Ｇ蓋３類が坏Ｇ身５類との対応が推測される。

坏Ｇ身（第９～11図51～75、図版８・９）

ヘラ切り技法による平底の坏で、前述の坏Ｇ蓋（返り蓋）とセット関係にあるものと推測される。図示し得た資料は25点であるが、そのうち口径が計測できた19点の資料をもとに細別すると、９㎝台前半（１類)、10～11㎝台前半（２類)、11㎝台後半～12㎝台前半（３類)、13㎝台前半（４類)、15～



第６図　信包中原田１号窯跡出土須恵器分類図１（1/5）



第７図　信包中原田１号窯跡出土須恵器分類図２（1/5）

16cm台前半（５類）の５種に分けられる。出土位置は、焼成部・燃焼部・焚口部・灰原など、多岐にわたって出土しており、窯内出土の坏類は焼成時の資料と推測される。

摘み蓋（第８・９図18～49、図版７・８）

天井部に摘みを有し、口縁端部が折り返された蓋の総称で、蓋類の中ではもっとも多い器種である。天井部の形態は、全体に丸みのあるものと浅く扁平な二者がある。摘みはボタン状の径３cm台後半～４cm台のもで占められるが、擬宝珠状の蓋が１点ある（49）。口径が計測できた18点の資料をもとに細別すると、12cm内外（１類）、14cm台（２類）、15cm台後半～17cm台前半（３類）、18cm台（４類）、22cm台（５類）の５種に分けられる。多くは15～17cm台に収まる３類で、もっとも大きい５類の蓋は、広口壺、盤、坏Ｂ４類などの器種に対応するものと推測される。

壺蓋（第９図50、図版８）

擬宝珠状の摘みを有し、天井部が扁平で、口縁部が長い形態の小型の蓋。短頸壺ないし薬壺などの小形品の蓋と推測される。図示し得た資料以外に確認した個体はない。出土位置は灰原と推測される。

坏Ａ（第11図76～84、図版９）

回転ヘラ削り技法による平底の坏で、前述の摘み蓋とセット関係にあるものと推測される。図示し得た資料は９点であるが、そのうち口径が計測できた５点の資料をもとに細別すると、10cm台（１類）、14cm台（２類）、16cm台（３類）、19cm台（４類）の４種に分けられる。出土位置は、焚口部・前庭部・灰原などであるが、これらも焼成時の資料と推測される。

坏Ｂ（第12図86～93・111、図版10）

坏Ｂは坏Ａに高台を付けたもので、本資料も前述の摘み蓋とセット関係にあるものと推測される。図示し得た資料は９点。そのうち口径が計測できたものが３点であるが、高台径より復元した資料を加え細別すると、８cm台（１類）、16～17cm台前半（２類）、18cm台（３類）、20cm台（４類）の４種に分けられる。この他に器高の深い器種がある（111）。出土位置は、燃焼部・焚口部・灰原などで、これらも焼成時の資料と推測される。

盤（第11図85）

口縁部が明瞭に折れる扁平な皿状の器種で、破片のため詳細は不明であるが、この資料は灰原から１点出土したのみである。

高盤（第12図106～110、図版10）

脚台のみの資料で、図示し得た資料は５点。脚台は短脚の１種のみで、長脚のものはみられない。脚台径の違いより小中大の３種程度に分けられる。出土位置は灰原のみである。これと同種のものが杉崎廃寺の鐘楼跡から出土しており、杉崎廃寺では長脚のものも確認されている。

高坏（第12図94～105、図版10）

全体を窺える資料がないため詳細は不明であるが、坏部の形態や口径、深さ、脚の長短、脚台部の径などの違いより細別できる。図示し得た資料は12点で、その大半は無蓋短脚高坏と推測され、長脚高坏（99）は１点のみ。これは古墳時代に遡るもとの思われる。出土位置は、灰原が中心であるが、焚口部からも確認されている。

長頸壺（瓶）（第13図115～123、図版11）

全体を窺える資料は１点のみであるが、口縁部および頸・肩部の違いから数種に種別できる。図示し得た資料は９点。口縁部の違いでは、直口縁のもの（115）と口縁端部に縁帯をめぐらすもの（116

～123)、頸部･肩部の違いでは、頸部が外反するもの（115･116～118）と直線的に延びるもの（122)、肩部に稜を有するもの（120）と丸みをもつもの（122）などに分けられる。肩部に稜を有するものは胴上半に沈線をめぐらし、胴部が短い（120)。一方、丸みをもつものは胴部が全体にやや長い（122)。また、頸部に沈線をめぐらすものもある（116・119)。肩部が折れるものが古く、丸みをもつものに形式変化すると推測される。出土位置は､灰原が中心であるが焚口部やその周辺からも出土している。

短頸壺（第14図131～136・141・142、図版12）

全体を窺える資料がないため詳細は不明であるが、概して口縁部が短く折れ、直立ないし外反し、胴部の上半に肩部を形成するものを短頸壺として一括した。図示し得た資料は12点であるが、口縁部形態だけでも多種多彩で種別は難しい。とくに後述する広口壺との区別は簡単ではない。また、甕との種別では、内外面の叩きや当具痕の有無で判断した。出土位置は灰原と推測される。

広口壺（第14図137、図版12）

全体のわかるものはないが、短頸壺に対して大きく口が開くものを広口壺とした。識別できたものは１個体のみ。出土位置は灰原と推測される。

壺底部（第14図139・140）

短頸壺ないし広口壺の底部と推測される部位である。出土位置は灰原と推測される。

横瓶（第15図144、図版12）

俵形の体部に「く」の字状と考えられる短い口縁部が付くものであるが、体部のみの資料である。識別できたものは１個体のみ。出土位置は灰原と推測される。

埦Ａ（第13図126、図版11）

埦Ａは無台坏のうち、底部の切り離し技法が回転糸切りのもので、出土位置は灰原と推測される。なお、この資料は重ね焼されたもので、近隣には当該期の窯跡があるものと考えられる。

鉢（第13・14図112～114・138・143、図版11・12）

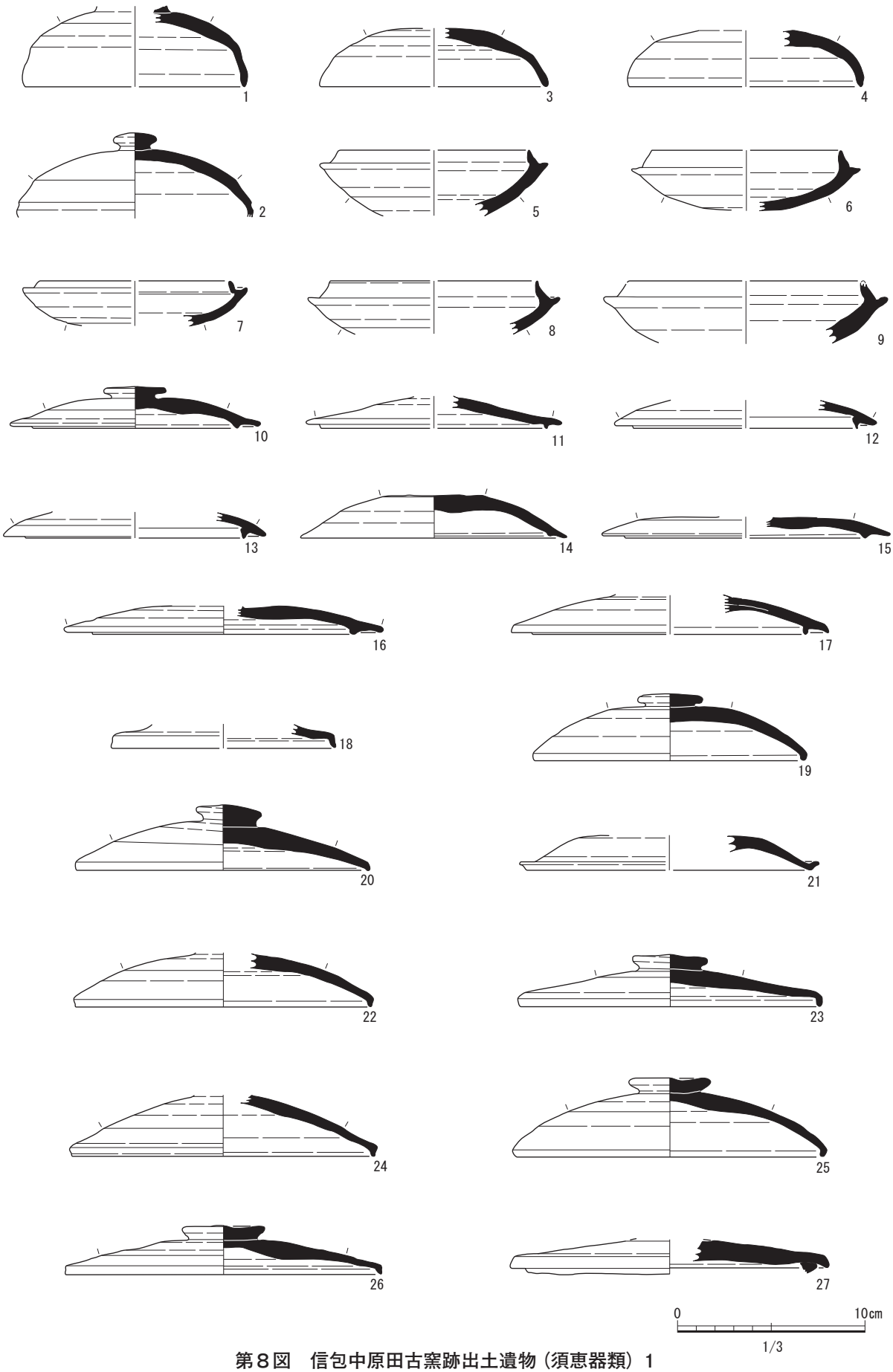
坏や壺類とも異なり、ここでは大小を問わず、広口形態の器種を一括して鉢類として取り扱った。大形の鉢（138･143）は、図示し得たものは２点であるが、主要器種の一翼を担うものと推測される。小形の器種（112～114）は、坏や小形の壺とも異なるが、それらは食膳具のうちに含められるものと考えられる。出土位置は灰原と推測される。

甕（第15～18図145～196、図版15～20）

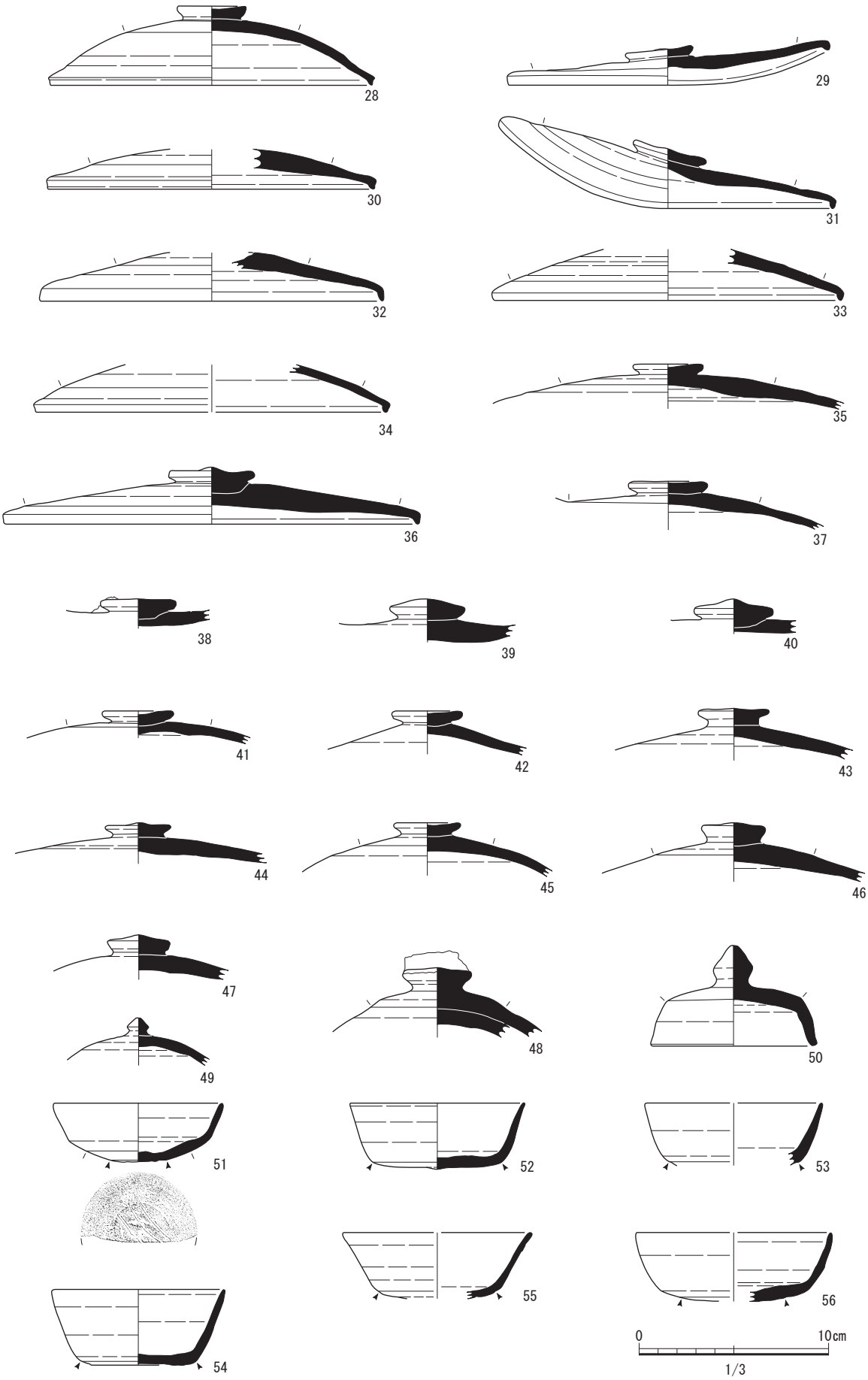
甕は出土量とともに大中小とバラエティに富むが､全体を窺える資料がないため詳細は不明である。大中小を基準に種別すると、口径が40㎝前後の大形品（１類)、25㎝前後の中形品（２類)、20㎝前後の小形品（３類）に分けられる。また、口縁部形態よる種別では、口縁部の短いもの（145～148）と、やや長いもの（149～164）に分けられ、前者は古型式の遺制を残すものと推測される。加えて後者の口縁部外面には、櫛歯状工具による波状文や廉状文、斜行文、列点文などが施される。胴部外面には平行文叩きや横位のカキ目なども一部に認められる。また、胴部内面には同心円文や青海波文叩きが一般的であるが、無文の当具痕による調整やナデなどが加えられたものもある。甕類の出土位置は、灰原が中心であるが、焚口部やその周辺からも出土している。

硯（第13図128～130、図版11）

硯は円面硯のみで、焚口部や灰原から出土している。奈良文化財研究所の『平城京出土陶硯集成』（奈良文化財研究所 2006）の陶硯の分類に従えば、圏足円面硯に分類される。

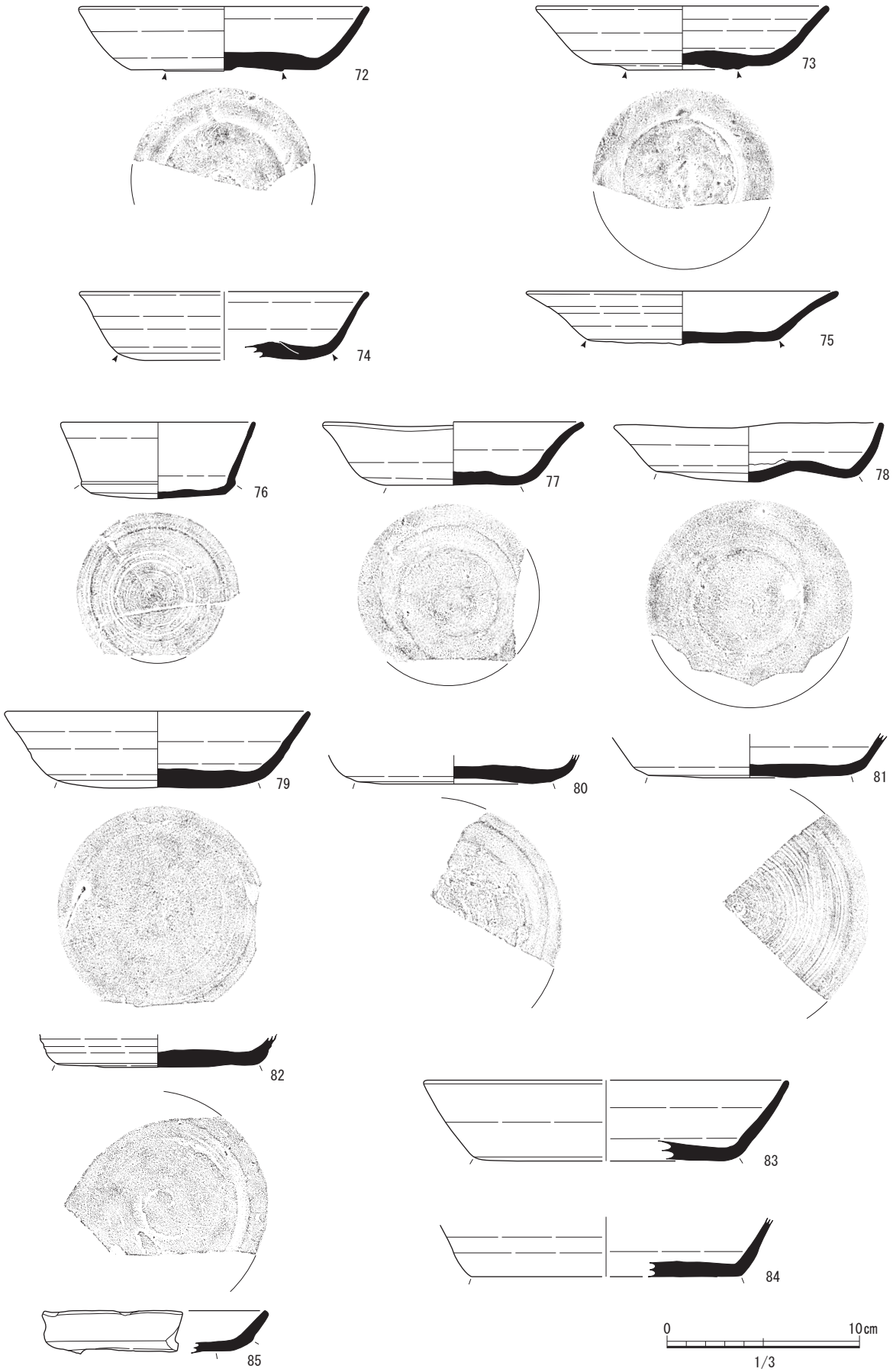


第８図　信包中原田古窯跡出土遺物（須恵器類）１

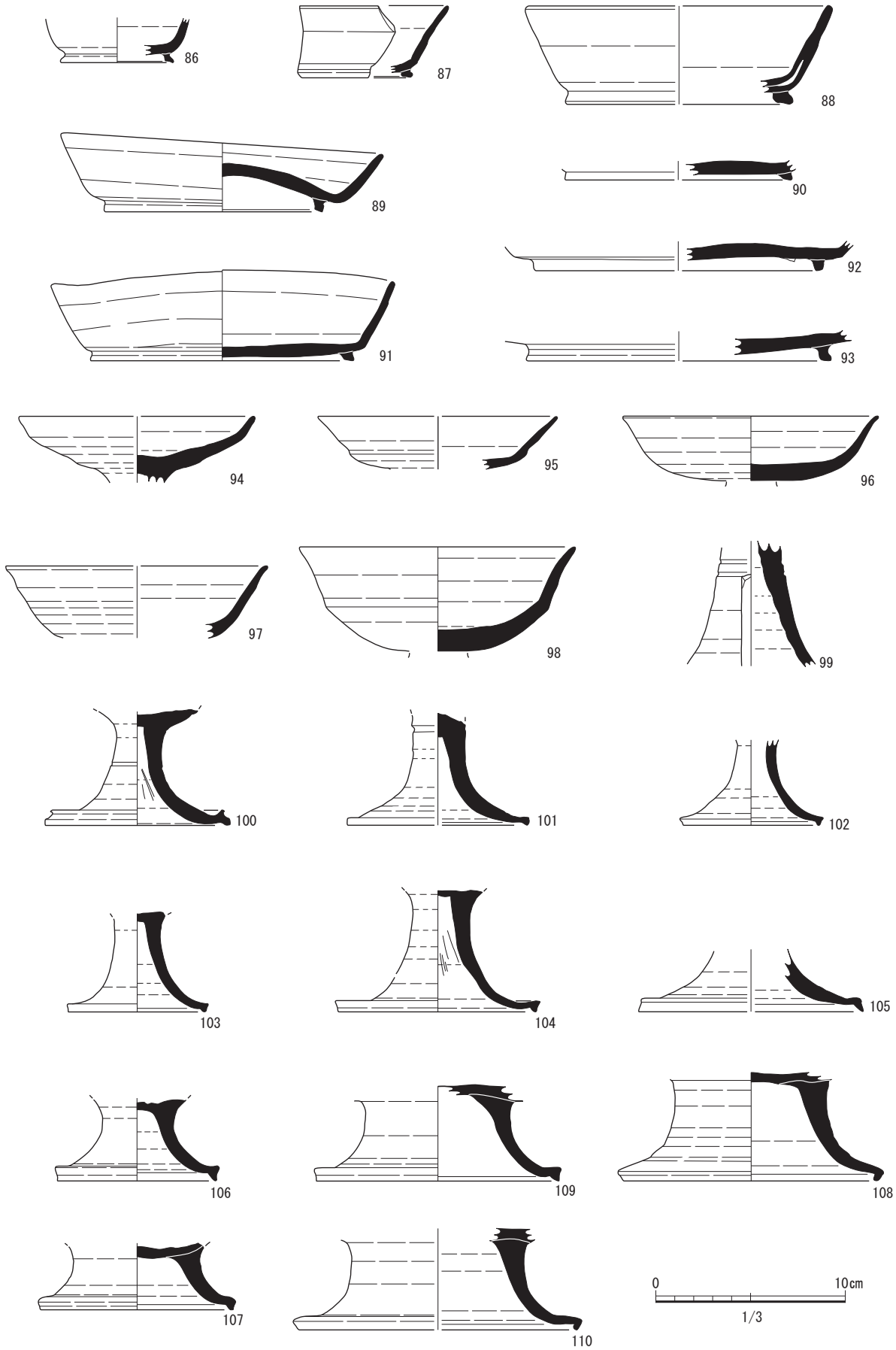


第９図　信包中原田古窯跡出土遺物（須恵器類）２

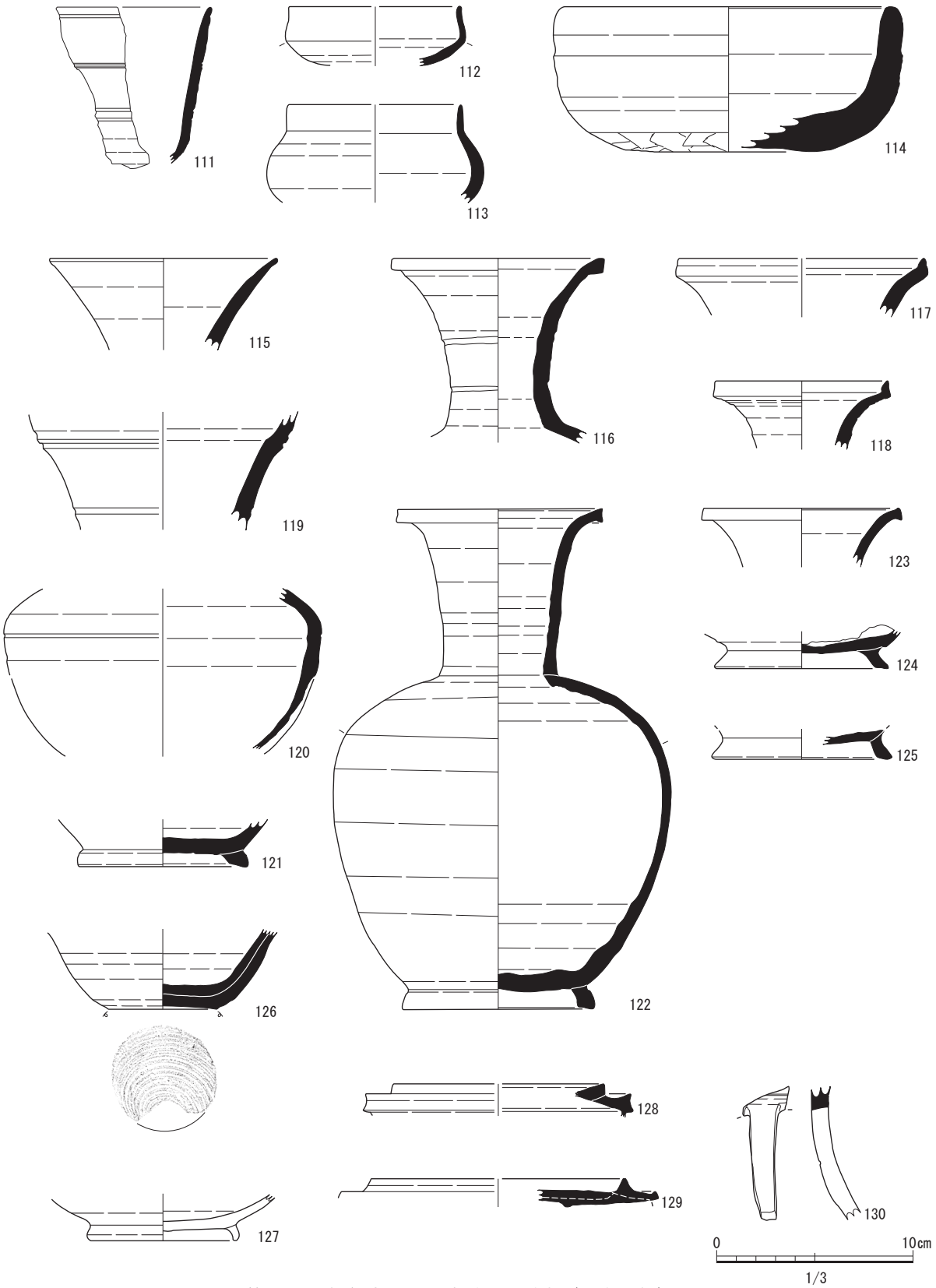
第10図　信包中原田古窯跡出土遺物（須恵器類）３



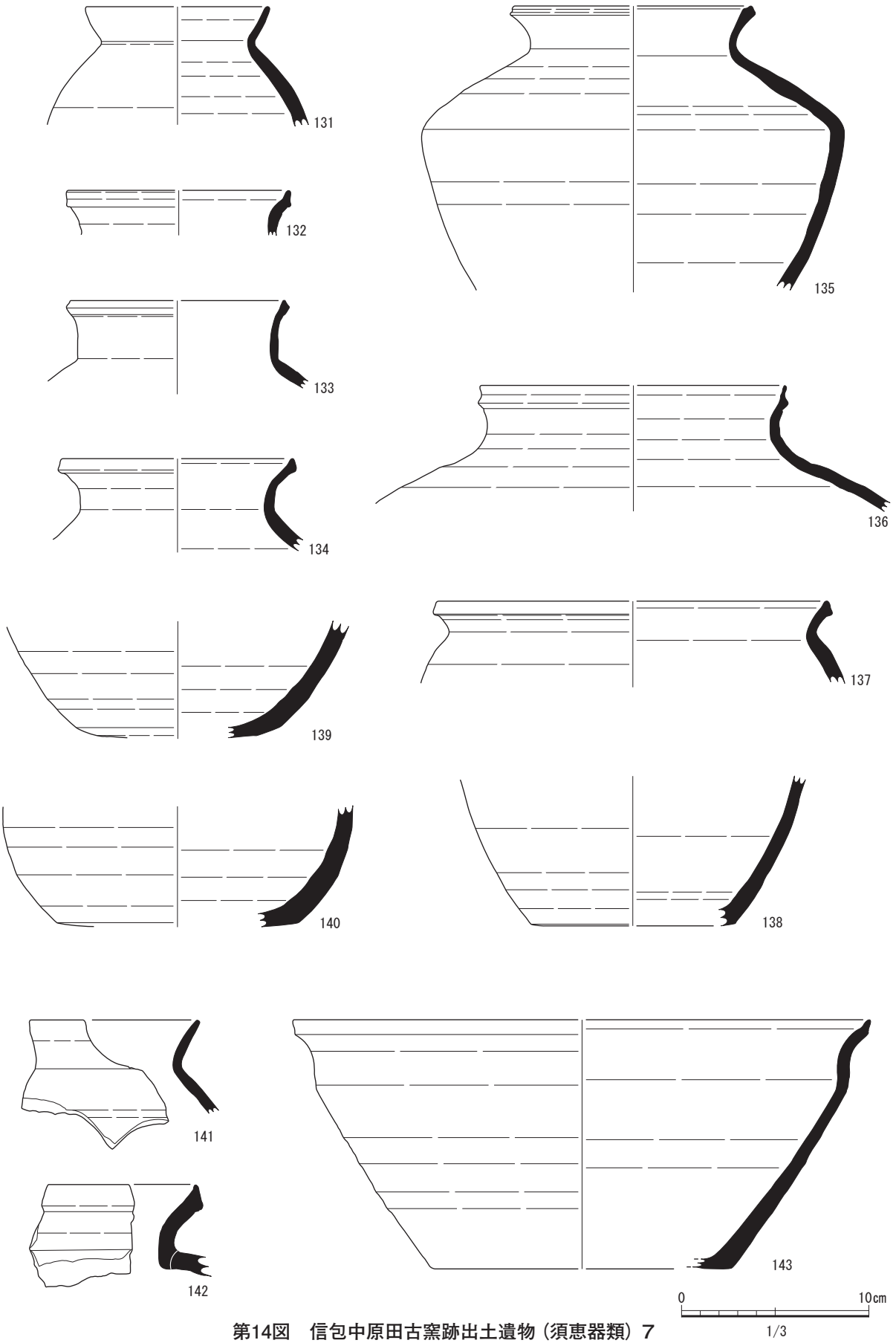
第11図　信包中原田古窯跡出土遺物（須恵器類）４



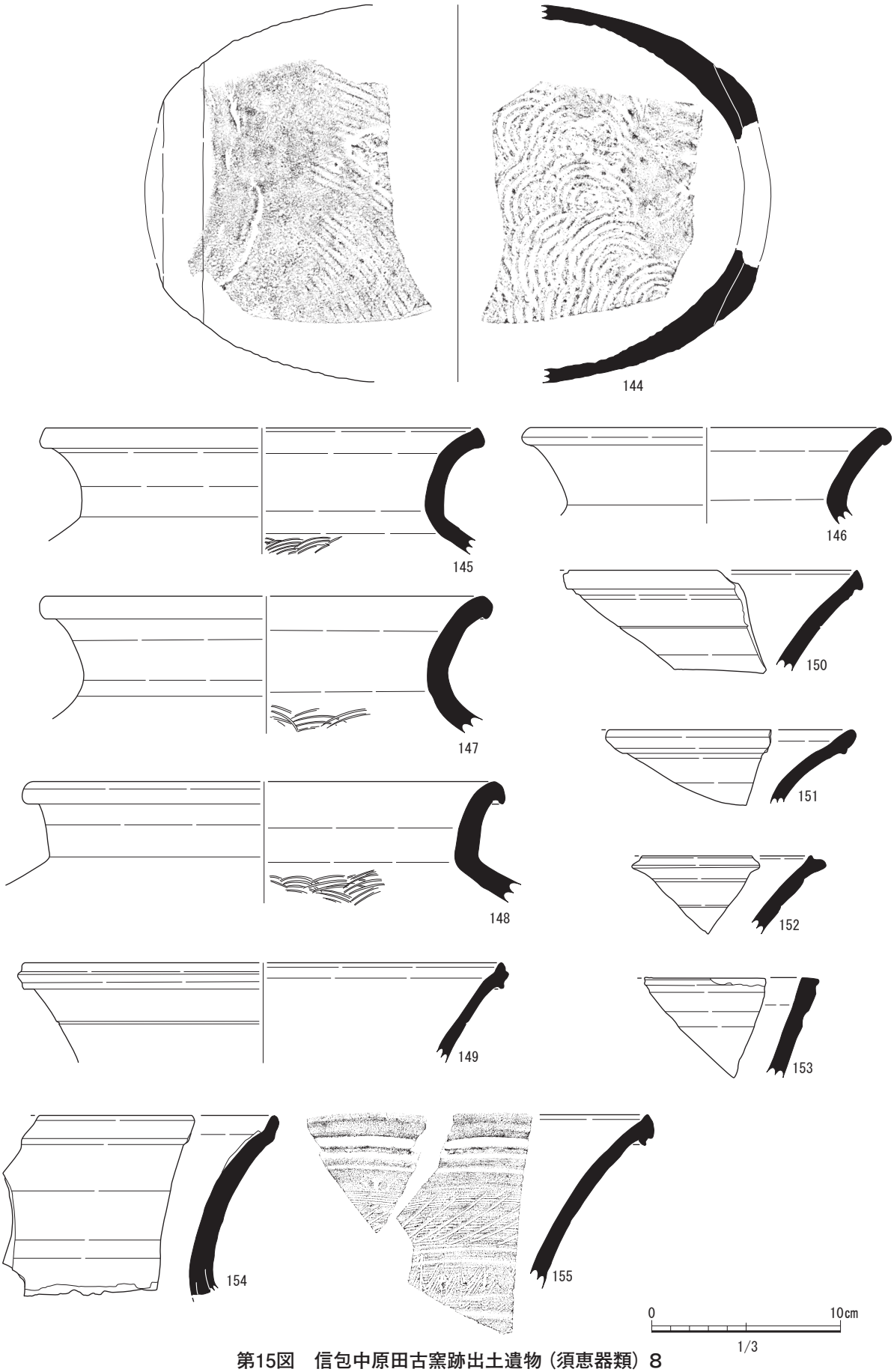
第12図　信包中原田古窯跡出土遺物（須恵器類）５



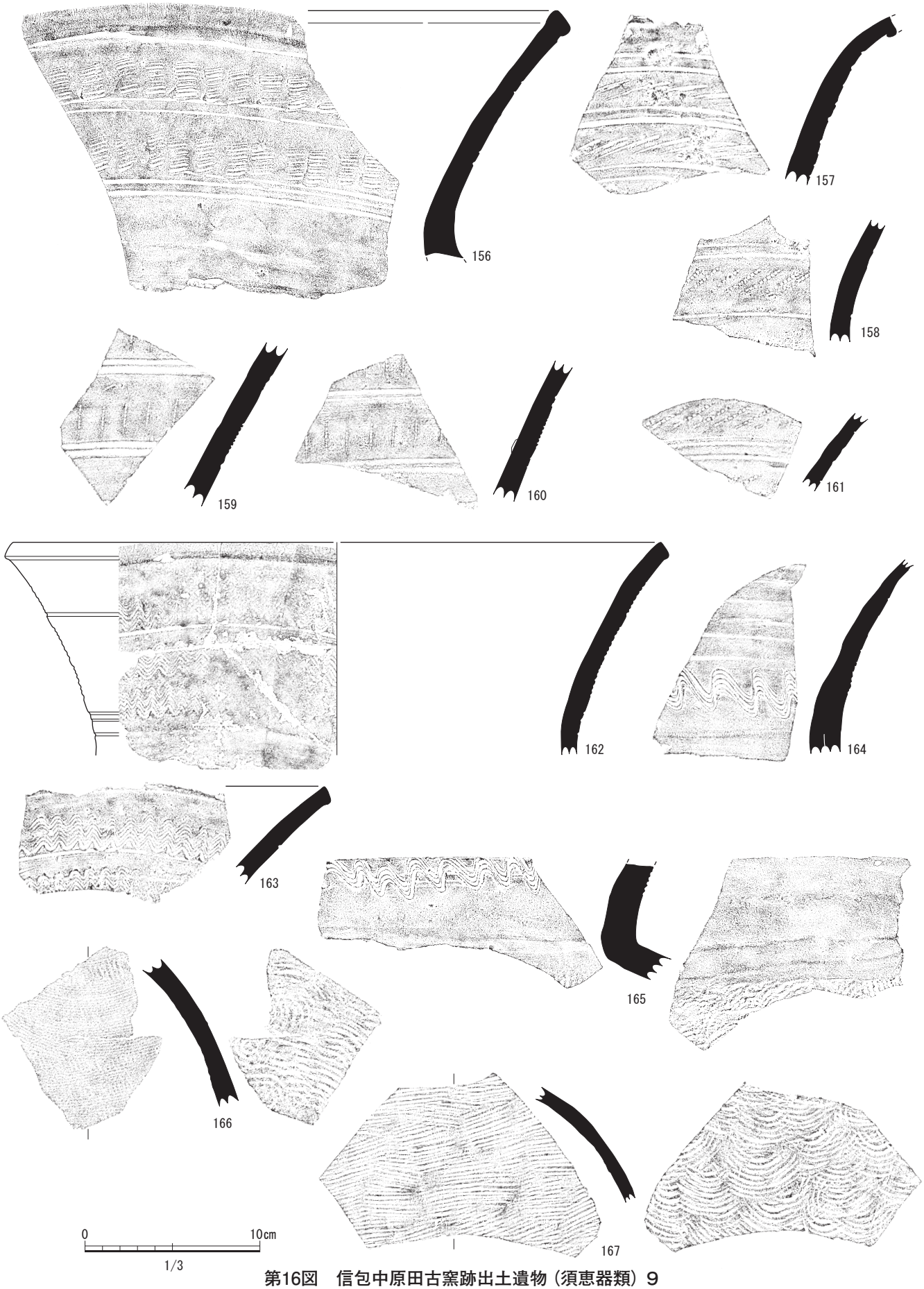
第13図　信包中原田古窯跡出土遺物（須恵器類）６



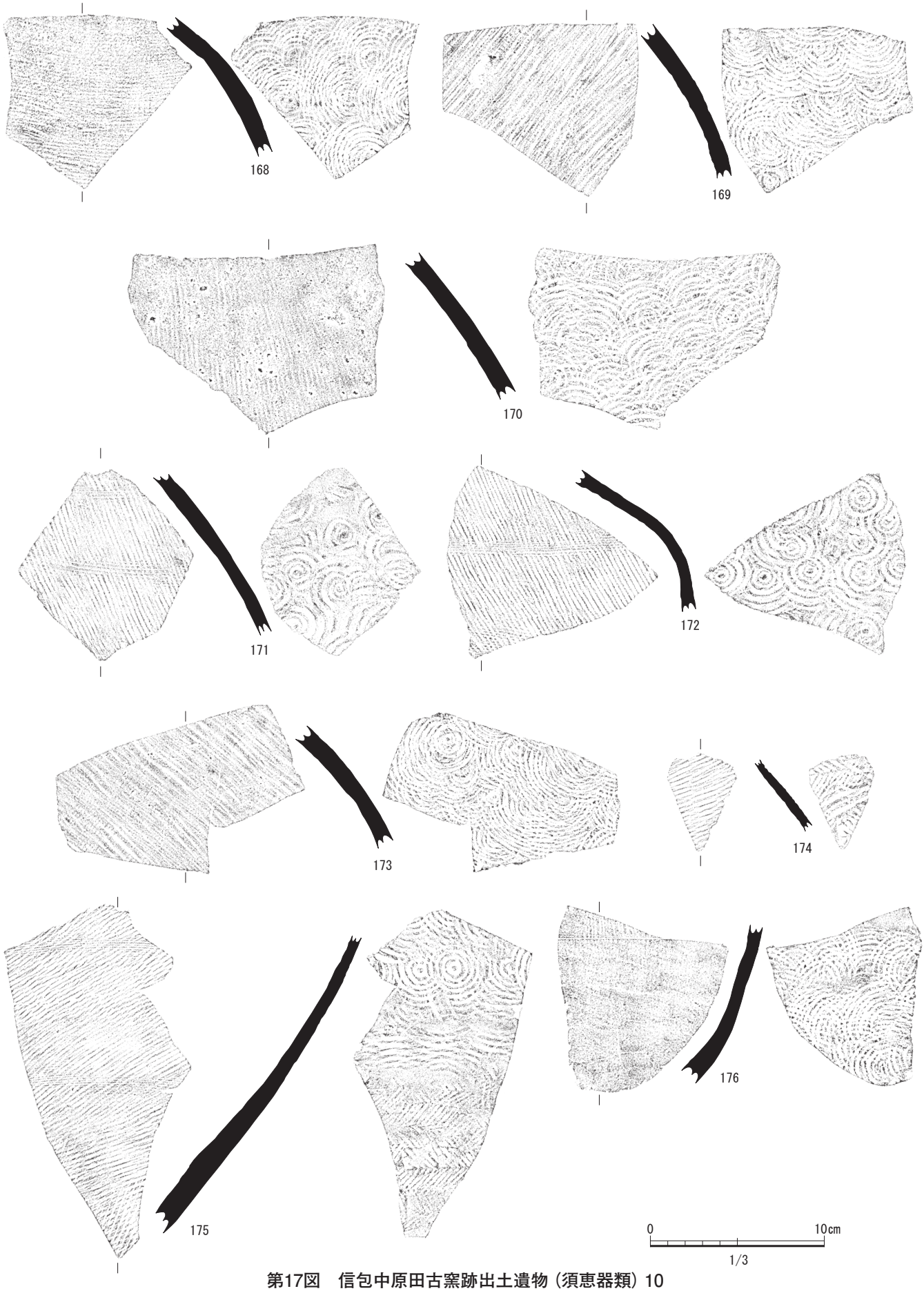
第14図　信包中原田古窯跡出土遺物（須恵器類）７



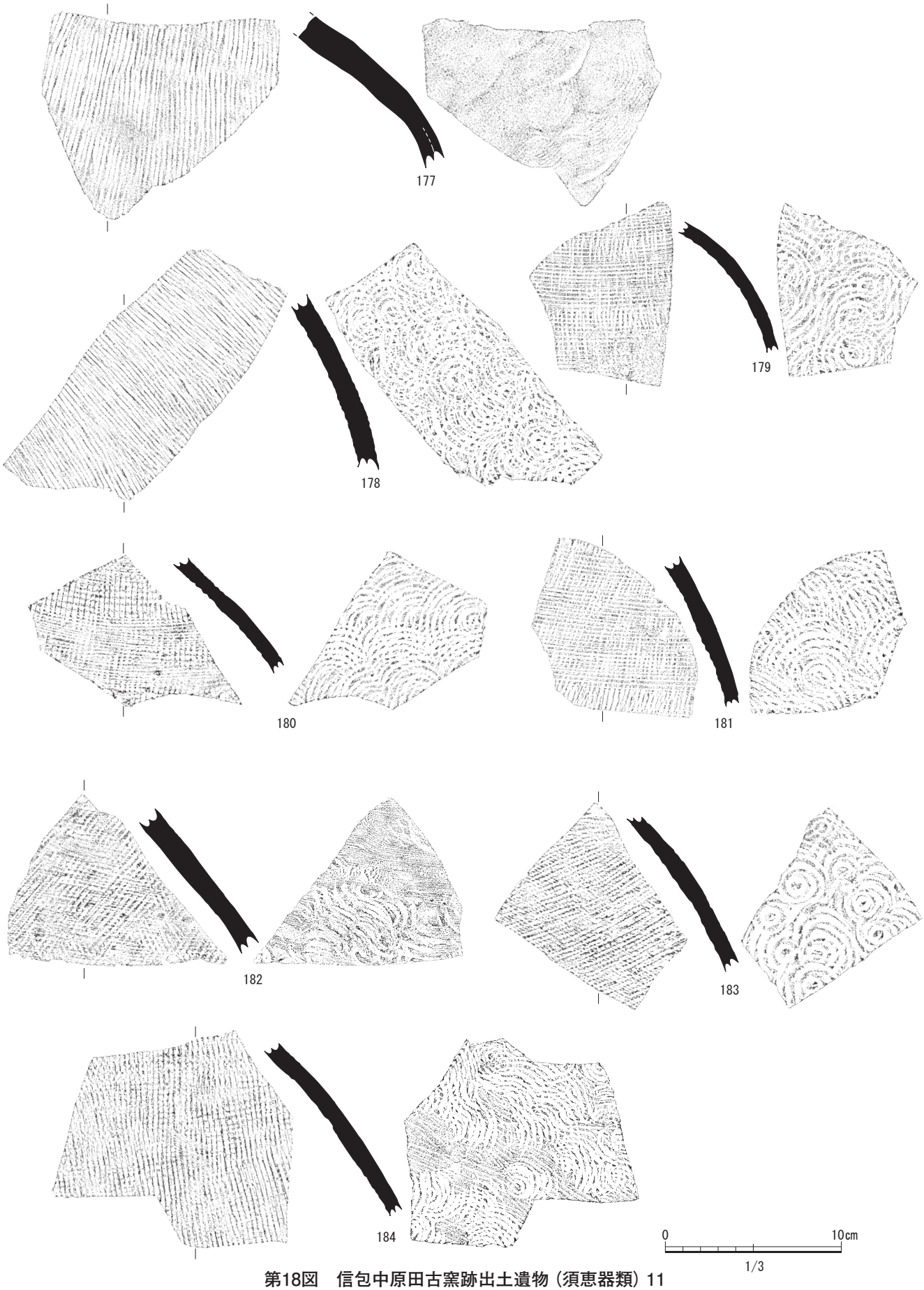
第15図　信包中原田古窯跡出土遺物（須恵器類）８



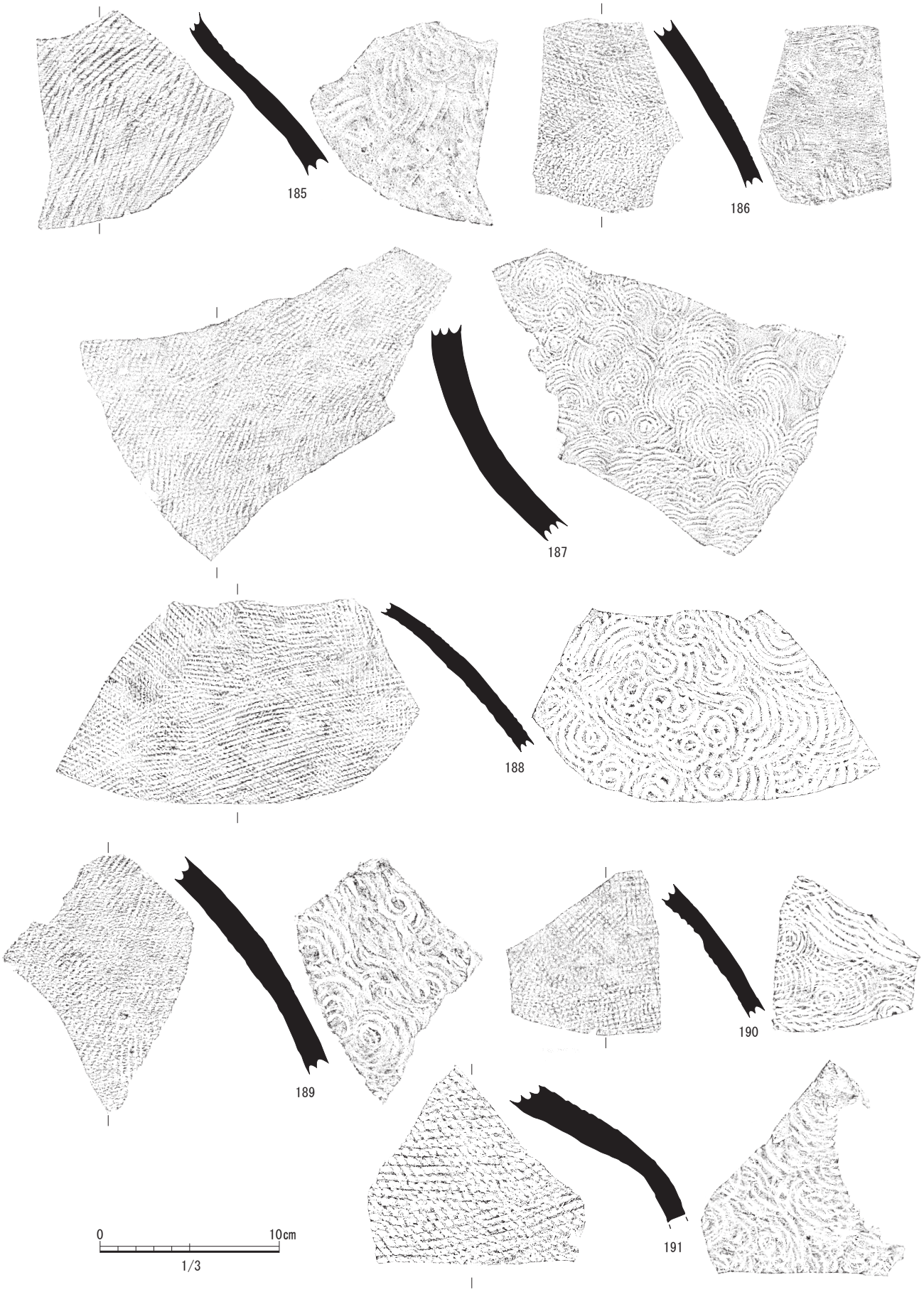
第16図　信包中原田古窯跡出土遺物（須恵器類）９



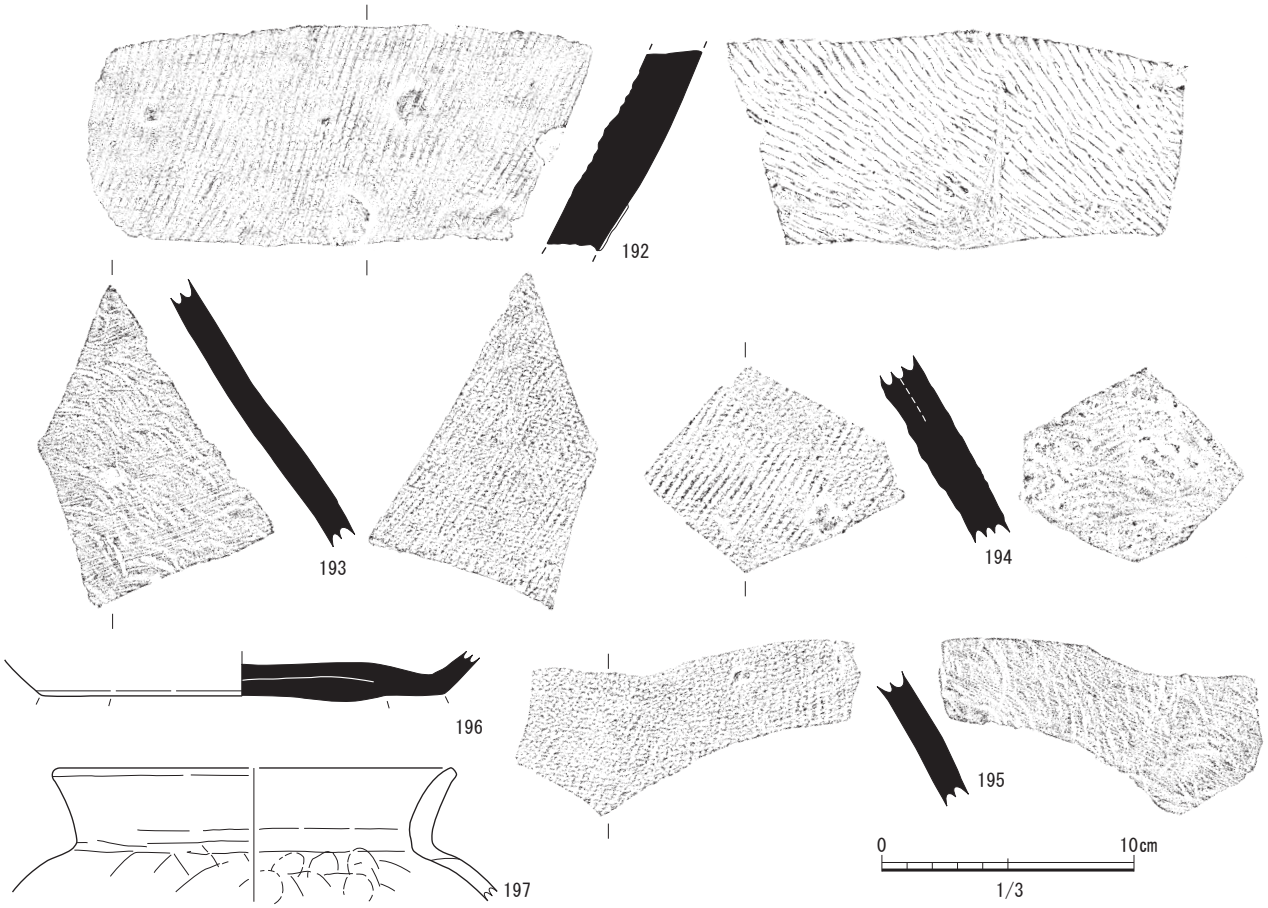
第17図　信包中原田古窯跡出土遺物（須恵器類）10



第18図　信包中原田古窯跡出土遺物（須恵器類）11



第19図　信包中原田古窯跡出土遺物（須恵器類）12



第20図　信包中原田古窯跡出土遺物（須恵器類）13

２．瓦類（第21～38図、図版18～41）

瓦類は大半が丸瓦と平瓦で、これらに混じって熨斗瓦や鴟尾、軒丸瓦（素弁八葉蓮華文・単弁八葉蓮華文）などもわずかに出土している。これらと同形式の鴟尾や軒丸瓦は、太江の寿楽寺廃寺（財団法人岐阜県教育文化財団2002）からも出土しており、中原田から寿楽寺廃寺への需給関係が明らかにできたことは大きな成果であったといえる。

出土した瓦類は遺物整理箱で42箱分を数えるが、これらは須恵器を焼成した１号窯とは関係のない、灰原出土の資料であることが判明した。また、これらの大半は焼成した直後に廃棄されたものであり、今後は隣接地に予想される瓦窯の確認作業が重要な課題となろう。

出土瓦の掲載にあたっては、瓦の種類および用途に分けて提示することに努めた。出土した瓦には、鴟尾、軒瓦、熨斗瓦、丸瓦、平瓦がある。これらのうち、まとまって出土した丸瓦･平瓦については、成形技法（凸面・凹面・側面・端面・断面など）に関して観察し、実測図および観察表に表記した。

本項では、鴟尾、軒瓦、熨斗瓦、丸瓦、平瓦のそれぞれの特徴について記述する。

鴟尾（第21図１～５、図版18・19）

図示し得た５点以外に、胴部および縦帯（たておび）の部位と思われる小破片が４点出土している。１は胴部片。２・３は連珠文を廉状の沈線で表した縦帯部分の破片。鰭部と腹部の間には二本一組の沈線が縦帯として施され、両者を区画している。連珠文は、いわゆる二重のコンパス施文で、成形は型押し技法と考えられる。このコンパス文は、寿楽寺廃寺出土例の縦帯部分と瓜二つである。また、二重の円弧を描くのがその特徴であるが、他の例では各務原市の平蔵寺跡出土の縦帯部分の連珠文と近似している。

４・５は前者の縦帯部分とは別種の破片と考えられ、少なくとも２個体分の破片資料と推測される。焼成は全体に軟質（酸化焔焼成）なのものが多く、寿楽寺廃寺出土例ときわめて近似している。なお、飛騨地域での鴟尾の出土例は窯場では信包中原田例、寺院跡では寿楽寺廃寺例がともに初例である。

棟の端を飾るのは鬼瓦であるが、とくに大棟の両端部には鴟尾を飾るのが本式であったとすれば、寿楽寺廃寺は格式の高い寺院であったと考えられる。

軒丸瓦（第21図６～10、図版19）

軒瓦は軒丸瓦の小破片のみで、軒平瓦は出土していない。図示し得た軒丸瓦は５点、これら以外に瓦当部の細破片が３点あるが、丸瓦部まで分かるものはない。ここでは寿楽寺廃寺出土例の型式分類に沿って記述する。

６は内区の破片。菱形に図案化された三重圏縁八葉蓮華文軒丸瓦の部位と推測される。子葉間にはＴ字楔形の間弁をもつ。菱形に図案化された蓮弁は、三角形の花弁と菱形の子葉で構成され、端正な印象を受ける。瓦当裏面はナデ調整され、布目痕は認められない。寿楽寺廃寺Ⅵ型式軒丸瓦と同型式。

７～10は内区ないし周縁部にかけての破片。これらは素弁八葉蓮華文の部位と推測され、花弁端は三角状を呈し、弁間の界線も直線的で幾何学文様ともいうべき様相を呈する。子葉間にはＴ字楔形の間弁をもつが、それぞれ微妙に異なるため瓦范には何種かあるものと考えられる。また、特徴として中房は小さく、蓮子は１＋４、花弁は薄肉で、周縁が低い。８の中房は八角形状を呈する。瓦当径の復元できたものは８のみであるが、総じて小型のものと考えられる。瓦当裏面は７のみがナデ調整で、他は布目痕である。これらは寿楽寺廃寺Ⅰ型式軒丸瓦と同型式と推測されるが、寿楽寺廃寺Ⅰ型式の瓦当裏面はすべて布目痕である。

熨斗瓦（第21・22図11～17、図版19・20）

熨斗瓦は棟の下に短冊形に積んだ瓦で、鴟尾の出土から大棟を形づくるうえで重要な瓦であったと考えられる。図示し得た７点以外に、両側面などの状況より熨斗瓦と判断した破片が19点ほどある。これらはその形状より平瓦を縦に分割して整えたものと推測され、製作工程上では焼成前に分割したものが大半と考えられるが、分割面の粗い側面未調整の17は焼成後に分割されたものと推測される。

熨斗瓦の幅は、両側面が計測できたものは少ないが、その多くは11.0～12.0㎝の幅に収まっている。極端に幅の狭い17の例があるが、前述の分割面の特徴から推測すると、焼成後に分割された可能性が考えられる。また、両端幅（広端幅・狭短幅）には若干の差が認められる。

一般に熨斗瓦は反り方によって分類されるが、本窯場出土の熨斗瓦は直熨斗（17）の一例を除くと、一定の反り具合をみせていることから、平瓦を素材として作られていたと考えられる。棟瓦として、特定の場所に葺かれるにもかかわらず、専用品としてではなかったことが窺える。

熨斗瓦の基本的な調整は平瓦に準じているが、凹面には糸切痕や枠板圧痕、布目痕などが認められ、凸面には主に側縁ないし端縁方向のナデが施され、叩き板によって調整されたものは少ない。また、枠板圧痕や粘土合わせ目などの痕跡から、熨斗瓦の大半は平瓦における粘土板桶巻作りの特徴を示しているものと考えられる。

丸瓦（第22～27図18～45、図版20～25）

丸瓦は、葺き重ね用の繋ぎ目の有無から無段式（行基式）と有段式（玉縁式）丸瓦に分けられるが、中原田古窯跡の窯場からは無段式丸瓦のみで有段式はまったく出土していない。これらの基本成形は、円筒状の成形台に粘土用材を巻き付けて形づくったものと推測される。円筒を作る技法として、土管

ないし円筒形の成形台に粘土板を巻き付けるものと、粘土紐を巻き上げるものがあるが、大半は前者のもで、後者は少ない。粘土板を巻き付けるものは凹面に粘土板の合わせ目の痕跡が残る場合が多く、また粘土紐のものは凹面に幅２～３㎝ほどの粘土紐の痕跡（23・29）を認めることができる。前者の粘土板の場合には糸切りの痕跡が残る。この他に凹面に残る痕跡には、糸切り・布目痕以外に細い枠板幅の痕跡が認められる。平瓦では、枠板を連結した成形台（造瓦器具）の痕跡を枠板圧痕として説明したが、丸瓦のそれは竹を割って連結した円筒形の成形台による痕跡と推測される。

これらを仮に「竹状模骨痕」と呼ぶと、丸瓦では竹状模骨痕の痕跡を残すものが多い。竹状模骨痕の不明瞭なものについては、丸太状の木型に残った調整跡のようにみえるものもある。わずかであるが竹状模骨痕の痕跡がまったく認められないもの（28）もあるので、その復元には慎重を要する。

凸面では、側縁ないし端縁方向にナデもしくは篦ナデによる調整痕を残すものが大半で、叩き目の痕跡を残すものは少ない。また、叩き目を残すものでは、側縁方向の平行叩きのもの（38）、交互に平行叩きを施したもの（39）、櫛歯状工具による波状を呈するもの（40）、縄叩きのもの（41・42～44）、格子叩きのもの（45）などがあるが、波状と格子叩きの例は図示し得た資料のみである。なお、格子叩きの凹面には側縁方向に指ナデの調整が加えられ、糸切り･布目痕などの痕跡は認められない。

両側面と両端面の調整は、凹面では成形台から外しただけで、基本的には両側縁の面取りを除いて調整痕は認められない。凸面では側縁を面取りするものが図示し得た資料の中に２点（18・32）ある。なお、分割の際の分割突帯や分割裁線などの痕跡は確認されていない。

丸瓦の狭端縁側の中央部には貫通孔のある例（第22図18～20）が若干認められるが、貫通孔を確認できたものはすべて丸瓦である。また、凸面の調整は、いずれも側縁方向の篦ナデ調整である。孔は略円形で、径は1.5～1.8㎝である。

平瓦（第27～38図46～106、図版26～41）

出土した平瓦の大半は、概ね４～５㎝の板を綴じ合わせた桶型の成形台（裁頭円錐形）に、粘土板を巻き付けて粘土円筒を作り、これを３分割ないし４分割して完成させた桶巻作りによるものである。この他に、凸型に湾曲した成形台の上で、粘土板や粘土紐を用いて作った一枚作りが若干認められる。

まずはじめに、出土した桶巻作りによる平瓦の特徴をみると、凹面では桶型の成形台の痕跡を示す枠板圧痕、桶綴じ痕跡、糸切り痕、粘土板合わせ目痕、それに布の綴じ合わせ目などの痕跡を根拠に粘土板桶巻作りの成形技法と判断した。とくに、枠板圧痕の痕跡は桶型の成形台を示す根拠となるが、今回の資料のなかに枠板圧痕の痕跡が不明瞭なものが含まれていた。出土量は少ないが、粘土板一枚作りによる凸型台の痕跡と考えることもできるため、復元には注意を必要としよう。また、本資料のなかに１例であるが凹面に粘土紐の痕跡（66）が認められるものがある。この資料は粘土紐一枚作りと推測される。凸面調整では、ナデもしくは篦による調整痕を残すもと、叩き目の痕跡を残すものがほぼ半々である。前者のなかには平行叩きの痕跡がわずかに認められるものも含まれるが、これらは一次調整で平行叩きしたものをナデもしくは篦による再調整によって叩きが消されたと考えられる。また、叩き目を残すものでは平行叩きのものが多い。平行叩きには、側縁方向のもの（78・79・81）、斜方向のもの（80・82～87・90・91）、端縁方向のもの（88・89）、交互に施したもの（94～98）などがある。これら以外に、長方形格子叩きのもの（99～106）と縄叩きのもの（107）があるが、縄叩きで図示し得たのは本資料のみである。

また、凹面には端縁方向にある等間隔で数条の窪み（63・70・82・90・98・101）が認められるが、

これは桶枠を固定するための痕跡（桶綴じ痕跡）と考えられる。同様に凸面には縄を巻き付けた痕跡（49・64・65）が認められるが、これは桶型の成形台に叩き締めた粘土板を固定するために用いた紐の痕跡と推測される。

なお、側面ないし側縁において分割凸帯や分割裁線などの分割に関わる痕跡は確認できていない。

一方、一枚作りによる特徴では、凸型の成形台上に弓で切った平瓦一枚分の粘土板ないし粘土紐を素材として一定の形に整える点で桶巻作りとは異なる。成形台に布を用いる点では桶巻作りの場合と同じ目的であるが、つぎの３点で大きな相違がある。１点目は枠板圧痕の痕跡が認められないこと。２点目は曲率の弱いものが多いこと。３点目は成形台に使用する布の使用方法が異なるため布目痕に歪みが少ないことである。これらの特徴を示す平瓦は図示し得た中に２点（58・59）ある。凸面ではナデもしくは篦ナデによる調整痕を残すのみである。

３．灰釉陶器・土師器・陶製品（第13・20・38図、図版11・18・41）

窯場付近およびその周辺から出土した須恵器・瓦以外の同時代との関連が推測される灰釉陶器埦、土師器甕、陶製品について掲載する。

灰釉陶器埦（第13図127、図版11）

窯場付近出土の採取資料で、灰釉製品は本例のみ。高台部および体部の一部が遺存する資料である。三日月形を呈する高台部の特徴より黒笹90窯式に比定される。

土師器甕（第20図197、図版18）

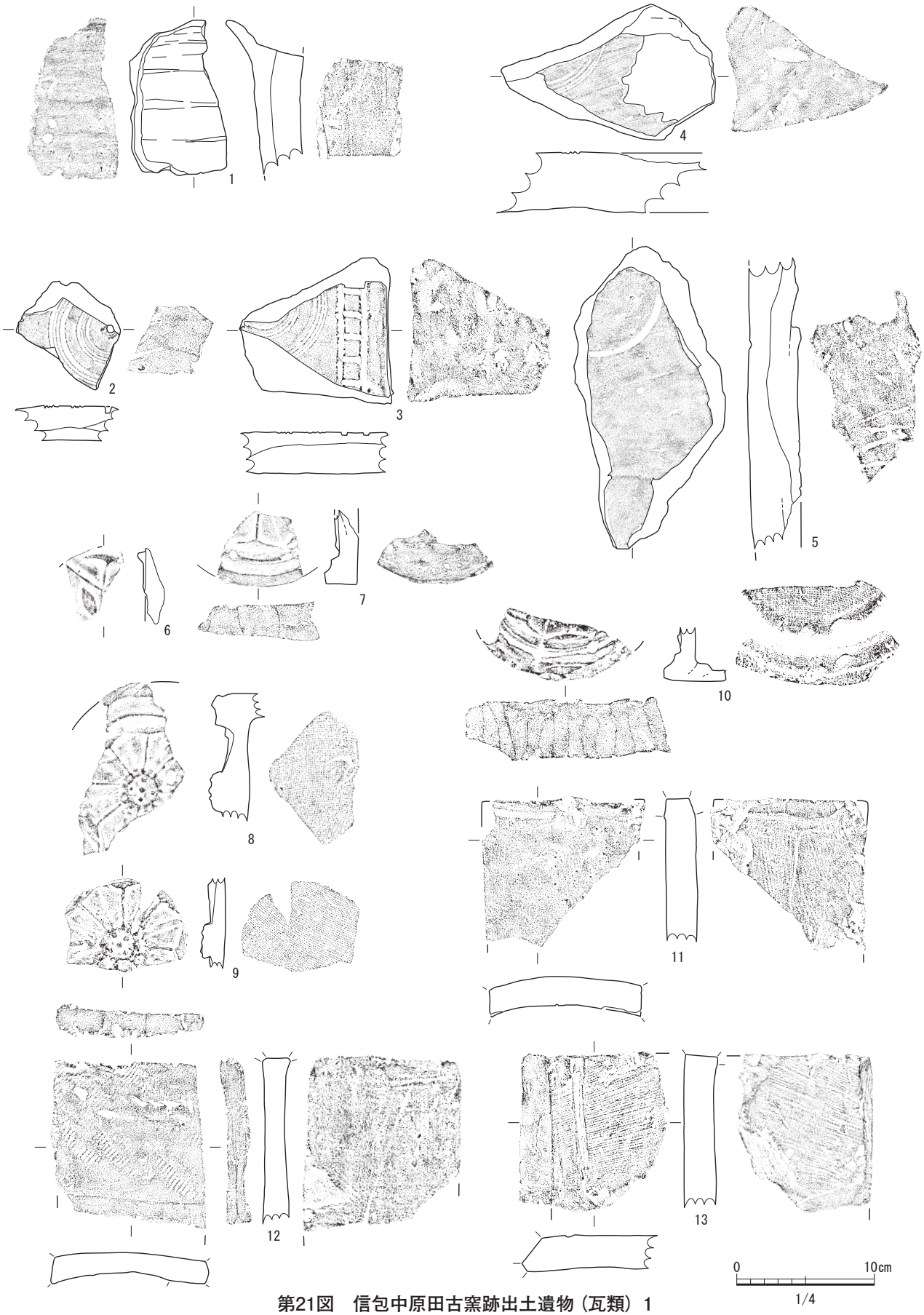
灰原出土の資料と考えられる土師器甕で、土師器片は何点か出土したが図示し得た資料は本例のみ。口縁部は「く」の字状に外傾し、胴部は球形状を呈するものと推測される。

陶製品（第38図108、図版41）

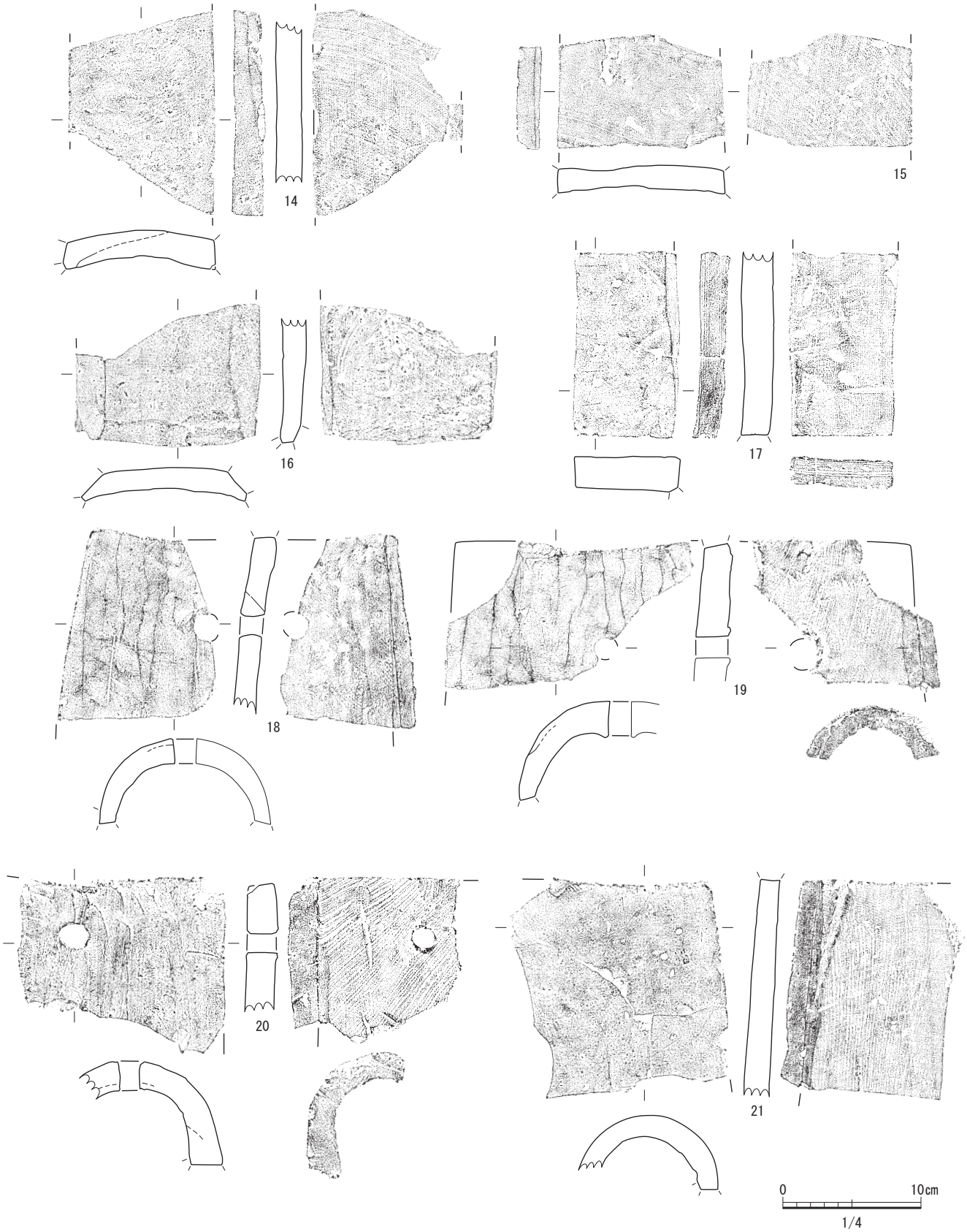
灰原出土の資料で、長さ9.2㎝、幅3.0～3.4㎝の直方体を呈する陶製品である。四面をヘラで整え、中央部の角に斜めの穿孔を設けている。

引用・参考文献

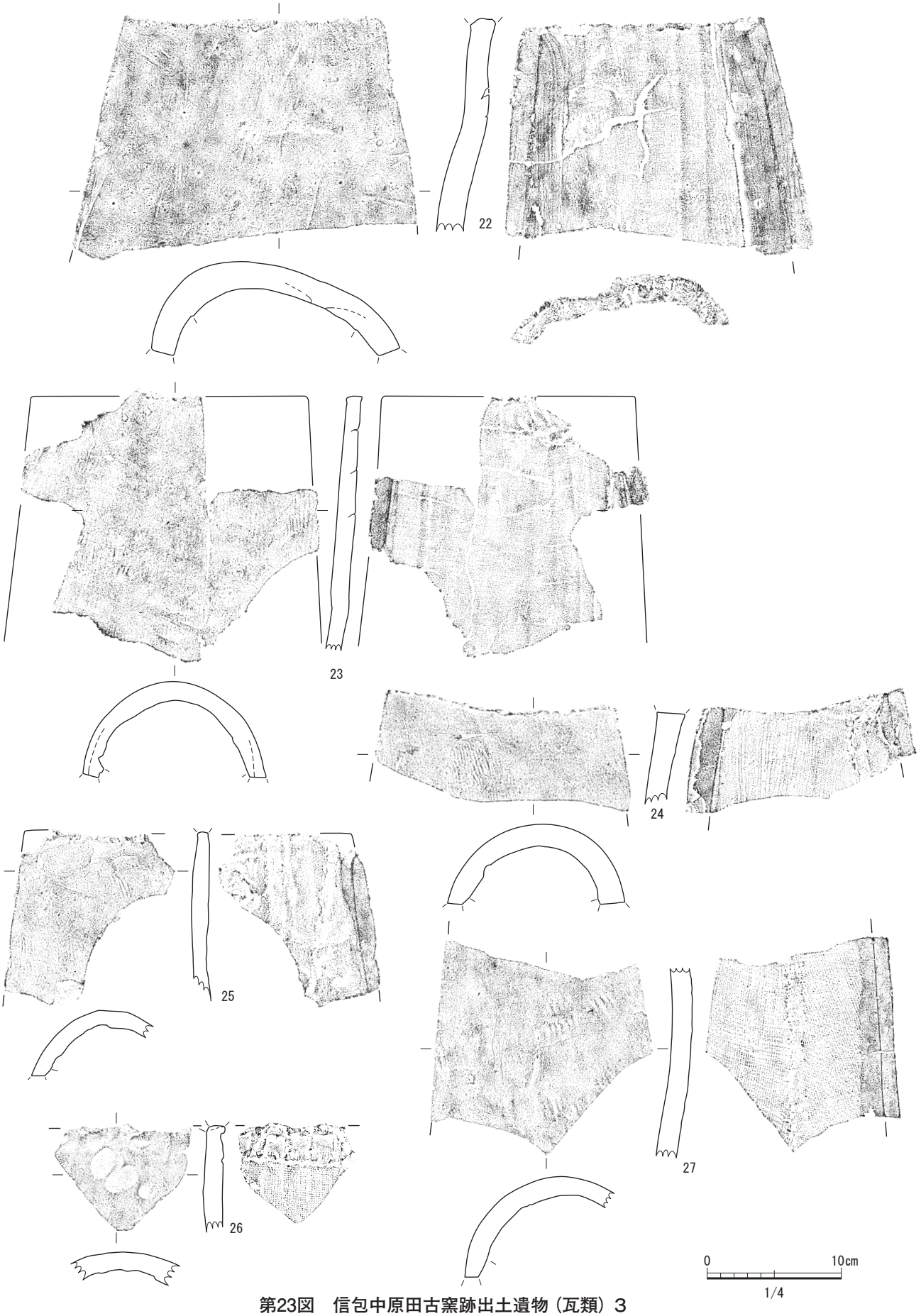
古代の土器研究会編 1991『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東６ 須恵器の製作技法とその転換』
古代の土器研究会編 1992『都城の土器集成』
大塚　章 1994「寿楽寺廃寺出土の軒丸瓦について－飛騨地方の古代寺院に関する一考察－」『岐阜県博物館調査研究報告』第15号 岐阜県博物館
古川町教育委員会 1998『岐阜県吉城郡古川町 杉崎廃寺跡発掘調査報告書』
三河考古刊行会 1999『第４回三河考古合同研究会 古墳時代の猿投窯と湖西窯』
財団法人岐阜県教育文化財団 2002『太江遺跡・寿楽寺廃寺跡』岐阜県教育文化財団文化財保護センター調査報告書第74集
財団法人岐阜県教育文化財団 2005『太江遺跡Ⅱ』岐阜県教育文化財団文化財保護センター調査報告書第94集
奈良文化財研究所 2006『平城京出土陶硯集成Ⅰ－平城宮跡－』
窯跡研究会編 2010『古代窯業の基礎研究－須恵器窯の技術と系譜－』



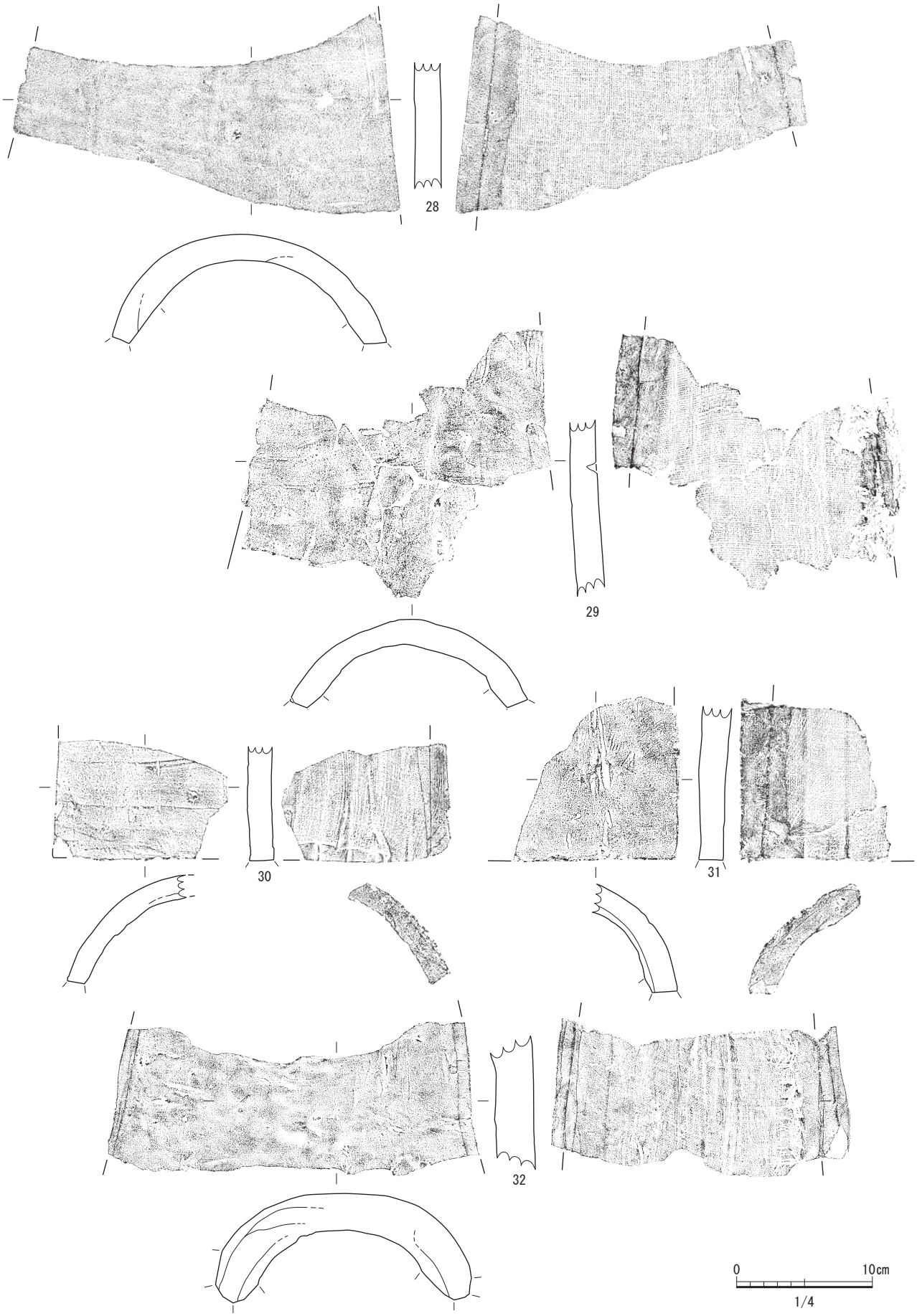
第21図　信包中原田古窯跡出土遺物（瓦類）１



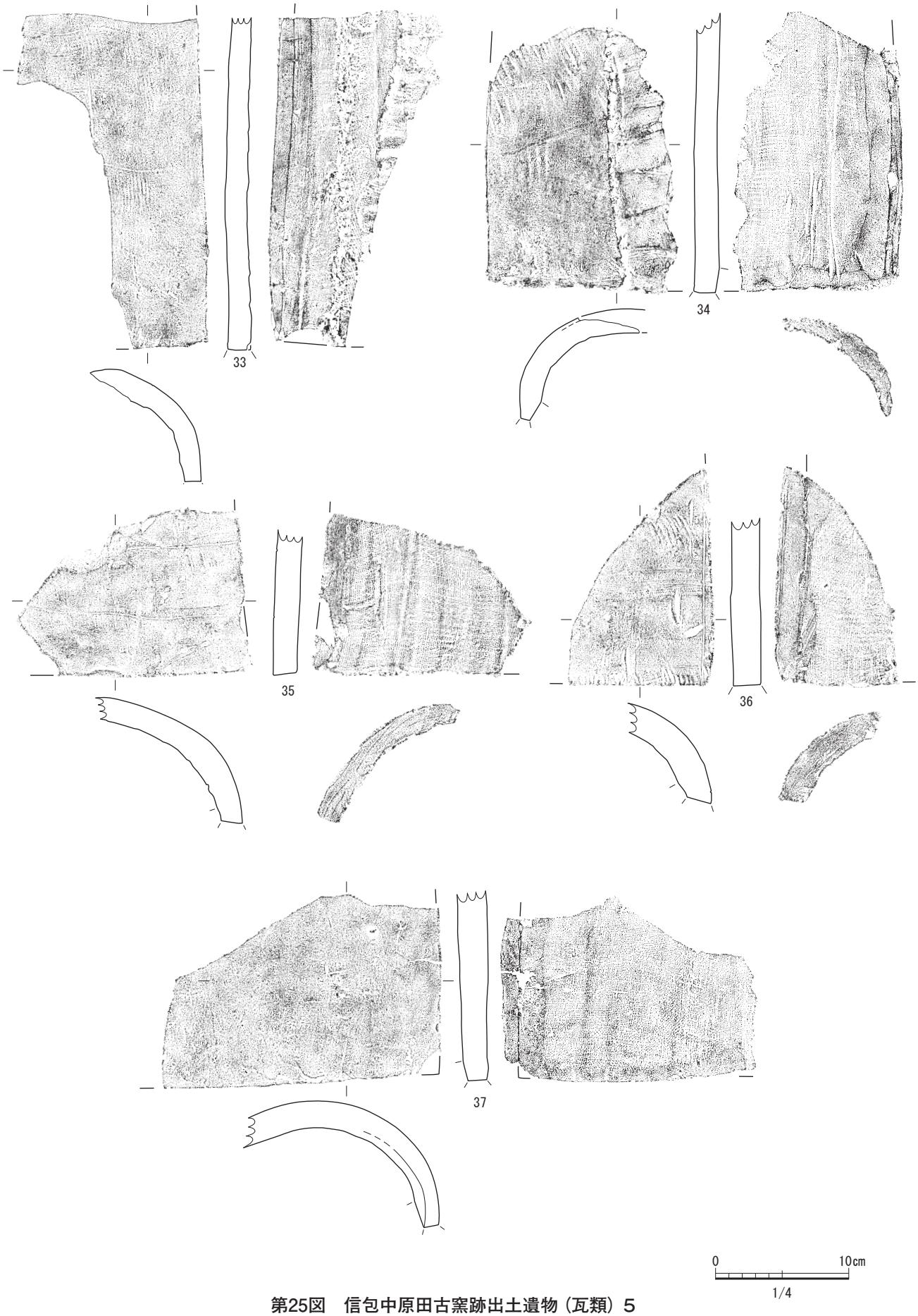
第22図　信包中原田古窯跡出土遺物（瓦類）２



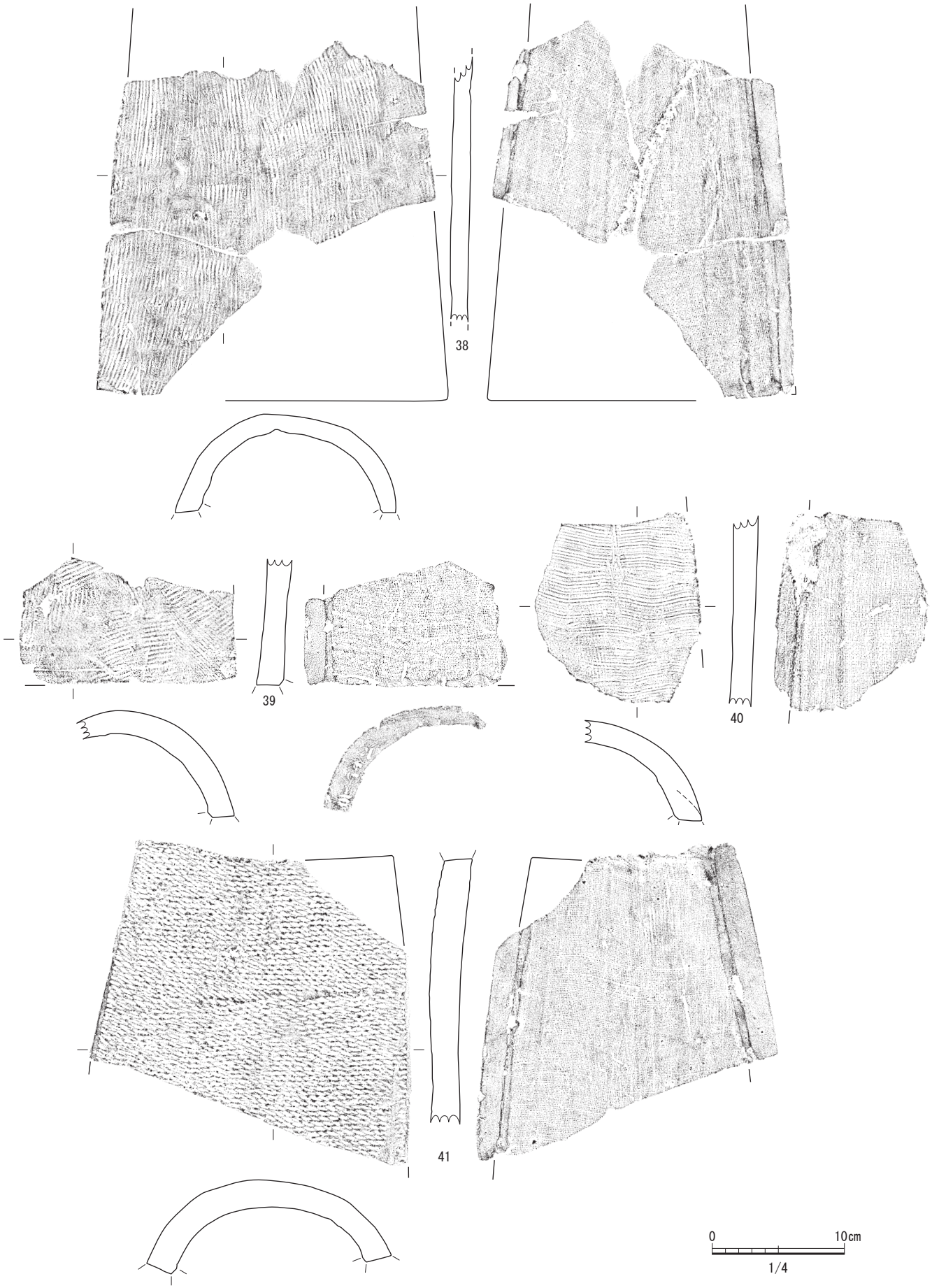
第23図　信包中原田古窯跡出土遺物（瓦類）３



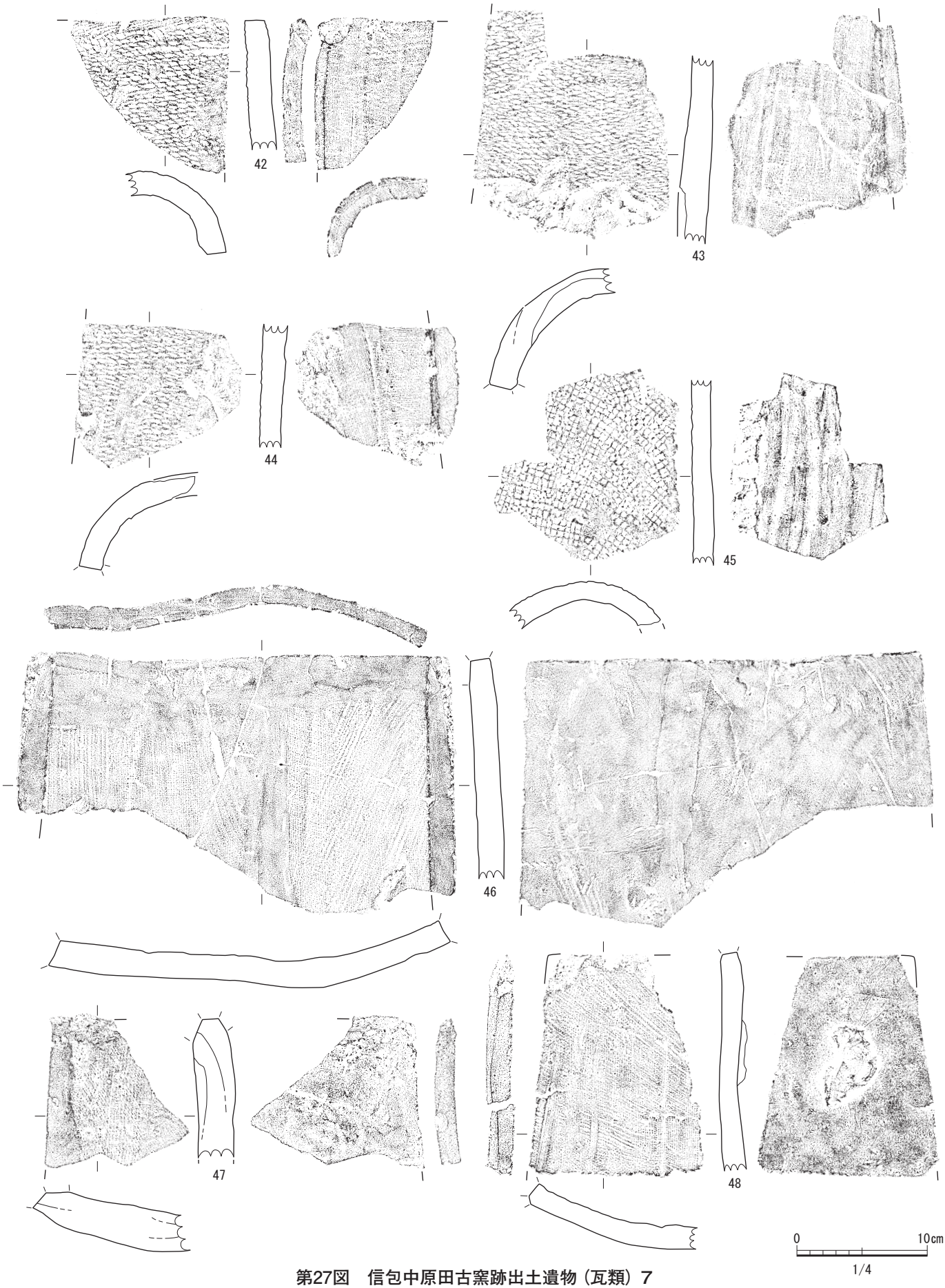
第24図　信包中原田古窯跡出土遺物（瓦類）４



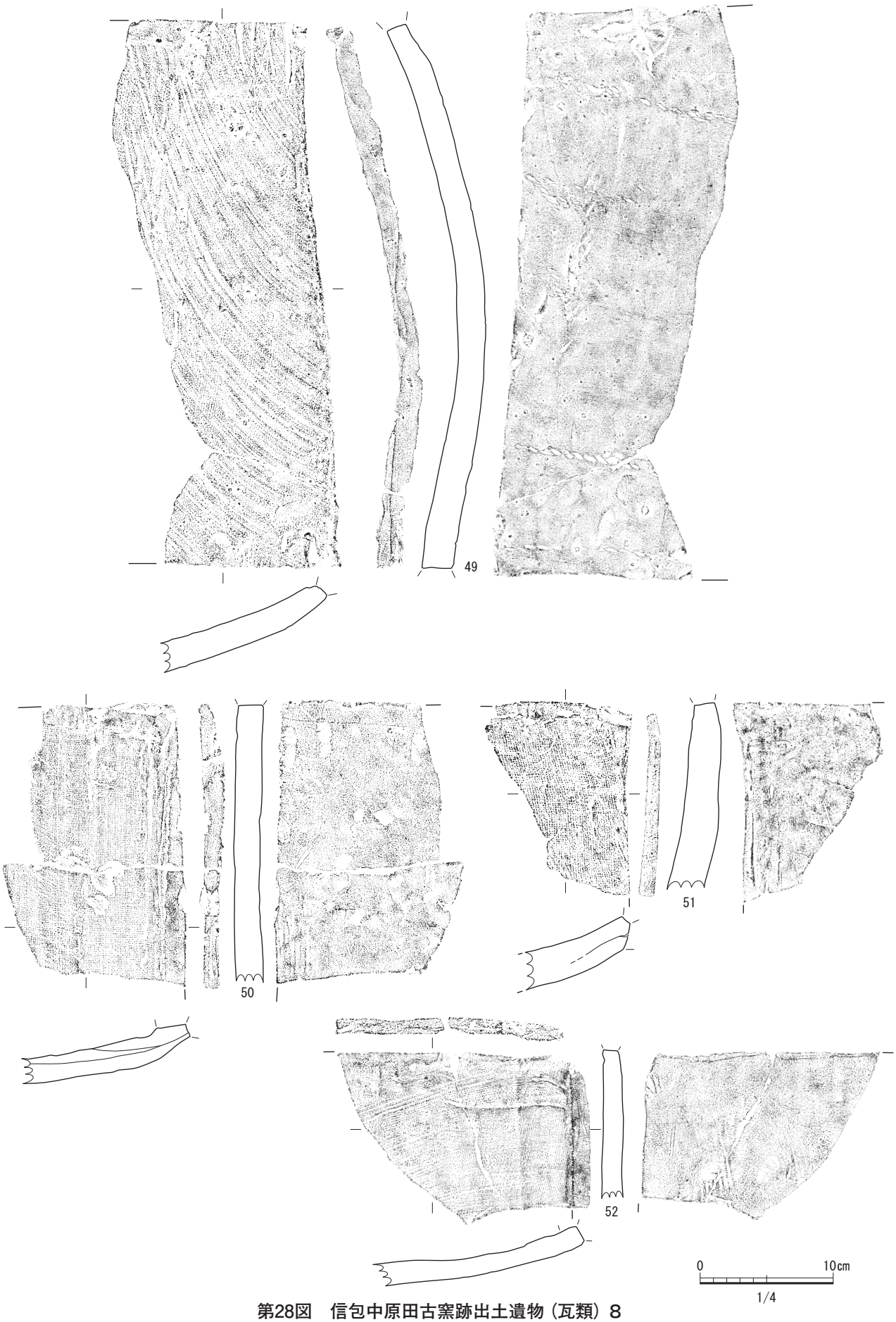
第25図　信包中原田古窯跡出土遺物（瓦類）５



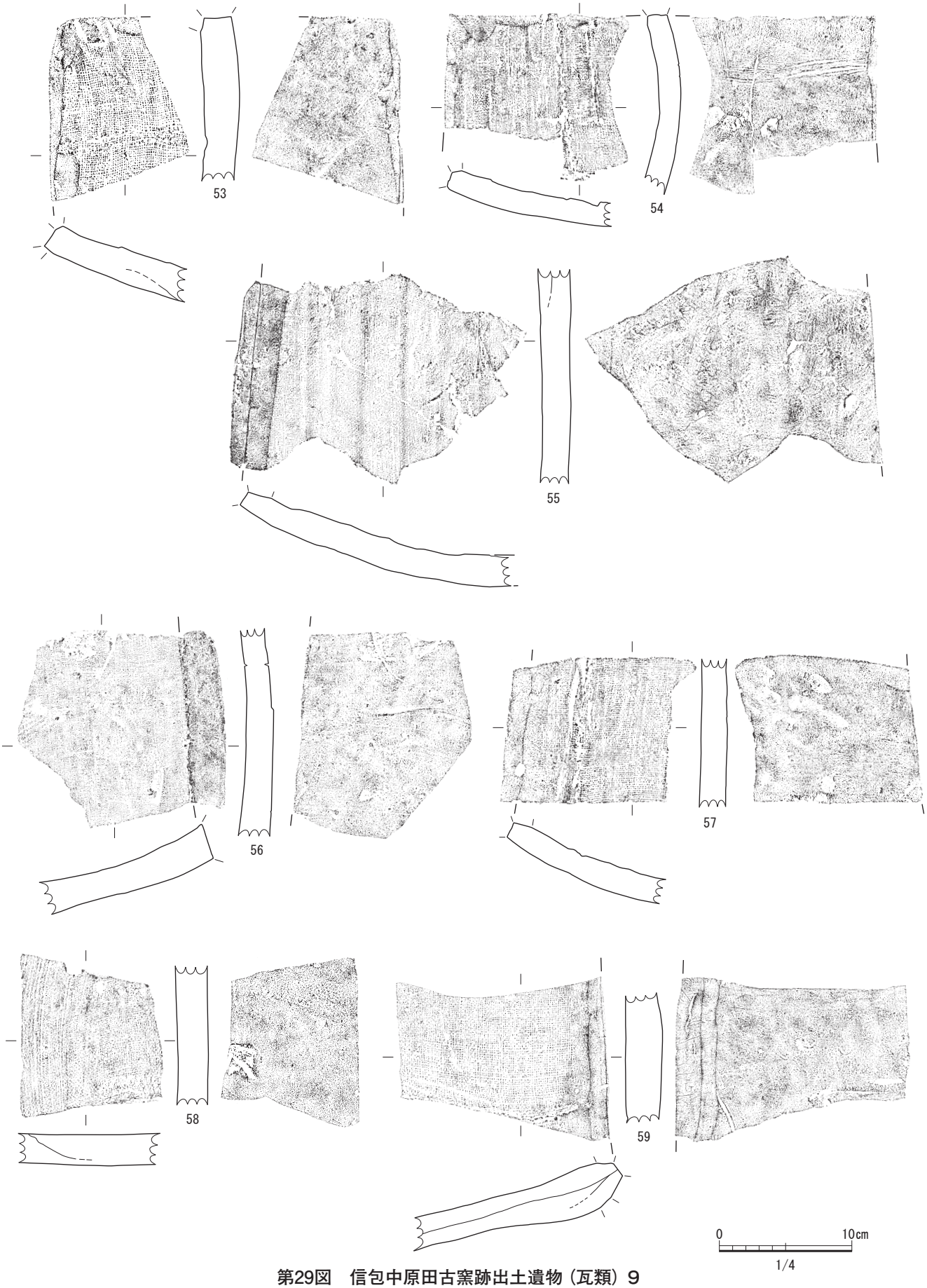
第26図　信包中原田古窯跡出土遺物（瓦類）６



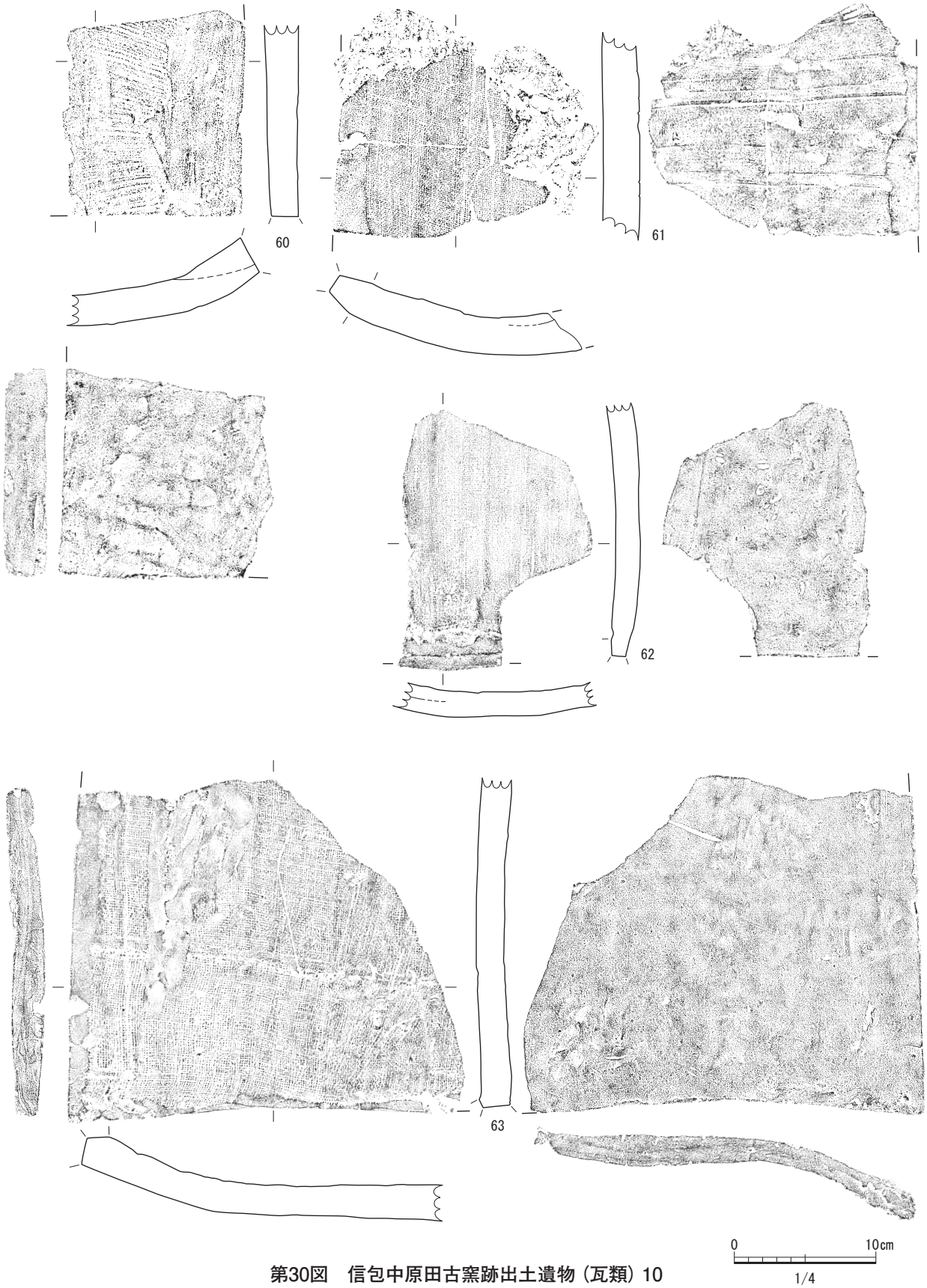
第27図　信包中原田古窯跡出土遺物（瓦類）７



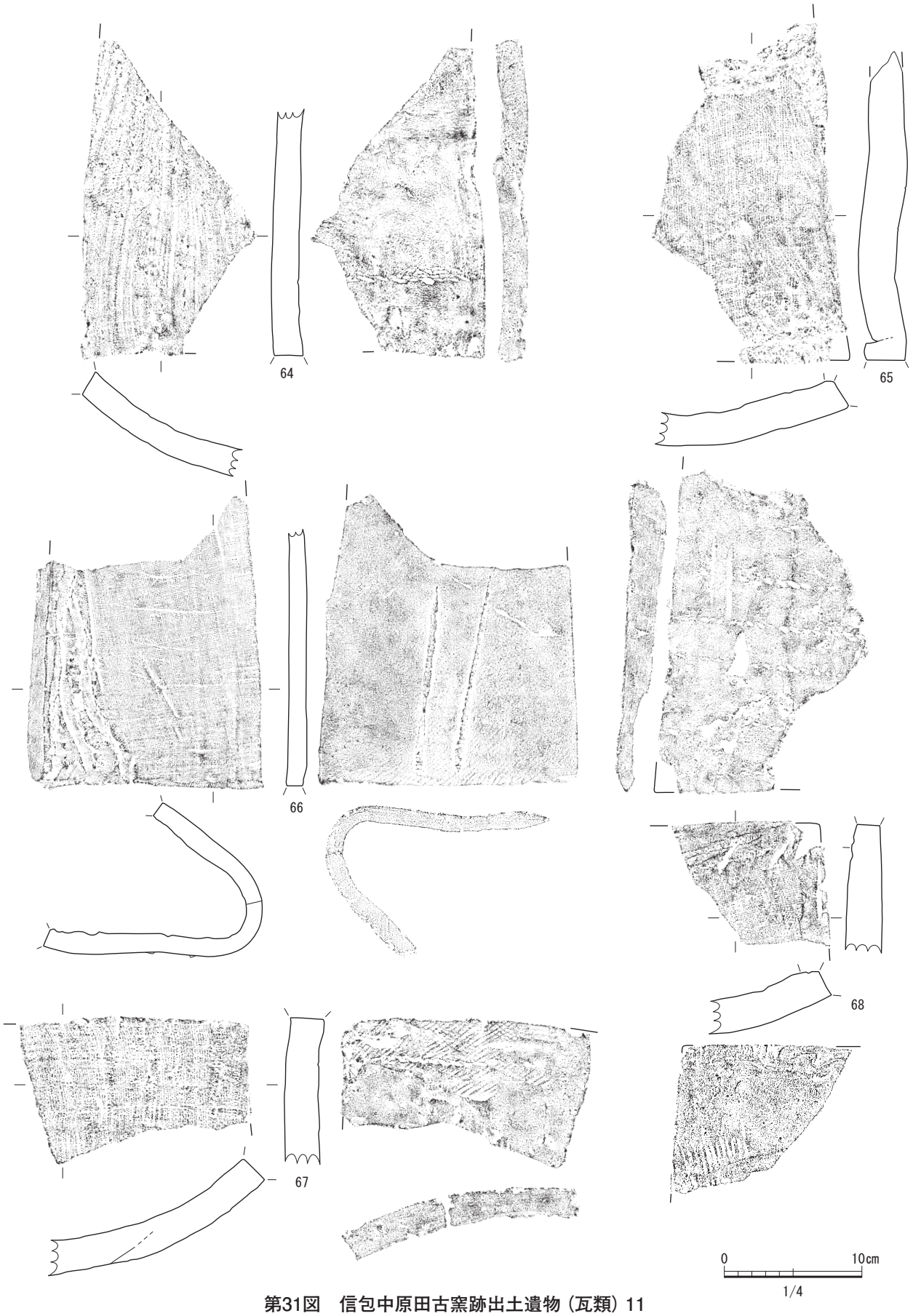
第28図　信包中原田古窯跡出土遺物（瓦類）８



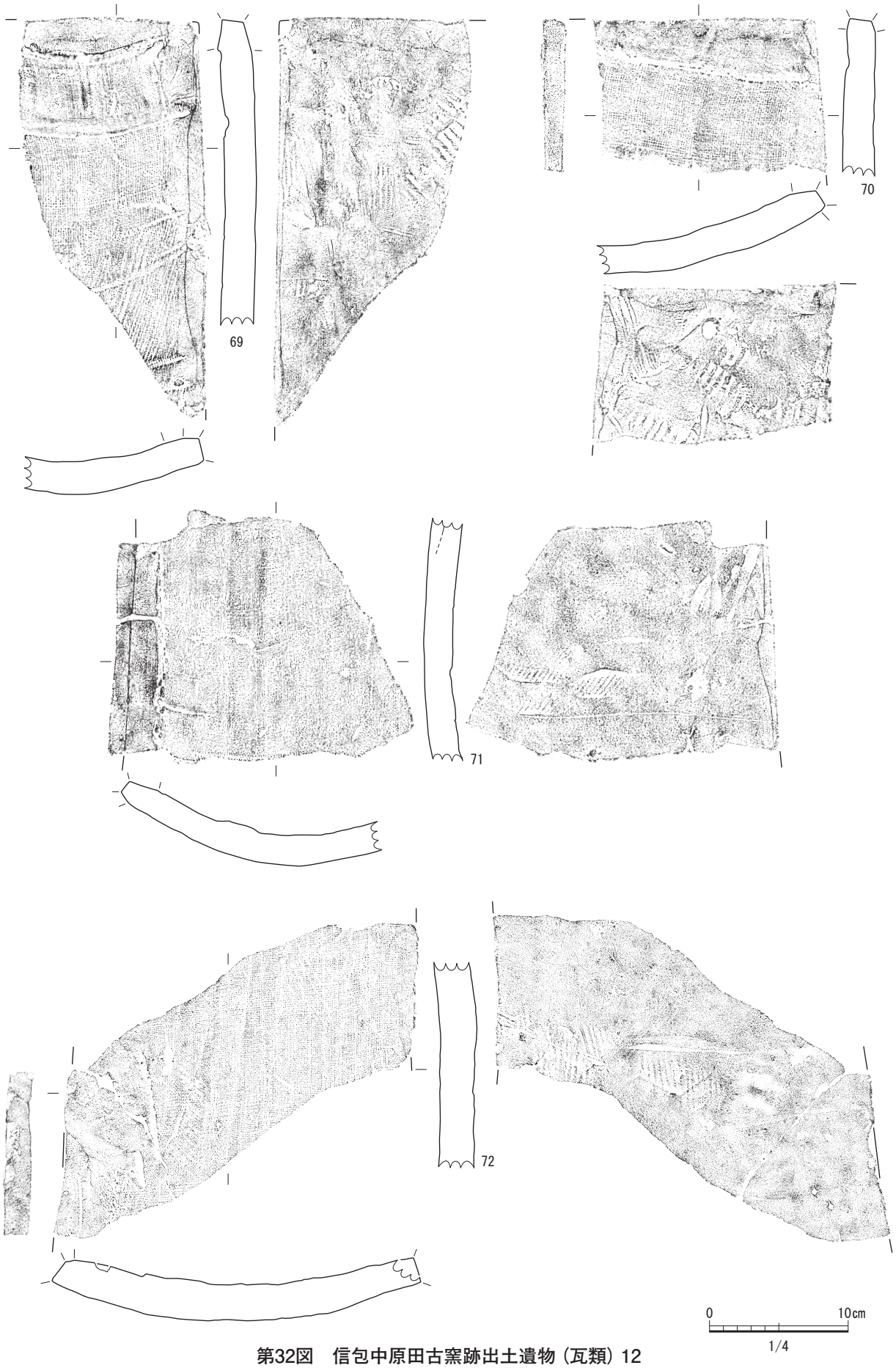
第29図　信包中原田古窯跡出土遺物（瓦類）９



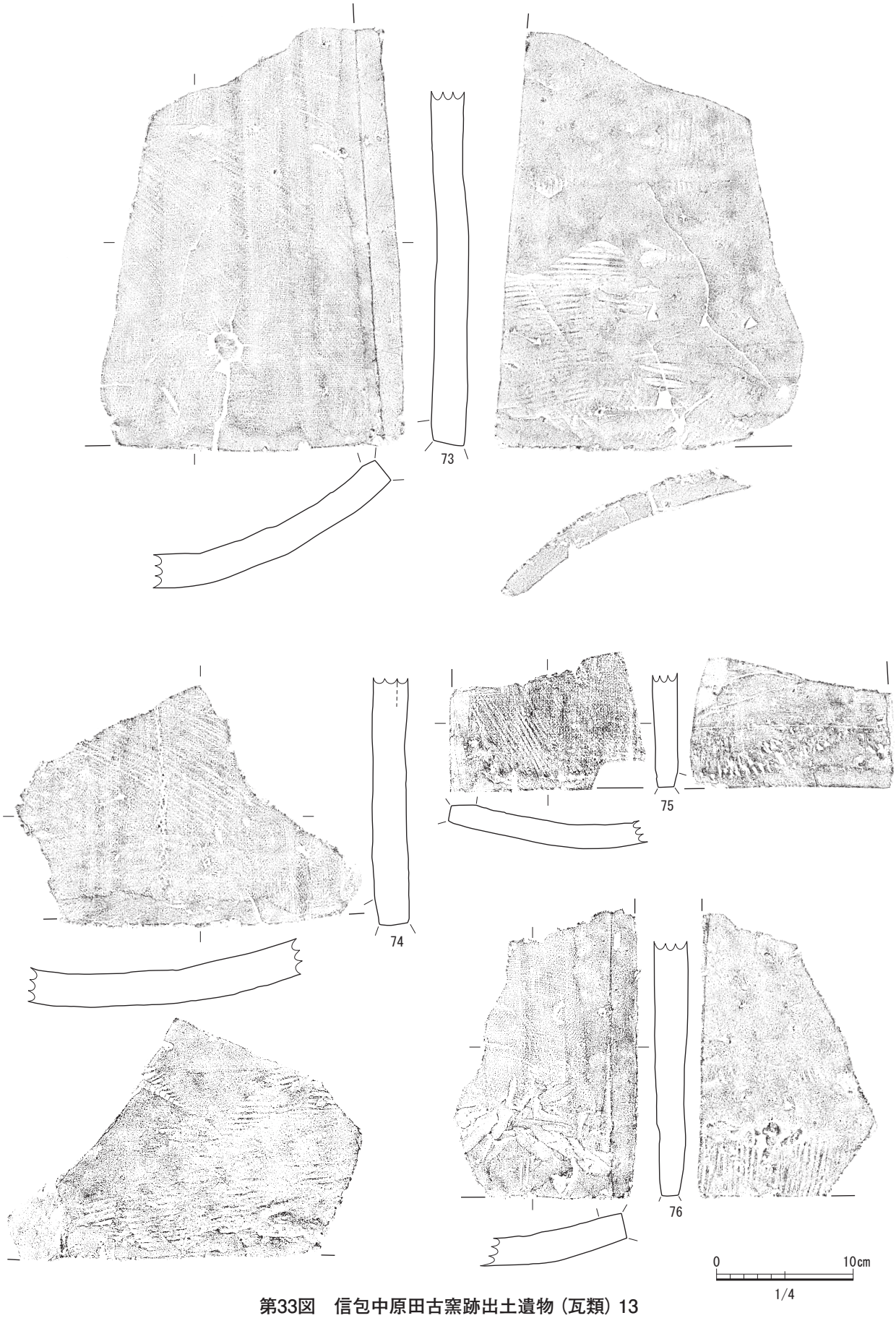
第30図　信包中原田古窯跡出土遺物（瓦類）10



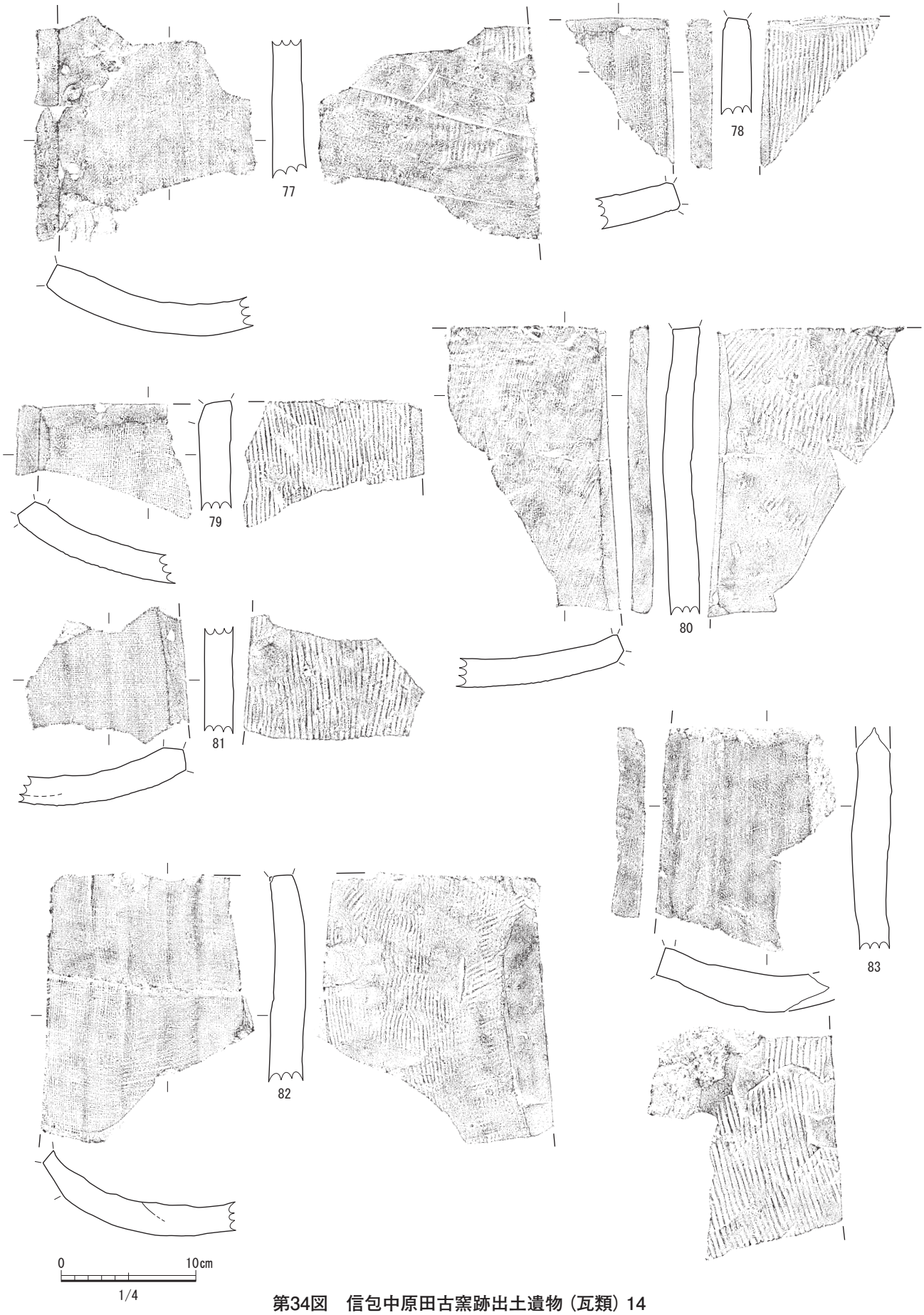
第31図　信包中原田古窯跡出土遺物（瓦類）11



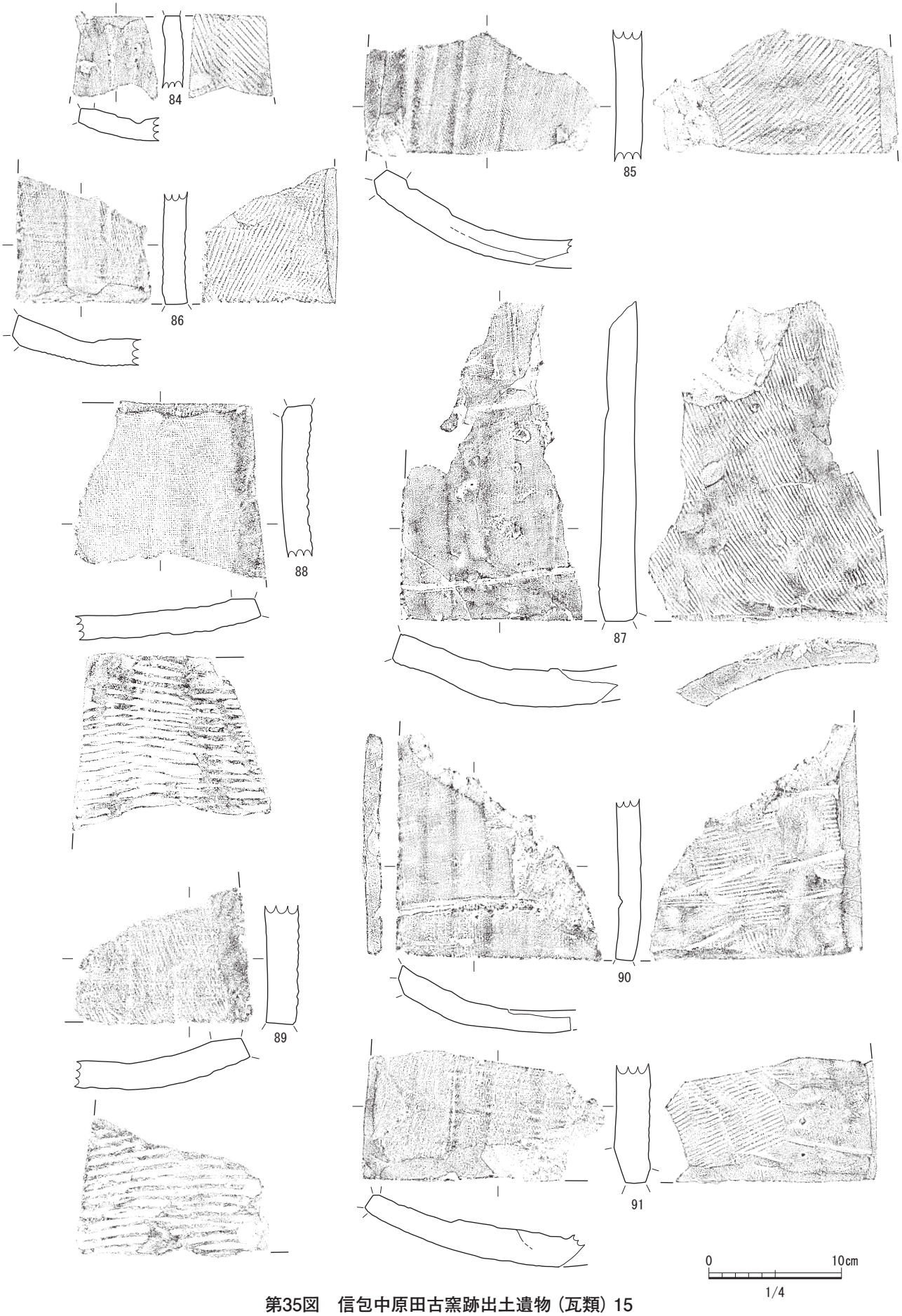
第32図　信包中原田古窯跡出土遺物（瓦類）12



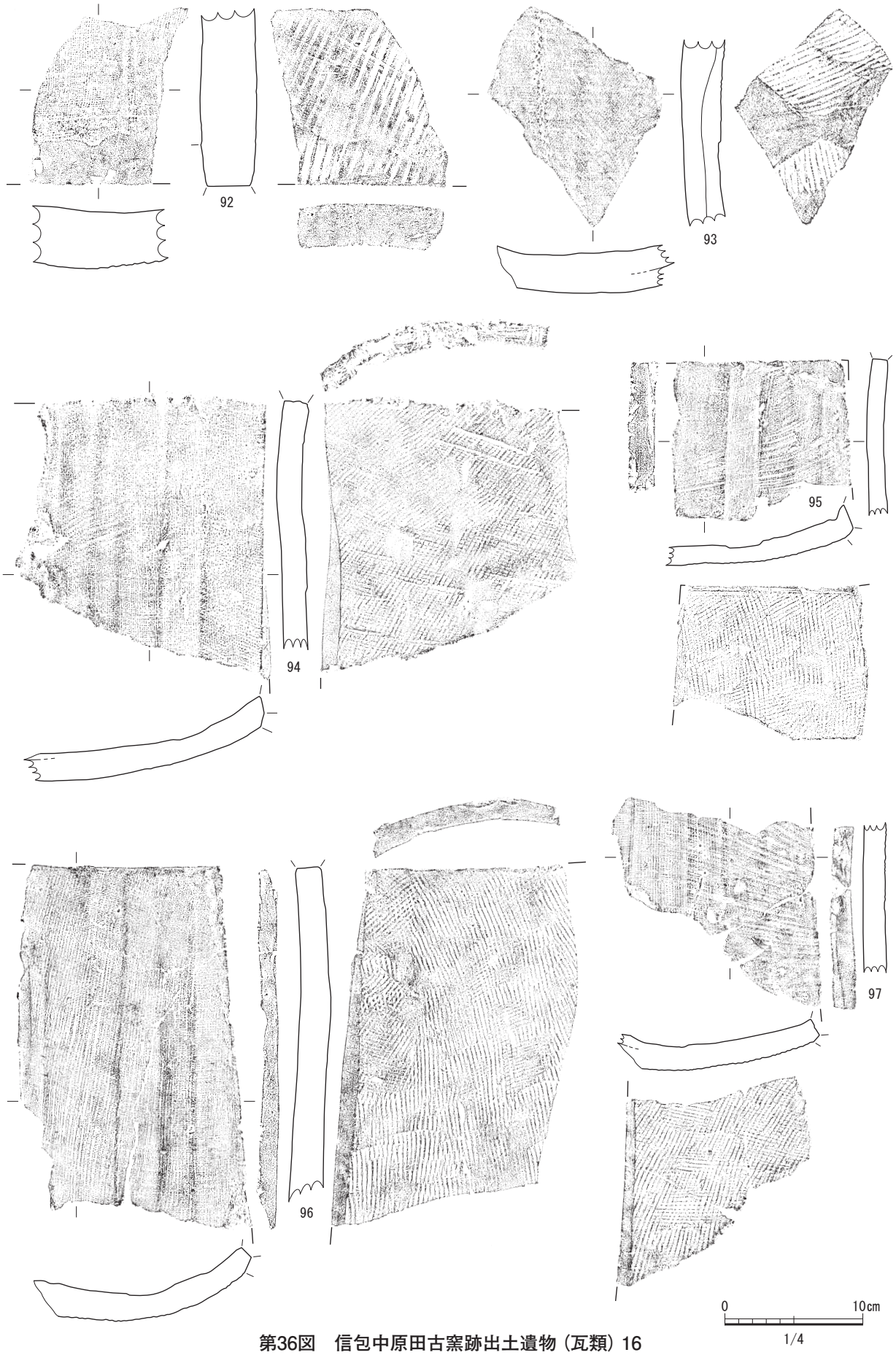
第33図　信包中原田古窯跡出土遺物（瓦類）13



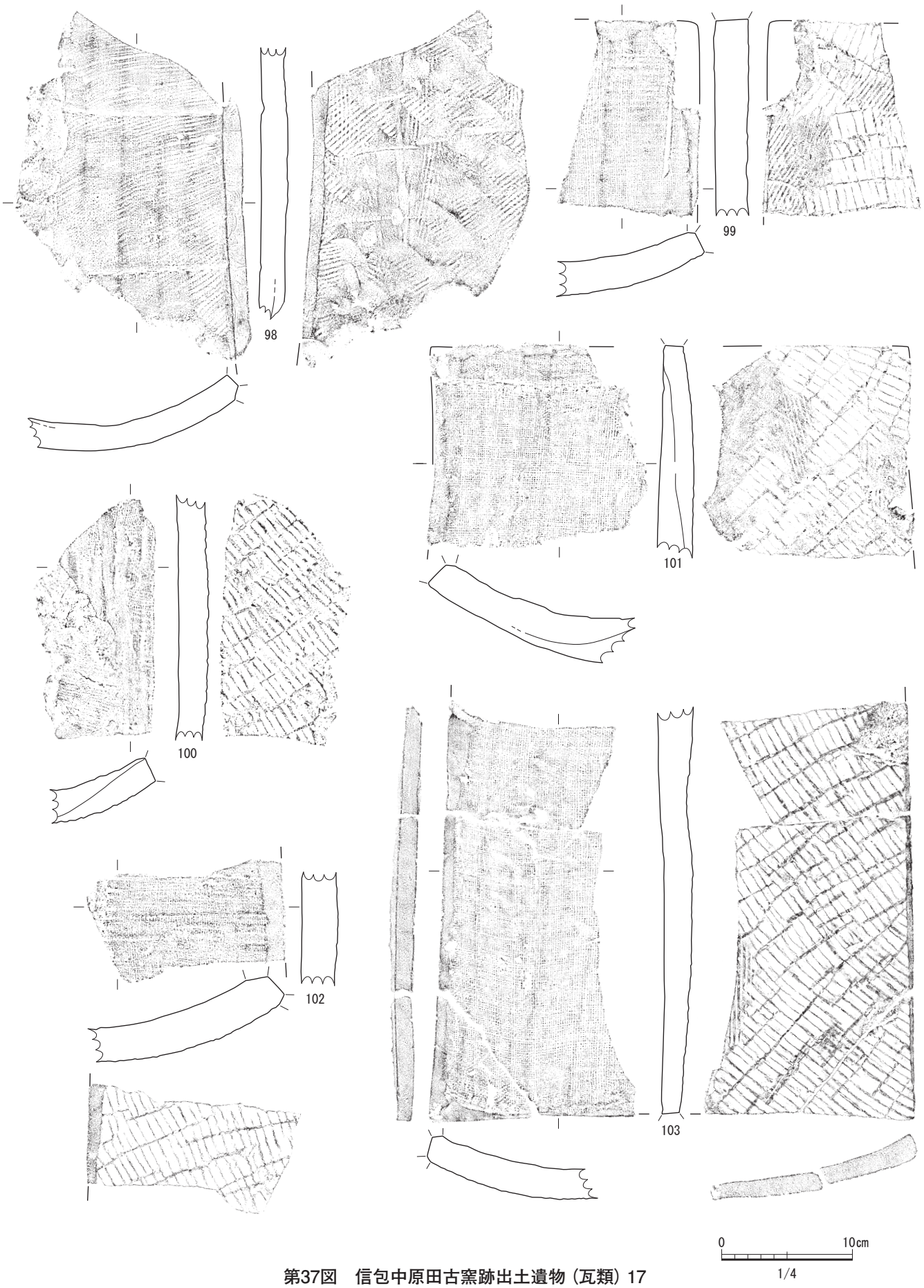
第34図　信包中原田古窯跡出土遺物（瓦類）14



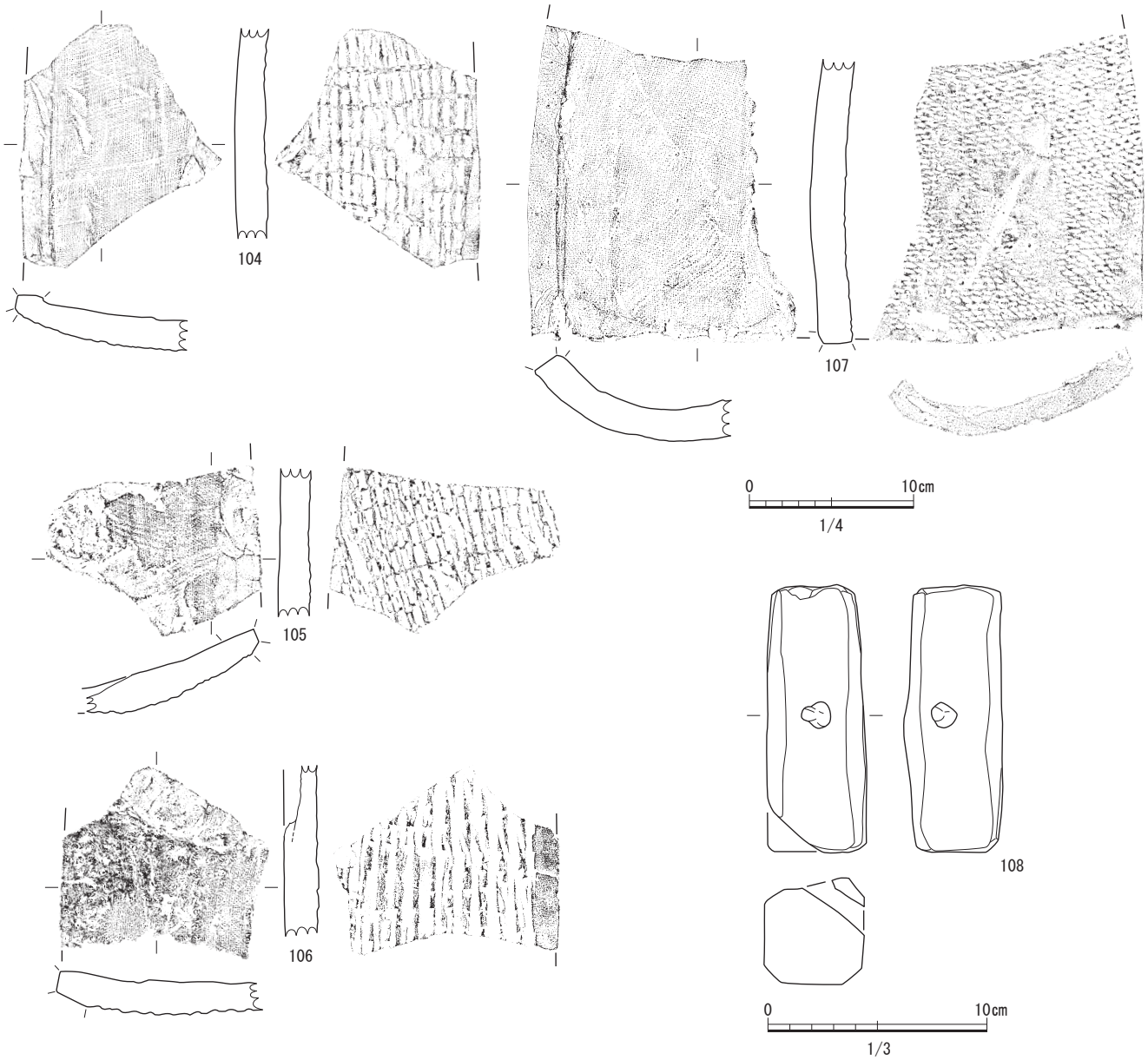
第35図　信包中原田古窯跡出土遺物（瓦類）15



第36図　信包中原田古窯跡出土遺物（瓦類）16



第37図　信包中原田古窯跡出土遺物（瓦類）17



第38図　信包中原田古窯跡出土遺物（瓦類・陶製品）18

第２表　信包中原田古窯跡出土遺物（須恵器類）観察表

[ ]は現存値、( )は推定値

番号	出土位置	層位	器種	法量（cm）			現存率	胎土	焼成	色調		成形・調整等	備考	挿図番号 図版番号
				口径	底径	器高				外面	内面			
1	E6	灰原	有蓋高坏蓋	(12.0)	－	〔4.0〕	1/4	堅緻。白色小粒子・黒色粒子含み、ざらつく。	良好	5Y6/1～3/1 灰～オリーブ黒	5Y6/1 灰	天井部1/2回転ヘラ削り。	摘み部欠損。	第８図 図版７
2	C80・100	灰原	有蓋高坏蓋	(12.4)	－	〔4.5〕	1/3強	堅緻。白色小粒子含む。	良好	10Y3/1 オリーブ黒	2.5Y3/1 黒褐	天井部1/2回転ヘラ削り。	摘み部ボタン状。	第８図 図版７
3	D124	灰原	坏H蓋	(12.2)	－	(3.1)	1/8	堅緻。白色小粒子･小礫含む。	良好	5Y6/1 灰	7.5YR5/1 褐灰	天井部1/2回転ヘラ削り。		第８図
4	D25	灰原	坏H蓋	(12.6)	－	(3.0)	1/6弱	堅緻。白色小粒子含む。	良好	10Y5/1 灰	10Y5/1 灰	天井部1/2回転ヘラ削り。		第８図
5	D16	灰原	坏H身	(10.1)	－	〔3.5〕	1/6	堅緻。白色小粒子含む。	良好	5Y5/2 灰オリーブ	5Y5/2 灰オリーブ	底部1/2弱回転ヘラ削り。		第８図
6	D18	灰原	坏H身	(10.2)	－	(3.2)	1/8	堅緻。白色粒子・細礫少量含む。	良好	2.5Y6/2 灰黄	2.5Y6/2 灰黄	底部1/2弱回転ヘラ削り。		第８図
7	C52	灰原	坏H身	(10.2)	－	〔2.4〕	1/8	堅緻。白色小粒子含む。	良好	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	底部に一部回転ヘラ削り。	内面に降灰。	第８図
8	C49、D15	灰原	坏H身	(11.0)	－	〔2.8〕	1/4弱	白色小粒子・細礫少量含む。	良好	5Y5/2 灰オリーブ	2.5Y6/2 灰黄	底部1/3弱回転ヘラ削り。		第８図
9	D17	灰原	坏H身	(12.6)	－	〔3.2〕	1/6	堅緻。白色微～小粒子多く含む。	良好	5Y5/3 灰オリーブ	7.5Y7/1 灰白	全面回転ナデ。	外面に降灰。	第８図
10	B142	－	坏G蓋	(13.4)	－	(2.2)	1/4弱	堅緻。白色・黒色粒子含む。	良好	N5/（B） 灰	N5/（B） 灰	天井部2/3回転ヘラ削り。	返り蓋。	第８図 図版７
11	灰原	－	坏G蓋	(13.6)	－	〔1.7〕	1/6	白色微粒子少量含む。	良好	5 Y4/1 灰	5 Y4/1 灰	天井部全面回転ヘラ削り。	返り蓋。摘み部欠損。	第８図
12	A94	－	坏G蓋	(14.0)	－	〔2.0〕	1/7	堅緻。白色小粒子やや多く含む。	良好	10Y4/1 灰	10Y4/1 灰	天井部ほぼ全面回転ヘラ削り。	返り蓋。摘み部欠損。	第８図
13	焚口部左側	木炭層	坏G蓋	(14.0)	－	〔1.4〕	1/4弱	堅緻。白色微～小粒子やや多く含む。	良好	10Y4/1 灰	10Y4/1 灰	天井部ほぼ全面回転ヘラ削り。	返り蓋。摘み部欠損。	第８図
14	灰原	－	坏G蓋	(14.2)	－	(2.3)	1/5	白色小粒子含む。	良好	5Y6/1 灰	5Y6/1 灰	天井部ヘラ切り。	返り蓋。摘み部欠損。	第８図
15	C46	－	坏G蓋	(15.4)	－	〔1.1〕	1/4弱	白色小粒子、黒色の斑点含む。	良好	10Y5/1 灰	10Y5/1 灰	天井部2/3回転ヘラ削り。	返り蓋。摘み部欠損。	第８図
16	A1・8・9	－	坏G蓋	(17.0)	－	〔2.0〕	1/3	白色粒子・小礫含む。	酸化焔焼成ぎみ	10Y6/1 灰	2.5Y7/2～6/2 灰黄	天井部2/3回転ヘラ削り。	返り蓋。摘み部欠損。	第８図 図版７
17	B5	－	坏G蓋	(17.0)	－	〔2.1〕	1/8	堅緻。白色・黒色粒子含む。	良好	2.5Y5/1 黄灰	2.5Y5/1 黄灰	天井部2/3回転ヘラ削り。	返り蓋。摘み部欠損。	第８図
18	焚口部	木炭層	摘み蓋	(12.0)	－	〔1.3〕	1/4弱	堅緻。白色微～小粒子含む。	良好	10Y5/1～4/1 灰	10Y5/1～4/1 灰			第８図
19	B140	－	摘み蓋	14.6	－	3.6	1/3	堅緻。白色微粒子・細礫含む。	良好	5Y6/1 灰	5Y6/1 灰	天井部1/3弱回転ヘラ削り。	摘み部径3.5cm。内面重ね焼きによる変色。	第８図 図版７
20	B115・135・143	－	摘み蓋	15.7	－	3.5	1/2強	堅緻。白色微粒子・細礫含む。	良好	5YR4/3～5Y5/2 にぶい赤褐～灰オリーブ	5YR4/3～5Y5/2 にぶい赤褐～灰オリーブ	天井部2/3回転ヘラ削り。	摘み部径3.5cm。	第８図 図版７
21	D149	－	摘み蓋	(16.0)	－	〔1.9〕	1/8	堅緻。白色・黒色粒子含む。	良好	10Y4/1 灰	10Y4/1 灰	天井部回転ナデ。	口縁端部が外反する。	第８図
22	A199	－	摘み蓋	(16.1)	－	〔2.9〕	1/4	堅緻。白色粒子含む。	良好	5Y5/1 灰	5Y5/1 灰	天井部1/2回転ヘラ削り。		第８図
23	焚口部	木炭層	摘み蓋	(16.2)	－	(2.8)	1/3	堅緻。白色微粒子やや多く含む。	良好	5GY4/1 暗オリーブ灰	5Y7/1 灰白	天井部1/3回転ヘラ削り。	摘み部径4.0cm。歪みで扁平になる。	第８図 図版７
24	焚口部	木炭層	摘み蓋	(16.4)	－	〔3.2〕	1/4	堅緻。白色微粒子～1㎜大の礫含む。	良好	10Y5/1 灰	10Y5/1 灰	天井部2/3回転ヘラ削り。	摘み部欠損。	第８図
25	焼成部、焚口部左	－ 木炭層	摘み蓋	16.8	－	4.2	2/3弱	堅緻。白色微粒子～0.5㎜大の礫含む。	良好	10Y4/1 灰	10Y4/1 灰	天井部1/2回転ヘラ削り。	摘み部4.4cm。歪み・ひび割れ顕著。	第８図 図版７
26	A111	－	摘み蓋	(16.9)	－	2.6	3/4	堅緻。白色微粒子～1㎜大の礫含む。	酸化焔焼成ぎみ	5Y5/2～5/3 灰オリーブ	5Y5/2～5/3 灰オリーブ	天井部2/3回転ヘラ削り。	摘み部径4.4cm。	第８図 図版７
27	C85	－	摘み蓋	(17.0)	－	〔1.5〕	1/4弱	白色小粒子含み、黒色斑顕著。	良好	5Y5/1 灰	5Y5/1 灰	外面自然釉付着、調整不明。	摘み部欠損。内面に別器種癒着。	第８図 図版７
28	焚口部左側	下層	摘み蓋	(17.2)	－	4.2	1/5	堅緻。白色微粒子・6㎜大の礫含む。	良好	5Y4/1 灰	2.5Y6/1 黄灰	天井部1/3回転ヘラ削り。	摘み部径3.6cm。	第９図 図版７
29	燃焼部	－	摘み蓋	17.1	－	(2.4)	1/2	堅緻。白色粒子含む。	良好	2.5Y5/1 黄灰	2.5Y5/1 黄灰	天井部ほぼ全面回転ヘラ削り。	摘み部径3.6cm。歪み顕著。	第９図 図版７
30	燃焼部	－	摘み蓋	(17.4)	－	〔2.1〕	1/4強	白色微粒子含む。	酸化焔焼成ぎみ	10YR5/3 にぶい横褐	10YR5/3 にぶい横褐	天井部2/3回転ヘラ削り。		第９図
31	焼成部	－	摘み蓋	18.2	－	(3.2)	2/3弱	微細～1㎜大の白色粒子やや多く含む。	良好	5Y6/1～3/1 灰～オリーブ黒	5Y6/1～3/1 灰～オリーブ黒	天井部2/3回転ヘラ削り。	摘み部径4.0cm。歪み顕著。	第９図
32	A118・D108	－	摘み蓋	(18.2)	－	〔2.6〕	2/3強	白色微粒子・細砂粒含む。	酸化焔焼成ぎみ	5Y7/1～6/1 灰白～灰	5Y7/1～6/1 灰白～灰	天井部1/2弱回転ヘラ削り。	摘み部欠損。	第９図 図版７
33	燃焼部	－	摘み蓋	(18.6)	－	〔2.7〕	1/4	堅緻。白色粒子含む。	良好	5Y7/1 灰白	2.5Y6/1 黄灰	天井部3/4回転ヘラ削り。	内面に重ね焼き痕。	第９図 図版７
34	焚口部左側	下層	摘み蓋	(18.8)	－	〔2.5〕	1/5	堅緻。白色粒子小粒子やや多く含む。	良好	10Y4/1 灰	10Y4/1 灰	天井部3/4回転ヘラ削り。	摘み部欠損。	第９図
35	燃焼部、前庭部	－ 下層	摘み蓋	－	－	〔2.7〕	2/3強	白色粒子・小礫含む。	酸化焔焼成	10YR8/4 浅黄橙	2.5Y5/2 暗灰黄	天井部1/2弱回転ヘラ削り。	摘み部径3.7cm。	第９図 図版７
36	B141	－	摘み蓋	(22.0)	－	(3.0)	1/4弱	微細～1㎜大の白色粒子含む。	良好	2.5Y6/1～5Y4/1 黄灰～灰	5Y6/1 灰	天井部ほぼ全面回転ヘラ削り。	摘み部径4.5cm。歪み顕著。	第９図 図版７
37	焚口部左側	木炭層、焚口上層	摘み蓋	－	－	〔2.6〕	1/4弱	堅緻。白色微粒子多く含む。	良好	10Y4/1 灰	10Y4/1 灰	天井部1/3回転ヘラ削り。	摘み部径4.0cm。	第９図 図版７
38	焚口部左側	木炭層	摘み蓋	－	－	〔1.5〕	摘み部	堅緻。白色微粒子多く含む。	良好	2.5Y4/1 黄灰	5Y4/1 灰	天井部回転ヘラ削り。	摘み部径4.2cm。溶解物付着。	第９図
39	焼成部	－	摘み蓋	－	－	〔2.3〕	摘み部	堅緻。白色微粒子・黒色粒子含む。	良好	10Y3/1 オリーブ黒	10Y3/1 オリーブ黒	天井部回転ヘラ削り。	摘み部径4.0cm。	第９図 図版７
40	焼成部	－	摘み蓋	－	－	〔1.8〕	摘み部現存	堅緻。白色微粒子・小粒子含む。	良好	5Y4/1 灰	5Y4/1 灰	天井部回転ヘラ削り。	摘み部径4.2cm。	第９図 図版７
41	焚口部左側	木炭層	摘み蓋	－	－	〔1.7〕	天井部1/3弱	堅緻。白色微粒子・小礫含む。	良好	7.5Y6/1～5/1 灰	7.5Y6/1～5/1 灰	天井部1/3弱回転ヘラ削り。	摘み部径3.8cm。	第９図 図版７
42	灰原	－	摘み蓋	－	－	〔2.3〕	天井部1/5	堅緻。白色粒子・小礫含む。	良好	7.5Y4/1 灰	N/5（B） 灰	天井部降灰により調整不明。	摘み部径3.8cm。	第９図

番号	出土位置	層位	器種	法量（cm）			現存率	胎土	焼成	色調		成形・調整等	備考	挿図番号 図版番号
				口径	底径	器高				外面	内面			
43	焼成部	－	摘み蓋	－	－	〔2.7〕	天井部 1/3強	堅緻。微細白色粒子・細礫含む。	良好	N6/（B） 灰	N6/（B） 灰	天井部回転ヘラ削り。	摘み部径3.6cm。	第９図 図版８
44	A32	木炭 下層	摘み蓋	－	－	〔2.1〕	天井部 2/3弱	微細～1mm大の白色粒子・細礫含む。	酸化焔 焼成ぎみ	7.5Y5/1～3/1 灰～オリーブ黒	5Y6/2 灰オリーブ	天井部回転ヘラ削り。	摘み部径3.5cm。	第９図 図版８
45	前庭部中央	上層	摘み蓋	－	－	〔2.8〕	天井部 1/3	緻密。白色粒子･細砂粒含む。	酸化焔 焼成ぎみ	7.5Y4/1 灰	2.5Y7/1～6/1 灰白～灰	天井部一部回転ヘラ削り。	摘み部径3.5cm。	第９図 図版８
46	前庭部	下層	摘み蓋	－	－	〔3.1〕	天井部 1/2	堅緻。白色粒子･細砂粒含む。	良好	2.5Y7/1～6/1 灰白～黄灰	2.5Y7/1～6/1 灰白～黄灰	天井部1/3回転ヘラ削り。	摘み部径3.4cm。	第９図 図版８
47	焼成部	－	摘み蓋	－	－	〔2.3〕	摘み部	堅緻。白色微粒子含む。	良好	7.5Y5/1 灰	7.5Y5/1 灰	天井部回転ヘラ削り。	摘み部径3.4cm。 内外面降灰。	第９図 図版８
48	C40	－	摘み蓋	－	－	〔3.6〕	天井部 1/3	堅緻。白色小粒子含み、黒色斑顕著。	良好	5Y5/1 灰	5Y5/1 灰	天井部回転ヘラ削り。	内面に別器種癒着。	第９図 図版８
49	D140	－	摘み蓋	－	－	〔2.5〕	1/3弱	堅緻。白色小粒子含む。	良好	7.5Y6/1 灰	7.5Y6/1 灰	天井部回転ヘラ削り。	摘み部径1.2mm。 摘み部→疑宝珠形。	第９図 図版８
50	E６	－	壺蓋	（8.8）	－	5.3	1/2強	堅緻。白色微粒子含む。	良好	10YR4/2 灰黄褐	10YR6/2 灰黄褐	天井部全面回転ヘラ削り。	外面に自然釉付着。	第９図 図版８
51	焚口部、B2	－	坏G身	9.0	5.5	3.1	1/3強	堅緻。白色粒子・細礫含む。	良好	7.5Y4/1 灰	7.5Y4/1 灰	底部ヘラ切り→周縁回転ヘラ削り。	底部外面に焼成後の沈線あり。	第９図 図版８
52	C54・93	－	坏G身	9.2	6.8	3.5	1/2	堅緻。白色小粒子・細砂粒含む。	良好	7.5Y5/1 灰	7.5Y5/1 灰	底部ヘラ切り→ナデ。	法量比0.74。 径高指数38。	第９図 図版８
53	灰原右T、B131	－	坏G身	（9.4）	（6.8）	3.3	1/4弱	堅緻。白色微粒子・黒色粒子含む。	良好	2.5Y6/1 黄灰	2.5Y6/1 黄灰	底部ヘラ切り。		第９図
54	B106	－	坏G身	（9.2）	（6.0）	4.0	1/4弱	堅緻。白色小粒子含む。	良好	10YR5/2 灰黄褐	2.5Y5/1 黄灰	底部ヘラ切り。	法量比0.65。 径高指数43。	第９図
55	焚口部付近、A75	－	坏G身	（10.0）	（6.1）	（3.5）	1/4弱	堅緻。白色微粒子含む。	良好	10Y5/1 灰	7.5Y5/2 灰オリーブ	底部ヘラ切り。	法量比0.61。 径高指数35。	第９図
56	C93・104	－	坏G身	（10.4）	（5.4）	3.6	1/4	堅緻。白色粒子・細礫含む。	良好	5Y5/2～4/2 灰オリーブ	5Y5/2～4/2 灰オリーブ	底部ヘラ切り→ナデ。	法量比0.52。 径高指数35。	第９図
57	灰原	－	坏G身	（10.4）	5.0	4.0	2/3	堅緻。白色小粒子やや多く含む。	良好	10Y5/1 灰	10Y5/1 灰	底部ヘラ切り。	法量比0.48。 径高指数38。	第10図 図版８
58	B30	－	坏G身	（10.4）	（7.1）	3.4	1/3弱	白色小粒子含む。	酸化焔 焼成ぎみ	10YR5/2 灰黄褐	10YR5/2 灰黄褐	底部ヘラ切り→ナデ。	法量比0.68。 径高指数32。	第10図
59	C55	－	坏G身	（10.8）	（6.8）	4.1	1/5	堅緻。白色小粒子やや多く含む。	良好	10Y4/1 灰	10Y4/1 灰	底部ヘラ切り→ナデ。	法量比0.63。 径高指数38。	第10図
60	B105	－	坏G身	（11.4）	（7.0）	3.9	1/4	白色粒子含む。	良好	2.5Y7/1～5/1 灰白～黄灰	2.5Y7/1～5/1 灰白～黄灰	底部ヘラ切り→ヘラナデ。	法量比0.61。 径高指数34。	第10図
61	A89	－	坏G身	（11.4）	（6.1）	4.0	1/3	堅緻。白色小粒子やや多く含む。	良好	5GY4/1 暗オリーブ灰	5GY4/1 暗オリーブ灰	底部ヘラ切り→ナデ。	法量比0.53。 径高指数35。	第10図 図版８
62	灰原右側T、灰原、B59	－	坏G身	（11.4）	（6.6）	4.0	1/3	堅緻。白色小粒子やや多く含む。	良好	7.5Y5/1 灰	7.5Y5/1 灰	底部ヘラ切り→ナデ。	口縁部が歪む。 法量比0.54。 径高指数33。	第10図 図版８
63	C61	－	坏G身	－	6.2	〔2.7〕	底部 遺存	堅緻。白色粒子含み、黒斑顕著。	良好	7.5Y6/1 灰	7.5Y6/1 灰	底部ヘラ切り→ナデ。		第10図 図版８
64	灰原左側T、B104	－	坏G身	（11.8）	6.4	3.9	2/3	堅緻。白色微粒子含む。	良好	7.5Y4/1 灰	7.5Y4/1 灰	底部ヘラ切り→ナデ。	口縁部が歪む。 法量比0.54。 径高指数33。	第10図 図版８
65	C45	－	坏G身	（12.0）	6.0	3.3	1/3	堅緻。白色微粒子・細礫含み、黒色斑顕著。	良好	10GY4/1 暗緑灰	10GY4/1 暗緑灰	底部ヘラ切り。	内面に別器種（坏G身）癒着。法量比0.50。径高指数28。	第10図
66	燃焼部、A46、灰原	－ 下層	坏G身	（13.2）	7.8	3.2	3/4弱	細砂粒含む。	酸化焔 焼成	2.5Y8/1灰白	2.5Y8/1灰白	底部ヘラ切り→回転ヘラ削り→ナデ。	法量比0.60。 径高指数24。	第10図
67	A19、木炭下層	－	坏G身	－	6.9	〔2.4〕	底部 遺存	白色粒子・細砂粒含み、ややざらつく。	酸化焔 焼成ぎみ	7.5Y6/1～4/1 灰	2.5Y8/1～6/2 灰白～灰黄	底部ヘラ切り→外周回転ナデ。		第10図 図版８
68	焚口部、A103	－	坏G身	－	8.6	〔1.4〕	底部 遺存	白色粒子、小礫含む。	酸化焔 焼成ぎみ	2.5Y7/2～6/2 灰黄	2.5Y7/2～6/2 灰黄	底部ヘラ切り→外周回転ナデ。		第10図 図版８
69	燃焼部、A124	－	坏G身	－	10.0	〔2.6〕	底部 遺存	堅緻。白色粒子・細砂粒含む。	良好	7.5Y6/1～5/2 灰～灰オリーブ	7.5Y6/1～5/2 灰～灰オリーブ	底部ヘラ切り→外周回転ナデ。		第10図 図版８
70	焼成部	－	坏G身	－	11.4	〔1.5〕	底部 2/3弱	堅緻。白色・黒色粒子含む。	良好	7.5YR5/1 灰	7.5YR5/1 灰	底部ヘラ切り→回転ナデ。		第10図 図版８
71	焼成部、前庭部	－ 下層	坏G身	－	8.6	〔1.6〕	底部 遺存	白色粒子・細砂粒含む。	酸化焔 焼成	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	底部ヘラ切り→外周回転ナデ。		第10図 図版９
72	焚口部、灰原・A97	－	坏G身	（15.1）	（9.6）	3.3	1/3弱	堅緻。白色粒子、黒色斑含む。	良好	10Y5/1～4/1 灰	10Y5/1～4/1 灰	底部ヘラ切り→全面ナデ。	法量比0.64。 径高指数22。	第11図 図版９
73	A62、木炭下層	－	坏G身	（15.2）	（9.4）	3.3	2/3	堅緻。白色・褐色粒子含む。	良好	5B3/1 暗青灰	10Y5/1 灰	底部ヘラ切り→ナデ。	法量比0.62。 径高指数22。	第11図 図版９
74	焚口部左側	木炭層	坏G身	（15.1）	（11.0）	（3.5）	1/4	堅緻。白色粒子含む。	良好	10Y5/1 灰	10Y5/1 灰	底部ヘラ切り→ナデ。	法量比0.73。 径高指数24。	第11図
75	A117	－	坏G身	（16.2）	（10.0）	（2.8）	1/4弱	堅緻。白色粒子・細砂粒含む。	良好	2.5Y3/1 黒褐	7.5Y5/1～4/1 灰	底部ヘラ切り→ナデ。	法量比0.62。 径高指数17。	第11図
76	A73・101	－	坏A身	（10.1）	7.0	4.0	1/3 底部存	堅緻。白色粒子・細砂粒含み、ざらつく。	良好	5Y6/1 灰	5Y6/1 灰	底部全面回転ヘラ削り。	法量比0.69。 径高指数40。	第11図 図版９
77	前庭部左最下層、C92、灰原	－	坏A身	（14.4）	7.0	3.3	2/3	堅緻。白色粒子･細礫･黒色斑含み、ざらつく。	良好	10Y5/1 灰	10Y5/1 灰	底部全面回転ヘラ削り。	器形歪む。 法量比0.49。 径高指数22。	第11図 図版９
78	C51	－	坏A身	（14.0）	10.4	3.1	2/3	堅緻。白色・黒褐色粒子・細砂粒・小礫含む。	良好	10Y4/1 灰	10Y4/1 灰	底部全面回転ヘラ削り。	器形全体に歪む。 法量比0.74。 径高指数22。	第11図 図版９
79	C72	－	坏A身	（15.9）	10.4	4.0	2/3	堅緻。白色粒子・細砂粒含む。	良好	10YR4/1 灰	10YR4/1 灰	底部全面回転ヘラ削り。	法量比0.65。 径高指数25。	第11図 図版９
80	焚口部	木炭層	坏A身	－	（10.2）	〔1.5〕	底部 1/4弱	堅緻。白色粒子・細礫含む。	良好	5Y6/1 灰	5Y6/1 灰	底部全面回転ヘラ削り。		第11図 図版９
81	前庭部	最下層	坏A身	－	（10.5）	〔2.3〕	底部 1/4	堅緻。白色粒子・細礫含む。	良好	5Y7/1～6/1 灰白～灰	5Y7/1～6/1 灰白～灰	底部全面回転ヘラ削り。		第11図 図版９
82	灰原	－	坏A身	－	（10.5）	〔1.7〕	底部 3/4	白色・赤色粒子含む。	酸化焔 焼成ぎみ	10YR6/2 灰黄褐	10YR6/2 灰黄褐	底部全面回転ヘラ削り。		第11図 図版９
83	B146	－	坏A身	（19.0）	（13.7）	4.2	1/4弱	堅緻。白色粒子含む。	良好	2.5Y5/2 灰	2.5Y5/2 灰	底部全面回転ヘラ削り。		第11図 図版９

番号	出土位置	層位	器種	法量（cm）			現存率	胎土	焼成	色調		成形・調整等	備考	挿図番号 図版番号
				口径	底径	器高				外面	内面			
84	灰原	－	坏A身	－	(14.0)	〔3.1〕	1/6弱	白色粒子含む。	酸化焔焼成ぎみ	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	底部全面回転ヘラ削り。		第11図
85	灰原	－	盤	－	－	(2.2)	小破片	堅緻。白色粒子・細礫含む。	良好	7.5Y5/1 灰	7.5Y5/1 灰	底部ヘラ切り→外周回転ヘラ削り。	外面降灰。 内面に付着物。	第11図
86	A82	－	坏B身	－	(6.0)	〔2.4〕	1/4	堅緻。白色粒子少量含む。	良好	10Y4/1 灰	10Y4/1 灰	底部回転ヘラ削り→高台貼付→周縁ナデ。		第12図
87	焚口部 A90	－	坏B身	－	－	(3.8)	小破片	堅緻。白色微粒子含む。	良好	5Y5/1 灰	5Y5/1 灰	高台貼付→周縁ナデ。		第12図
88	A35・40	－	坏B身	(16.2)	(12.0)	5.2	1/3	堅緻。黒色斑含む。	良好	10Y5/1 灰	2.5Y6/2 灰黄	高台貼付→周縁ナデ。	口縁部歪む。 内壁に気泡顕著。	第12図
89	焚口部、 A23・43・50	木炭層 木炭下層	坏B身	(17.0)	11.5	4.2	3/4	堅緻。白色粒子・細礫含む。	良好	10Y4/1～3/1 灰～オリーブ黒	10Y4/1～3/1 灰～オリーブ黒	底部全面回転ヘラ削り→高台貼付→周縁ナデ。	器形全体が歪む。	第12図 図版10
90	燃焼部、 灰原、 A122	－	坏B身	－	(12.0)	〔1.0〕	底部 1/6	堅緻。白色小粒子含む。	良好	10Y6/1～5/1 灰	10Y6/1～5/1 灰	底部全面回転ヘラ削り→高台貼付→周縁ナデ。		第12図
91	A109・110・ 115	木炭下層	坏B身	16.8～ 18.7	13.8～ 14.0	4.0～ 4.8	略完形	堅緻。白色粒子・細砂粒含み、ざらつく。	良好	7.5Y6/1 灰	7.5Y6/1 灰	底部全面回転ヘラ削り→高台貼付。	器形全体に歪む。 内面降灰。	第12図 図版10
92	焚口部	－	坏B身	－	(15.2)	〔1.5〕	底部 1/4	堅緻。白色・黒褐色粒子含む。	良好	10Y4/1 灰	10Y4/1 灰	底部全面回転ヘラ削り→高台貼付→周縁ナデ。		第12図 図版10
93	D60	－	坏B身	－	(16.1)	〔1.6〕	底部 1/6	堅緻。白色微粒子やや多く含む。	良好	10Y5/1～4/1 灰	10Y5/1～4/1 灰	底部全面回転ヘラ削り→高台貼付→周縁ナデ。		第12図
94	B126	－	高坏	(12.4)	－	〔3.5〕	坏部 2/3	粗砂粒多く含む。	酸化焔焼成	2.5Y6/1 黄灰	2.5Y6/1 黄灰	坏部回転ナデ。		第12図 図版10
95	B128、 灰原右T	－	高坏	(12.6)	－	〔2.8〕	坏部 1/8	堅緻。細砂粒少量含む。	良好	5Y5/1 灰	5Y5/1 灰	坏部回転ナデ。		第12図 図版10
96	焚口部、 A87	－	高坏	(13.4)	－	〔3.4〕	坏部 1/2弱	堅緻。細砂粒微量含む。	良好	5Y6/1 灰	5Y6/1 灰	坏部回転ナデ。		第12図 図版10
97	C88	－	高坏	(13.8)	－	〔3.8〕	坏部 1/6	細砂粒少量含む。	酸化焔焼成ぎみ	7.5YR5/6 明褐	7.5YR5/6 明褐			第12図
98	C42・53	－	高坏	(14.6)	－	〔5.5〕	坏部 1/3	細砂粒少量含む。	良好	2.5Y5/1 黄灰	2.5Y5/1 黄灰	坏部回転ナデ。		第12図 図版10
99	B149	－	高坏	－	－	〔6.7〕	脚部 1/4	堅緻。細砂粒微量含む。	良好	7.5Y5/1 灰	7.5Y5/1 灰	脚部回転ナデ。	脚部に透かし窓、上半に２条の沈線。長脚高坏。	第12図 図版10
100	B116	－	高坏	－	(9.8)	6.0	脚部 4/5	堅緻。細砂粒少量含む。	良好	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白	脚部回転ナデ。	脚部中央に１条の沈線。	第12図
101	B118	－	高坏	－	(9.6)	〔5.9〕	脚部 4/5	堅緻。細砂粒・細礫少量含む。	良好	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	脚部回転ナデ。	脚部上半に１条の沈線。	第12図
102	B60	－	高坏	－	(7.2)	〔4.5〕	脚部 1/2	堅緻。細砂粒・細礫少量含む。	良好	5Y6/1 灰	5Y6/1 灰	脚部回転ナデ。		第12図 図版10
103	117、灰原	－	高坏	－	(7.2)	〔5.2〕	脚部 3/4	堅緻。細砂粒少量含む。	良好	5Y6/2 灰オリーブ	5Y6/2 灰オリーブ	脚部回転ナデ。	脚部上半剥がれ。	第12図 図版10
104	B61	－	高坏	－	(10.4)	〔6.4〕	脚部 2/3	細砂粒少量含む。	酸化焔焼成ぎみ	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	脚部回転ナデ。	脚部上半剥がれ。	第12図 図版10
105	B53、 灰原右T	－	高坏	－	(11.8)	〔3.3〕	脚部 1/4	細砂粒微量含む。	良好	7.5Y4/1 灰	7.5Y4/1 灰	脚部回転ナデ。		第12図 図版10
106	灰原	－	高盤	－	8.4	〔4.3〕	脚部 2/3	堅緻。細砂粒少量含む。	良好	5Y6/2 灰オリーブ	5Y6/2 灰オリーブ	脚部回転ナデ。		第12図 図版10
107	B102	－	高盤	－	(10.2)	〔3.5〕	脚部 1/3弱	堅緻。細砂粒微量含む。	良好	10YR4/1 褐灰	10YR4/1 褐灰	脚部回転ナデ。	外面に降灰。	第12図 図版10
108	C39	－	高盤	－	(12.8)	〔5.1〕	脚部 1/3	堅緻。細砂粒少量含む。	良好	7.5Y6/1 灰	7.5Y6/1 灰	脚部回転ナデ。	内外面に降灰。	第12図 図版10
109	B51	－	高盤	－	(13.4)	〔5.7〕	脚部 1/4	堅緻。細砂粒少量含む。	良好	7.5Y5/1 灰	7.5Y5/1 灰	脚部回転ナデ。	外面自然釉付着。	第12図 図版10
110	B50	－	高盤		(14.6)	〔5.3〕	脚部 小破片	細砂粒微量含む。	良好	5Y6/1 灰	5Y6/1 灰	脚部回転ナデ。		第12図 図版10
111	C2	－	坏AorB	－	－	〔8.2〕	小破片	堅緻。細砂粒微量含む。	良好	7.5Y7/1 灰白	7.5Y7/1 灰白	外面回転ナデ。	外面上・中・下半に沈線。	第13図
112	灰原	－	鉢	(8.8)	－	〔3.0〕	1/6	堅緻。白色・黒色粒子含む。	良好	7.5Y6/1 灰	7.5Y6/1 灰	口縁部回転ナデ、底部回転ヘラ削り。		第13図
113	B7	－	鉢	(8.8)	－	〔5.0〕	1/4弱	堅緻。細砂粒微量含む。	良好	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白	外面回転ナデ。		第13図 図版11
114	灰原左T	－	鉢	(17.0)	(12.6)	7.4	1/2弱	細砂粒多く含む。	良好	5Y5/1 灰	5Y5/1 灰	口縁～体部回転ナデ。下半のみ手持ちヘラ削り。底部ヘラ切りか。	この機種は１例のみ。	第13図 図版11
115	焚口部、 焚口付近	木炭層	長頸壺	(11.6)	－	〔4.7〕	口頸部 1/4	堅緻。細砂粒微量含む。	良好	2.5Y3/1 黒褐	2.5Y3/1 黒褐	外面回転ナデ。	内外面に降灰。	第13図 図版11
116	C38	－	長頸壺	10.8	－	〔9.4〕	口頸部 現存	堅緻。細砂粒微量含む。	良好	7.5Y7/1 灰白	7.5Y7/1 灰白	外面回転ナデ。	頸部の中・下半に１条の沈線あり。内外面の降灰。	第13図 図版11
117	A11	－	長頸壺	(12.8)	－	〔3.0〕	口頸部 1/4弱	堅緻。微砂粒微量含む。	良好	5Y6/1 灰	5Y6/1 灰	外面回転ナデ。	内面に一部自然釉付着。	第13図 図版11
118	B134	－	長頸壺	(8.8)	－	〔3.5〕	口頸部 1/2	堅緻。細砂粒微量含む。	良好	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	外面回転ナデ。		第13図 図版11
119	灰原	－	長頸壺	－	－	〔6.0〕	頸部 1/6	堅緻。細砂粒微量含む。	良好	5Y6/1 灰	5Y6/1 灰	外面回転ナデ。	頸部上半に1条の沈線。	第13図
120	C98	－	長頸壺	－	－	〔8.5〕	胴部片	堅緻。細砂粒微量含む。	良好	5Y6/1 灰	5Y6/1 灰	外面回転ナデ。	肩部に1条の沈線。	第13図
121	灰原	－	長頸壺	－	8.6	〔2.4〕	高台部 現存	堅緻。細砂粒・細礫含む。	良好	2.5Y5/2 暗灰黄	2.5Y5/2 暗灰黄	高台貼付→周辺ナデ。	一部に粘土付着。	第13図
122	B地点	－	長頸壺	10.5	9.8	22.5	略完形	堅緻。白色粒子・細礫含む。	良好	5Y6/2～3/2 灰オリーブ～ オリーブ黒	5Y6/2～3/2 灰オリーブ～ オリーブ黒	口縁～胴部→回転ナデ→胴中半以下回転ヘラ削り。高台貼付→周辺ナデ。	外面・口縁部内面に降灰。底部見込み部に釉が溜まる。	第13図 図版11
123	C78	－	長頸壺	(10.2)	－	〔3.0〕	口頸部 1/3	堅緻。細砂粒少量含む。	良好	5Y5/2 灰オリーブ	5Y5/2 灰オリーブ	外面回転ナデ。	内外面に降灰。外面の黄褐色土付着。	第13図 図版11
124	E17	－	水瓶or浄瓶	－	8.8	〔2.0〕	高台部 現存	堅緻。細砂粒微量含む。	良好	7.5Y7/2 灰白	7.5Y7/2 灰白	高台貼付→周辺ナデ。	内面に粘土付着。	第13図 図版11

番号	出土位置	層位	器種	法量（cm）			現存率	胎土	焼成	色調		成形・調整等	備考	挿図番号 図版番号
				口径	底径	器高				外面	内面			
125	灰原	－	水瓶or浄瓶	－	9.2	〔1.6〕	高台部1/3	堅緻。細砂粒微量含む。	良好	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	高台貼付→周辺ナデ。	一部に粘土付着。	第13図
126	窯跡付近	表採	埦A	－	5.5	〔4.0〕	1/3 底部存	堅緻。白色微粒子・黒色斑含む。	良好	10Y5/1 灰	10Y5/1 灰	底部回転糸切り。	内面に同一器種癒着。	第13図 図版11
127	窯跡付近	表採	灰釉陶器埦	－	(7.8)	〔2.4〕	高台部2/3	堅緻。白色粒子含む。	良好	2.5Y6/2 灰黄	2.5Y6/2 灰黄	底部全面回転ヘラ削り→高台貼付→周縁ナデ。	現存部無釉。 K-90号窯式並行。	第13図 図版11
128	灰原	－	円面硯	外堤径 (13.5)	－	〔1.7〕	硯面～外提片	堅緻。細砂粒含む。	良好	5Y5/2 灰オリーブ	5Y5/2 灰オリーブ	外面回転ナデ。	圏足円面硯。 硯面径（10.8）	第13図 図版11
129	灰原右T、B4	－	円面硯	外堤径 (18.0)	－	〔1.4〕	硯面～外提片	堅緻。白色粒子・細砂粒含む。	良好	7.5Y5/1 灰	7.5Y5/1 灰	外面回転ナデ。脚接合部剥離。	圏足円面硯。 硯面径（13.0）	第13図 図版11
130	焚口部左側	下層	円面硯	－	－	〔6.9〕	脚部片	堅緻。細砂粒含む。	良好	10Y6/1 灰	10Y6/1 灰	脚部に長方形透孔。	圏足円面硯。 外面に降灰。	第13図 図版11
131	B101	－	短頸壺	(9.8)	－	〔6.4〕	胴上半1/4	堅緻。細砂粒少量含む。	良好	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	外面回転ナデ。	内面に降灰。	第14図 図版12
132	A28	－	短頸壺	(12.0)	－	〔2.5〕	口縁部1/4	堅緻。細砂粒微量含む。	良好	7.5Y6/1 灰	7.5Y6/1 灰	外面回転ナデ。		第14図 図版12
133	灰原	－	短頸壺	(11.8)	－	〔4.7〕	口頸部1/8	堅緻。細砂粒微量含む。	良好	2.5Y6/1 黄灰	2.5Y6/1 黄灰	外面回転ナデ。		第14図 図版12
134	B108	－	短頸壺	(12.4)	－	〔4.9〕	口頸部1/4	堅緻。細砂粒微量含む。	良好	10YR5/2 灰黄褐	10YR5/2 灰黄褐	外面回転ナデ。		第14図 図版12
135	A121･125	－	短頸壺	(12.8)	－	〔15.2〕	1/3弱	細砂粒多く含む。	酸化焔焼成	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	外面回転ナデ。		第14図 図版12
136	A126	－	短頸壺	(16.4)	－	〔6.7〕	口頸～肩部片	堅緻。細砂粒微量含む。	良好	2.5Y6/1 黄灰	2.5Y6/1 黄灰	外面回転ナデ。		第14図 図版12
137	B130	－	広口壺	(20.8)	－	〔4.4〕	口頸部1/8	堅緻。細砂粒微量含む。	良好	10YR5/3 にぶい横褐	10YR5/3 にぶい横褐	外面回転ナデ。		第14図 図版12
138	A56	－	壺	－	(11.0)	〔8.0〕	胴下半1/6	堅緻。白色粒子含む。	良好	5Y6/2 灰オリーブ	5Y4/2 灰オリーブ	外面回転ヘラ削り→回転ナデ。 底部ヘラナデ。		第14図
139	A57	－	壺	－	(8.5)	〔6.2〕	胴下半小片	堅緻。白色粒子少量含む。	良好	5Y7/1 灰	5Y7/1 灰	外面回転ナデ→下端ヘラ削り。 底部ヘラナデ。		第14図
140	D59	－	壺	－	(12.9)	〔6.4〕	胴下半小片	堅緻。白色粒子やや多く含む。	良好	5Y6/1 灰	5Y6/1 灰	外面回転ナデ。底部ヘラナデ。		第14図
141	C91	－	短頸壺	－	－	〔6.9〕	口縁部小片	堅緻。細砂粒少量含む。	良好	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	外面回転ナデ。	内面に降灰。	第14図 図版12
142	B54	－	短頸壺	－	－	〔5.5〕	口縁部小片	堅緻。細砂粒少量含む。	良好	5Y6/1 灰	5Y6/1 灰	外面回転ナデ。		第14図 図版12
143	A80	－	鉢	(30.8)	(16.0)	(13.3)	1/8	細砂粒少量含む。	酸化焔焼成	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	外面回転ナデ。		第14図 図版12
144	D153		横瓶	－	－	〔21.0〕	肩部片	最砂粒多く含む。	良好	2.5Y5/1 黄灰	2.5Y5/1 黄灰	外面平行叩き。 内面青海波叩き。	胴部最大径32.0cm。	第15図 図版12
145	B145	－	甕	(23.6)	－	〔6.7〕	口縁部1/6	堅緻。白色粒子・細砂粒含む。	良好	10YR/3/2 黒褐	10YR/3/2 黒褐色	口縁部内外面回転ナデ。胴部内面青海波叩き。		第15図 図版13
146	C93	－	甕	(19.6)	－	〔5.2〕	口頸部1/4	堅緻。白色粒子やや多く含む。	良好	7.5Y5/2～4/2 灰オリーブ	7.5Y5/2～4/2 灰オリーブ	口縁部内外面回転ナデ。胴部内面青海波叩き。		第15図 図版13
147	B107	－	甕	(24.0)	－	〔7.2〕	口頸部1/9	白色粒子・細砂粒含む。	酸化焔焼成ぎみ	10YR5/2～4/2 灰黄褐	10YR5/2～4/2 灰黄褐	口縁部内外面回転ナデ。胴部内面青海波叩き。	外面降灰。 内面に付着物。	第15図 図版13
148	B145	－	甕	(25.6)	－	〔5.4〕	口頸部1/10	堅緻。白色粒子含む。	良好	7.5Y6/1 灰	7.5Y6/1 灰	口縁部内外面回転ナデ。胴部内面青海波叩き。	外面降灰。 内面に付着物。	第15図 図版13
149	B22	－	甕	(26.0)	－	〔5.3〕	口頸部1/8	堅緻。白色粒子･細砂粒含む。	良好	10Y R 5/1 褐灰	10Y R 5/1 褐灰	口縁部内外面回転ナデ。	内外面降灰。	第15図 図版13
150	B131	－	甕	－	－	－	口縁部小片	堅緻。白色粒子含む。	良好	10Y4/ 1 灰	10Y5/1 灰	口縁部内外面回転ナデ。		第15図 図版13
151	D56	－	甕	－	－	－	口縁部小片	堅緻。白色粒子含む。	良好	7.5Y3/1 オリーブ黒	7.5Y3/1 オリーブ黒	口縁部内外面回転ナデ。		第15図 図版13
152	C77	－	甕	－	－	－	口縁部小片	堅緻。白色粒子含む。	良好	5Y5/1 灰	5Y5/1 灰	口縁部内外面回転ナデ。		第15図 図版13
153	A B6	－	甕	－	－	－	口縁部小片	堅緻。	良好	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白	口縁部内外面回転ナデ。	外面降灰。 内面に付着物。	第15図 図版13
154	A25	－	甕	－	－	－	口縁部小片	堅緻。白色・黒褐色粒子含む。	良好	2.5Y3/1 黒褐	2.5Y3/1 黒褐	口縁部内外面回転ナデ。	頸部接合部で剥離。 内面に付着物。	第15図 図版13
155	A30・B103	－	甕	－	－	－	口縁部小片	堅緻。白色微粒子含む。	良好	5B3/1 暗青灰	5B3/1 暗青灰	口縁部内外面回転ナデ。外面沈線区画内にヘラ状工具による斜行線文＋櫛描き波状文。		第15図 図版13
156	C71	－	甕	－	－	－	口縁部片	堅緻。細礫少量含む。	良好	5Y4/3 暗オリーブ	2.5Y5/3 黄褐	口縁部内外面回転ナデ。外面沈線区画内に櫛歯状工具による２段の廉状文。		第16図 図版13
157	B15	－	甕	－	－	－	頸部小片	堅緻。白色粒子やや多く含む。	良好	10Y2/1 黒	10Y2/1 黒	頸部外面回転ナデ→沈線区画内にヘラ状工具による２段の斜行線文。内面上半回転ナデ、下半ヘラナデ。	外面付着物。	第16図 図版13
158	前庭部中央	上層	甕	－	－	－	頸部小片	堅緻。白色粒子含む。	良好	10Y3/1 オリーブ黒	5Y4/2 灰オリーブ	頸部外面回転ナデ→沈線区画内に櫛歯状工具による２段の斜行列点文。内面上半回転ナデ、下半ヘラナデ。	外面付着物。	第16図 図版14
159	灰原右T	－	甕	－	－	－	頸部小片	堅緻。白色粒子含む。	良好	7.5Y5/1 灰	7.5Y5/1 灰	頸部外面回転ナデ→沈線区画内に櫛歯状工具による２段縦位列点文。内面上半回転ナデ、下半ヘラナデ。		第16図 図版14
160	C8	－	甕	－	－	－	頸部小片	堅緻。白色粒子･細礫含む。	良好	2.5Y5/1 黄灰	5Y5/1 灰	頸部外面回転ナデ→沈線区画内に櫛歯状工具による２段の縦位列点文。内面回転ナデ。	内面付着物。	第16図 図版14
161	灰原	－	甕	－	－	－	頸部小片	堅緻。細砂粒少量含む。	良好	2.5Y6/2 黄灰	2.5Y6/2 黄灰	頸部外面回転ナデ→沈線区画内に櫛歯状工具による２段斜行列点文。内面回転ナデ。	内外面降灰。	第16図 図版14
162	E1	－	甕	－	－	－	口縁部片	堅緻。白色・黒色粒子含む。	良好	7.5Y5/3～4/3 灰オリーブ～暗オリーブ	7.5Y5/3～4/3 灰オリーブ～暗オリーブ	口縁部内外面回転ナデ。内面下半ヘラナデ。外面沈線区画に７条２段の櫛描き波状文。	内外面降灰。	第16図 図版14
163	B33	－	甕	－	－	－	口縁部小片	堅緻。細砂粒含む。	良好	2.5Y3/1～2/1 黒褐～黒	2.5Y3/1～2/1 黒褐～黒	口縁部内外面回転ナデ。外面７条２段の櫛描き波状文。		第16図 図版14
164	D126	－	甕	－	－	－	頸部小片	堅緻。細礫少量含む。	良好	7.5Y5/1 灰	7.5Y5/1 灰	頸部内外面回転ナデ。内面下半ヘラナデ。外面6条１段の櫛描き波状文。		第16図 図版14

番号	出土位置	層位	器種	法量（cm）			現存率	胎土	焼成	色調		成形・調整等	備考	挿図番号 図版番号
				口径	底径	器高				外面	内面			
165	D125	－	甕	－	－	－	頸～肩部小片	堅緻。白色微粒子含む。	良好	7.5Y4/1 灰	7.5Y4/1 灰	頸部外面回転ナデ。内面ヘラナデ。外面６条１段の櫛描き波状文。肩部内面青海波叩き。		第16図 図版14
166	灰原、 灰原右T	－	甕	－	－	－	胴部 上半片	堅緻。白色小粒子･小礫含む。	良好	10Y5/1 灰	10Y5/1 灰	外面－横位のカキ目。 内面－青海波文叩き。		第16図 図版14
167	焚口部付近、D127	－	甕	－	－	－	胴部 上半片	堅緻。白色微～小粒子･黒色粒子含む。	良好	7.5Y5/1～4/1 灰	7.5Y5/1～4/1 灰	外面－横位の平行文叩き。内面－青海波文叩き。		第16図 図版14
168	灰原	－	甕	－	－	－	胴部 上半片	堅緻。白色微～小粒子･黒色粒子やや多く、小礫少量含む。	良好	10Y3/1 オリーブ黒	7.5Y5/1 灰	外面－横位の平行文叩き。 内面－青海波文叩き。	外面降灰。	第17図 図版14
169	灰原	－	甕	－	－	－	胴部 上半片	堅緻。白色・黒色粒子含む。	良好	10Y4/1～3/1 灰～オリーブ黒	10Y4/1～3/1 灰～オリーブ黒	外面－斜位の平行文叩き。内面－青海波文叩き。		第17図 図版15
170	灰原	－	甕	－	－	－	胴部 上半片	堅緻。白色微粒子やや多、小礫少量含む。	良好	7.5Y5/1 灰	7.5Y5/1 灰	外面－斜位の平行文叩き。内面－同心円文＋青海波文叩き。		第17図 図版15
171	灰原左T	－	甕	－	－	－	胴部 上半片	堅緻。白色小粒子・小礫含む。	良好	10Y4/1 灰	10Y4/1 灰	外面－斜位の平行文叩き→等間隔に横位のカキ目。 内面－同心円文叩き。		第17図 図版15
172	焚口部付近	－	甕	－	－	－	胴部 上半片	堅緻。白色微～小粒子、黒色粒子・小礫含む。	良好	10Y4/1 灰	10Y4/1 灰	外面－斜位の平行文叩き→等間隔に横位のカキ目。 内面－同心円文叩き。		第17図 図版15
173	灰原	－	甕	－	－	－	胴部 上半片	堅緻。白色粒子やや多、黒雲母・小礫少量含む。	良好	7.5YR4/2 灰褐	7.5YR4/2 灰褐	外面－斜位の平行文叩き。 内面－同心円文＋青海波文叩き。		第17図 図版15
174	B27	－	甕	－	－	－	胴部 上半片	堅緻。細礫少量む。	良好	2.5Y5/1 黄灰	2.5Y5/1 黄灰	外面－斜位の平行文叩き。 内面－綾杉文叩き。		第17図 図版15
175	E18	－	甕	－	－	－	胴部 下半片	堅緻。白色粒子・細礫含む。	良好	7.5Y5/1 灰	5Y6/1～5/1 灰	外面－斜位の平行文叩き→等間隔に横位のカキ目。内面－同心円文・青海波文・綾杉文叩き。		第17図 図版15
176	灰原	－	甕	－	－	－	胴部 下半片	堅緻。白色粒子・細礫含む。	良好	N5/（B） 灰	N5/（B） 灰	外面－ヘラナデ＋縦位の弱い平行文叩き→等間隔に横位のカキ目。 内面－同心円文＋青海波文叩き。		第17図 図版15
177	灰原右T	－	甕	－	－	－	胴部 上半片	堅緻。白色微～小粒子やや多く、小礫少量む。	良好	5Y4/1 灰	5Y4/1 灰	外面－縦位の平行文叩き。内面－無文当て具痕（弱い青海波文が残る）。		第18図 図版16
178	灰原	－	甕	－	－	－	頸部 下半片	堅緻。白色粒子・黒色粒子含む。	良好	2.5GY4/1 暗オリーブ	2.5GY4/1 暗オリーブ	外面－斜位の平行文叩き。内面－同心円文叩き。		第18図 図版16
179	灰原	－	甕	－	－	－	胴部 上半片	堅緻。白色微～小粒子、黒色粒子含む。	良好	7.5Y6/1 灰	2.5Y4/1 黄灰	外面－縦位の平行文叩き。→横位のカキ目。内面－同心円文＋青海波文叩き。	外面降灰。	第18図 図版16
180	D146	－	甕	－	－	－	胴部 上半片	堅緻。白色微～小粒子、黒色粒子、黒雲母含む。	良好	5Y5/3 灰オリーブ	2.5Y6/1 黄灰	外面－横位・縦位の平行文叩き→等間隔の横位のカキ目。内面－同心円文＋青海波文叩き。	外面降灰。	第18図 図版16
181	灰原	－	甕	－	－	－	胴部 上半片	堅緻。白色小粒子、黒色粒子含む。	良好	2.5Y6/1 黄灰	2.5Y6/2 灰黄	外面－斜位の平行文叩き→横位のカキ目。内面－同心円文＋青海波文叩き。	外面降灰。	第18図 図版16
182	灰原	－	甕	－	－	－	胴部 上半片	堅緻。白色小粒子、黒色粒子、細礫含む。	良好	5Y6/1 灰	2.5Y4/2 黄灰	外面－斜位の平行文叩き→横位のカキ目。内面－横位のナデ＋弱い青海波文叩き。		第18図 図版16
183	B122	－	甕	－	－	－	頸部 上半片	堅緻。白色粒子含む。	良好	5Y5/1 灰	5Y5/1 灰	外面－斜位の平行文叩き→横位のカキ目。内面－同心円文叩き。		第18図 図版16
184	B123	－	甕	－	－	－	胴部 上半片	堅緻。白色微～小粒子、小礫含む。	良好	7.5GY3/1 暗緑灰	10Y4/1 灰	外面－横位→縦位の平行文叩き。 内面－同心円文＋青海波文叩き→ヘラナデ。		第18図 図版16
185	灰原	－	甕	－	－	－	頸部 上半片	堅緻。白色微～小粒子、黒色粒子含む。	良好	7.5GY4/1 暗緑灰	10Y5/1 灰	外面－横位の平行文叩き→斜位の平行文叩き。 内面－青海波文叩き→ヘラナデ。		第19図 図版17
186	灰原右T	－	甕	－	－	－	頸部 上半片	堅緻。白色微粒子、小礫含む。	良好	10Y5/1 灰	10Y5/1 灰	外面－横位→斜位の平行文叩き。 内面－青海波文叩き→ヘラナデ。		第19図 図版17
187	D130	－	甕	－	－	－	頸部 下半片	堅緻。白色・黒色小粒子、小礫む。	良好	10Y5/1～4/1 灰	10Y5/1～4/1 灰	外面－横位→縦位平行文叩き。 内面－同心円文叩き。		第19図 図版17
188	C97	－	甕	－	－	－	胴部 上半片	堅緻。白色微粒子含む。	良好	7.5Y6/1～4/1 灰	7.5Y6/1～4/1 灰	外面－縦位・斜位→横位の平行文叩き。 内面－同心円文＋青海波文叩き。		第19図 図版17
189	灰原	－	甕	－	－	－	胴部 上半片	堅緻。	良好	5Y4/2 灰オリーブ	5Y4/2 灰オリーブ	外面－横位→斜位の平行文叩き。 内面－同心円文＋青海波文叩き。		第19図 図版17
190	焚口部	木炭層	甕	－	－	－	胴部 上半片	堅緻。白色微粒子やや多、小礫少量含む。	良好	10Y4/1 灰	2.5Y6/1 黄灰	外面－横・斜位→縦・斜位平行文叩き。 内面－同心円文＋青海波文叩き。		第19図 図版17
191	D58	－	甕	－	－	－	胴部 上半片	堅緻。白色小粒子含む。	良好	10Y5/1 灰	10Y2/1 黒	外面－斜位→横位の平行文叩き。 内面－同心円文＋青海波文叩き。		第19図 図版17
192	D129	－	甕	－	－	－	胴部 下半片	堅緻。白色小粒子、細礫含む。	良好	5Y5/3 灰オリーブ	5Y5/3 灰オリーブ	外面－横位→斜位の平行文叩き。 内面－斜位の平行文叩き。	外面付着物。 外面降灰。	第20図 図版18
193	焚口部 付近	－	甕	－	－	－	肩部片	堅緻。	良好	10YR4/2～5/3 灰黄褐～ にぶい黄褐	10YR4/2～5/3 灰黄褐～ にぶい黄褐	外面－当て具痕→横位のカキ目。 内面－横位→斜位の平行文叩き。	外面降灰。	第20図 図版18
194	灰原表採	－	甕	－	－	－	胴部 上半片	堅緻。白色微粒子・小粒子含む。	良好	7.5Y5/1～4/1 灰オリーブ	5Y5/2 灰オリーブ	外面－横位→斜位の平行文叩き。 内面－青海波文叩き→ヘラナデ。	内面付着物。 外面降灰。	第20図 図版18
195	焚口部 付近	－	甕	－	－	－	胴部 上半片	堅緻。白色小粒子含む。	良好	7.5Y4/1 灰	7.5Y5/1 灰	外面－横位→斜位の平行文叩き。 内面－青海波文叩き→横位のカキ目風の調整。	内面降灰。	第20図 図版18
196	A20	－	甕	－	（16.0）	〔2.0〕	底部 2/3	堅緻。細砂粒少量含む。	良好	7.5Y6/1 灰	7.5Y6/1 灰	胴下半内外面回転ナデ。底部外面中央ナデ→外周回転ヘラ削り。		第20図 図版18
197	B62	－	土師器 甕	（16.0）	－	〔5.3〕	口縁～ 胴上半 1/4	赤色粒子少量・細砂粒多く含む。	良好	7.5YR8/2～8/3 灰白～浅黄橙	7.5YR8/2～8/3 灰白～浅黄橙	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラナデ、内面ヘラナデ→指頭調整		第20図 図版18

第３表　信包中原田古窯跡出土遺物（瓦類）観察表

［ ］は現存値、（ ）は推定値

番号	出土位置	層位	器種	法量（cm）			現存率	胎土	焼成	色調		成形・調整・備考等（cm）	挿図番号 図版番号
				長さ	幅	厚さ				凸面（外）	凹面（裏）		
1	A177	－	鴟尾	〔10.2〕	〔6.8〕	3.0～3.5	胴部片	堅緻。細砂粒含む。	良好	10Y5/1 灰	10Y5/1 灰	胴上部の部位と考えられる破片。内外面ナデ。	第21図 図版18
2	A176	－	鴟尾	〔9.0〕	〔7.5〕	2.5	縦帯片	堅緻。白色粒子含む。	良好	7.5Y5/1 灰	7.5Y5/1 灰	連珠文（直径8.6）をもつ縦帯の破片。連珠文はいわゆる二重のコンパス施文。内面ナデ。	第21図 図版18
3	D154	－	鴟尾	〔10.5〕	〔10.7〕	2.9～3.0	縦帯片	赤褐色粒子・細砂粒含む。	酸化焔 焼成ぎみ	2.5Y8/3 淡黄	2.5Y8/3 淡黄	連珠文を簾状の沈線で表した縦帯部分の破片。裏面指ナデ。内外面一部黒片。	第21図 図版18
4	D76	－	鴟尾	〔9.7〕	〔15.5〕	3.7～4.3	縦帯片	赤褐色粒子・細砂粒含む。	酸化焔 焼成ぎみ	2.5Y8/3 淡黄	2.5Y8/3 淡黄	2・3とは異なる連珠文をもつ縦帯の破片。内面一部黒変。	第21図 図版18
5	193	－	鴟尾	〔21.7〕	〔11.0〕	3.5～3.7	縦帯片	赤色粒子・細砂粒含む。	酸化焔 焼成ぎみ	7.5YR7/4 にぶい橙	10YR6/3 にぶい黄橙	4と類似する連珠文をもつ縦帯の破片。内外面ナデ。	第21図 図版19
6	D28	－	軒丸瓦	－	－	〔1.7〕	内区片	堅緻。黒色小粒子少量含む。	良好	10Y5/1 灰	10Y5/1 灰	菱形に図案化された八葉蓮華文。T字楔形の間弁をもつ。裏面剥離。寿楽寺Ⅵ型式。	第21図 図版19
7	D134	－	軒丸瓦	－	－	1.7～2.3	外内区片	堅緻。白色小粒子多く含む。	良好	10Y4/1 灰	10Y4/1 灰	菱形に図案化された八葉蓮華文。子葉間にはT字楔形の間弁をもつ。瓦当裏面無文。寿楽寺Ⅰ型式に近似。	第21図 図版19
8	B99	－	軒丸瓦	－	－	1.4～2.9	瓦当片	白色・黒色粒子含む。	酸化焔 焼成ぎみ	5Y3/1 オリーブ黒	10YR3/3 暗褐	瓦当径（14.0）、内区径（9.8）、中房径2.3。中房に1＋4の蓮子。中房は八角形状を呈する。花弁は素弁八葉蓮華文と推測され、花弁端は三角形状、弁間の界線も直線的でT字楔形の間弁をもつ。裏面布目。寿楽寺Ⅰ型式。	第21図 図版19
9	A133・ 141	－	軒丸瓦	－	－	1.3～1.7	外内区片	堅緻。白色微粒子・小粒子多く含む。	良好	10YR3/3 暗褐	10YR3/3 暗褐	内区径（9.4）、中房径2.2～2.3。中房に1＋4の蓮子。中房は略円形。花弁は8と近似。T字楔形の間弁をもつ。裏面布目。寿楽寺Ⅰ型式。	第21図 図版19
10	C53	－	軒丸瓦	－	－	1.5～4.5	外区片	堅緻。白色小粒子やや多く含む。	良好	2.5GY4/1 暗オリーブ灰	2.5GY4/1 暗オリーブ灰	瓦当径（14.0）。周縁・弁間は8・9に類似。T字楔形の間弁をもつ。裏面布目。寿楽寺Ⅰ型式。	第21図 図版19
11	焚口部	木炭層	熨斗瓦	〔10.3〕	11.1	2.1	端面・両側面残存	堅緻。白色粒子含む。	良好	10Y3/1 オリーブ黒	10Y4/1 灰	凹面－糸切り・布目。 凸面－端縁平行→不定方向ナデ。 ※成形技法不明。両端幅に若干の差がある。	第21図 図版19
12	A163	－	熨斗瓦	〔12.5〕	11.4	1.4～1.9	端面・両側面残存	堅緻。細砂粒・小礫含む。	良好	2.5Y6/1~6/2 黄灰~灰黄	2.5Y6/1~6/2 黄灰~灰黄	凹面－糸切り・布目。 凸面－斜位の平行文叩き→側縁・端縁方向のナデ。 ※粘土板桶巻作り。両端縁に若干の差がある。	第21図 図版19
13	A155	－	熨斗瓦	〔11.3〕	〔9.8〕	2.2～2.4	端面・側面残存	細砂粒・小礫含む。	酸化焔 焼成ぎみ	5Y8/1~6/1 灰白~灰	5Y8/1~6/1 灰白~灰	凹面－糸切り・枠板圧痕・布目。 凸面－糸切り・側縁平行のナデ。	第21図 図版19
14	A148	－	熨斗瓦	〔15.1〕	11.0	1.9～2.2	両側面残存	堅緻。白色粒子含む。	良好	10Y4/1 灰	10Y4/1 灰	凹面－糸切り・枠板圧痕・布目。 凸面－端縁方向のナデ。縄を巻き付けた痕跡が端縁方向に残る。※粘土板桶巻作り。両端幅に若干の差がある。	第22図 図版20
15	A169	－	熨斗瓦	〔8.0〕	12.0	1.2～1.7	両側面残存	堅緻。白色粒子含む。	良好	2.5Y7/1~5/1灰 白~黄灰	2.5Y7/1~5/1灰 白~黄灰	凹面－糸切り・枠板圧痕・布目。 凸面－糸切り・端縁方向のナデ。 ※粘土板桶巻作り。両端幅に若干の差がある。	第22図 図版20
16	A60	－	熨斗瓦	〔10.1〕	11.9	1.5～1.7	端面・両側面残存	堅緻。白色粒子・細礫やや多く含む。	良好	10Y3/1 オリーブ黒	10Y3/1 オリーブ黒	凹面－糸切り・枠板圧痕・布目→ナデ。 凸面－端縁方向のナデ。 ※粘土板桶巻作り。両端幅に若干の差がある。	第22図 図版20
17	焼成部	－	熨斗瓦	〔13.4〕	7.5	2.3～2.5	端面・両側面残存	堅緻。細砂粒含む。	良好	10Y4/1 灰	10Y4/1 灰	凹面－糸切り・布目。 凸面－不定方向のナデ。※側面分割裁断→未調整。	第22図 図版20
18	187	－	丸瓦	〔12.8〕	（12.4）	1.3～1.7	狭端面・側面残存	堅緻。白色粒子少量含む。	良好	5Y6/1 灰	5Y6/1 灰	凹面－糸切り・布目→指押さえ。 凸面－側縁方向のヘラナデ。 ※狭端縁寄りの中央部に穿孔。	第22図 図版20
19	灰原	－	丸瓦	〔9.6〕	狭端幅 （10.5）	1.4～2.5	狭端面・側面残存	白色微粒子少量含む。	酸化焔 焼成ぎみ	10YR5/4~4/4 にぶい黄褐~褐	5Y4/1 灰	凹面－糸切り・布目。 凸面－側縁方向のヘラ調整。 ※狭端縁寄りの中央部に穿孔。	第22図 図版20
20	D87	－	丸瓦	〔１2.5〕	〔１0.4〕	1.7～2.3	狭端面・側面残存	堅緻。白色粒子やや多く含む。	良好	2.5Y5/2 暗灰黄	2.5Y5/2 暗灰黄	凹面－糸切り・布目。 凸面－側縁方向のヘラナデ。 ※狭端縁寄りの中央部に穿孔。	第22図 図版20
21	B160 左T	－ －	丸瓦	〔15.8〕	（10.3）	1.5～1.7	狭端面・側面残存	堅緻。小礫少量含む。	良好	7.5Y5/1~4/1 灰	7.5Y5/1~4/1 灰	凹面－糸切り・布目。 凸面－側縁方向のヘラナデ。	第22図 図版20
22	B156	－	丸瓦	〔17.3〕	狭端幅 15.8	1.8～2.4	狭端面両側面残存	堅緻。白色・暗褐色粒子やや多く含む。	良好	5Y5/2 灰オリーブ	5Y5/2 灰オリーブ	凹面－糸切り・竹状模骨痕跡・布目。 凸面－側縁方向のヘラナデ。全体に歪む。	第23図 図版21
23	灰原 C17	－ －	丸瓦	〔19.0〕	狭端幅 （12.5）	1.2～1.5	狭端面両側面残存	細砂粒含む。	酸化焔 焼成ぎみ	10YR4/2~3/2 灰黄褐~黒褐	7.5YR5/2 にぶい褐	凹面－布目・竹状模骨痕跡・布の継ぎ合わせ目・紐作りの痕跡。 凸面－側縁方向の平行文叩き→不定方向のナデ。 ※粘土紐作り。	第23図 図版21
24	B197	－	丸瓦	〔6.4〕	狭端幅 13.2	1.6～1.9	狭端面両側面残存	堅緻。黄白色粒子・小礫含む。	良好	5Y6/1 灰	5Y6/1 灰	凹面－糸切り・布目・布の綴じ合わせ目。 凸面－側縁方向のナデ。	第23図 図版21
25	D116	－	丸瓦	〔12.6〕	〔9.2〕	1.0～1.2	狭端面・側面残存	細砂粒多く含む。	酸化焔 焼成ぎみ	2.5Y6/4~5/3 にぶい黄~黄褐	2.5Y6/4~5/3 にぶい黄~黄褐	凹面－糸切り・竹状模骨痕跡・布目・指頭圧痕。 凸面－側縁方向の平行文叩き→端縁方向のナデ。	第23図 図版21
26	D35	－	丸瓦	〔7.8〕	〔7.9〕	1.3～1.6	狭端面残存	堅緻。白色粒子やや多く含む。	良好	10Y4/1 灰	10Y3/1 オリーブ黒	凹面－糸切り・竹状模骨痕跡・布目。 凸面－指頭圧痕→ナデ。	第23図 図版21
27	焚口部右 （B200）	木炭 下層	丸瓦	〔14.1〕	〔11.2〕	1.2～1.5	側面残存	堅緻。白色粒子含む。	良好	10Y4/1~3/1 灰~オリーブ黒	10Y4/1~3/1 灰~オリーブ黒	凹面－糸切り・布目・布の綴じ合わせ目。 凸面－斜位の平行文叩き→端縁平行のナデ。	第23図 図版22
28	D61	－	丸瓦	〔15.0〕	20.2	1.9～2.2	両側面残存	堅緻。細砂粒・小礫含む。	良好	5Y5/2~4/2 灰オリーブ	5Y5/2~4/2 灰オリーブ	凹面－糸切り・布目。 凸面－端縁方向のナデ。	第24図 図版22
29	燃焼部 前庭部 灰原	－ 上層 －	丸瓦	〔19.0〕	17.5	1.6～1.9	両側面残存	堅緻。細礫含む。	良好	7.5Y5/1~3/1 灰~オリーブ黒	7.5Y5/1~3/1 灰~オリーブ黒	凹面－糸切り・竹状模骨痕跡・布目。 凸面－側縁方向のナデ。	第24図 図版22
30	D94	－	丸瓦	〔8.4〕	〔8.7〕	1.4～1.7	広端面・側面残存	堅緻。白色・黒色粒子、小礫含む。	良好	2.5Y5/2 暗灰黄	2.5Y5/2 暗灰黄	凹面－糸切り・竹状模骨痕跡・布目。 凸面－端縁方向のナデ。	第24図 図版22
31	灰原左T	－	丸瓦	〔12.5〕	〔6.0〕	1.8～2.2	広端面・側面残存	小礫含む。	酸化焔 焼成ぎみ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	凹面－糸切り・竹状模骨痕跡・布目。 凸面－端縁方向のナデ（平行文叩き残る）・布目痕。 ※粘土板合わせ目。	第24図 図版22
32	C105	－	丸瓦	〔11.0〕	〔18.8〕	2.7～3.2	両側面残存	堅緻。白色・黒色粒子、細砂粒含む。	良好	10Y4/1 灰	7.5Y5/2 灰オリーブ	凹面－糸切り・竹状模骨痕跡・布目・布の綴じ合わせ目。 凸面－端縁方向のナデ。 ※粘土板合わせ目。	第24図 図版23
33	D88	－	丸瓦	〔25.0〕	〔8.3〕	1.3～1.9	広端面・側面残存	堅緻。細～小礫含む。	良好	5Y5/1 灰	5Y5/1 灰	凹面－糸切り・竹状模骨痕跡・布目・布の綴じ合わせ目。 凸面－側縁方向の平行文叩き→端縁平行のナデ。	第25図 図版23
34	D119	－	丸瓦	〔20.7〕	〔9.0〕	1.5～1.7	広端面・側面残存	堅緻。白色粒子含む。	良好	5Y5/3 灰オリーブ	5Y5/3 灰オリーブ	凹面－糸切り・布目。 凸面－側縁方向の平行文叩き→端縁平行のナデ。 ※粘土板合わせ目。	第25図 図版23
35	灰原	－	丸瓦	〔10.9〕	〔11.1〕	1.8～2.1	広端面・側面残存	堅緻。細砂粒含む。	良好	2.5Y7/2~7/3灰 黄~浅黄	2.5Y7/2~7/3灰 黄~浅黄	凹面－糸切り・竹状模骨痕跡・布目。 凸面－端縁平行のナデ。	第25図 図版26

番号	出土位置	層位	器種	法量（cm）			現存率	胎土	焼成	色調		成形・調整・備考等（cm）	挿図番号 図版番号
				長さ	幅	厚さ				凸面（外）	凹面（裏）		
36	灰原	－	丸瓦	〔16.3〕	〔4.6〕	2.2～2.4	広端面・側面残存	細砂粒やや多く含む。	酸化焰焼成ぎみ	2.5Y7/4~6/4 浅黄~にぶい黄	2.5Y7/4~6/4 浅黄~にぶい黄	凹面－糸切り・布目・布の綴じ合わせ目。 凸面－斜位の平行文叩き→端縁平行のナデ。	第25図 図版23
37	C64	－	丸瓦	〔14.3〕	〔14.6〕	1.7～2.0	広端面・側面残存	堅緻。白色小粒子・小礫含む。	良好	5Y6/1~5/1 灰	5Y6/1~5/1 灰	凹面－糸切り･布の綴じ合わせ目･竹状模骨痕跡･布目。 凸面－側縁方向の平行文叩き。	第25図 図版24
38	灰原左T	－	丸瓦	〔28.5〕	（19.0）	1.3～1.7	広端面・側面残存	堅緻。細砂粒含む。	酸化焰焼成ぎみ	2.5Y6/3~5/3 にぶい黄~黄褐	2.5Y6/3~5/3 にぶい黄~黄褐	凹面－糸切り･竹状模骨痕跡･布目･布の綴じ合わせ目。 凸面－側縁方向の平行文叩き。	第26図 図版24
39	灰原	－	丸瓦	〔9.5〕	〔11.9〕	1.6～1.9	広端面・側面残存	細砂粒・褐色粒含む。	酸化焰焼成ぎみ	2.5Y6/3 にぶい黄	10YR7/4 にぶい黄橙	凹面－糸切り・竹状模骨痕跡・布目。 凸面－斜位（交互）の平行文叩き。	第26図 図版24
40	D69	－	丸瓦	〔14.5〕	〔8.9〕	1.6～2.0	側面残存	細砂粒・細礫含む。	酸化焰焼成ぎみ	2.5Y5/3 黄褐	2.5Y5/3 黄褐	凹面－糸切り・竹状模骨痕跡・布目。 凸面－刷毛目状工具による端縁平行ナデ。 ※粘土板合わせ目痕。	第26図 図版24
41	B196	－	丸瓦	〔23.5〕	狭端幅（12.5）	1.8～2.1	狭端面両側面残存	堅緻。白色・黒色粒子含む。	良好	5Y5/1~5/2 灰~灰オリーブ	5Y5/1~5/2 灰~灰オリーブ	凹面－糸切り・布目。 凸面－端縁方向の縄叩き。降灰。	第26図 図版25
42	灰原左T（B164）	－	丸瓦	〔11.4〕	〔7.7〕	1.7～1.9	狭端面・側面残存	堅緻。細砂粒やや多く含む。	良好	10YR3/1~3/2 黒褐	10YR3/1~3/2 黒褐	凹面－糸切り・竹状模骨痕跡・布目。 凸面－端縁方向の縄叩き。	第27図 図版25
43	灰原左T	－	丸瓦	〔17.5〕	〔8.7〕	1.9～2.3	側面残存	白色・赤色粒子、小礫含む。	酸化焰焼成	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	凹面－糸切り・枠板圧痕・布目・指頭痕。 凸面－端縁方向の縄叩き。※粘土板合わせ目。	第27図 図版25
44	灰原右T B165	－ －	丸瓦	〔11.4〕	〔8.8〕	1.7～1.9	側面残存	白色粒子・細砂粒含む。	酸化焰焼成ぎみ	7.5YR5/6 明褐	7.5YR5/6 明褐	凹面－糸切り・布目・枠板圧痕。 凸面－端縁方向の縄叩き。 ※粘土板合わせ目痕。	第27図 図版25
45	A130	－	丸瓦	〔14.2〕	〔11.6〕	1.4～1.7	小破片	堅緻。細砂粒含む。	良好	7.5Y3/2 オリーブ黒	7.5Y4/2 灰オリーブ	凹面－糸切り･布目不明瞭。枠板圧痕･側縁方向のナデ。 凸面－正・斜位の正格子文叩き。降灰。	第27図 図版25
46	焼成部 焚口左	－ 下層	平瓦	〔14.3〕	狭端幅29.4	2.0～2.2	狭端面両側面残存	堅緻。細砂粒・細礫含む。	良好	7.5Y5/1 灰	7.5Y5/1 灰	凹面－糸切り・枠板圧痕・布目・側縁方向のナデ。 凸面－側縁方向のナデ。縄を巻き付けた痕跡が端縁方向に残る。※粘土板桶巻作り。	第27図 図版26
47	焼成部	－	平瓦	〔11.5〕	〔10.8〕	2.7～3.1	狭端面・側面残存	堅緻。細礫・小礫少量含む。	良好	10YR4/2~3/2 灰黄褐~黒褐	10YR4/2~3/2 灰黄褐~黒褐	凹面－糸切り・枠板圧痕・布目。 凸面－不定方向のナデ。降灰。※粘土板桶巻作り。	第27図 図版26
48	A166	－	平瓦	〔16.5〕	〔12.8〕	1.5～1.8	狭端面・側面残存	堅緻。白色粒子・小礫含む。	良好	10Y4/1 灰	10Y4/1 灰	凹面－糸切り・枠板圧痕・布目。 凸面－不定方向のナデ。須恵器片付着。降灰。 ※粘土板桶巻作り。	第27図 図版26
49	灰原	－	平瓦	41.0	〔12.5〕	2.0～2.4	両端面・側面残存	堅緻。細砂粒・黒色粒やや多く含む。	良好	2.5Y4/2 暗灰黄	2.5Y4/2 暗灰黄	凹面－糸切り・布目→側縁方向のナデ。 凸面－側縁方向のナデ。縄を巻き付けた痕跡が端縁方向に等間隔に残る。※粘土板一枚作り。	第28図 図版27
50	燃焼部	－	平瓦	〔20.6〕	〔12.0〕	1.8～2.2	狭端面・側面残存	堅緻。細砂粒多く含む。	良好	5Y5/1 灰	5Y5/1 灰	凹面－糸切り・枠板圧痕・布目。 凸面－側縁方向のナデ→不定方向のナデ。 ※粘土板桶巻作り。	第28図 図版26
51	灰原	－	平瓦	〔15.0〕	〔7.8〕	2.3～2.7	狭端面・側面残存	堅緻。白色微粒子含む。	良好	5Y5/2 灰オリーブ	5Y5/1 灰	凹面－糸切り・布目。 凸面－側縁方向のナデ。 ※粘土板合わせ目。粘土板桶巻作り。	第28図 図版27
52	灰原	－	平瓦	〔13.0〕	〔15.5〕	1.2～1.7	狭端面・側面残存	堅緻。白色微粒子・小礫含む。	良好	10Y5/1灰	10Y5/1灰	凹面－糸切り・枠板圧痕・布目。 凸面－斜位の平行叩き→端縁方向のナデ。 ※粘土板桶巻作り。	第28図 図版27
53	灰原	－	平瓦	〔14.5〕	〔10.3〕	2.0～2.7	狭端面・側面残存	堅緻。白色・黒色粒子やや多く含む。	良好	5Y4/1~3/1 灰~オリーブ黒	5Y4/1~3/1 灰~オリーブ黒	凹面－糸切り・枠板圧痕・布目。端縁方向の凹線。 凸面－不定方向のナデ→布目痕。 ※粘土板合わせ目。粘土板桶巻作り。	第29図 図版27
54	灰原	－	平瓦	〔13.3〕	〔12.0〕	1.6～1.8	狭端面・側面残存	堅緻。白色粒子・小礫含む。	良好	10Y4/1 灰	10Y4/1 灰	凹面－糸切り・枠板圧痕・布目。 凸面－端縁方向のナデ。 ※粘土板桶巻作り。	第29図 図版28
55	灰原	－	平瓦	〔17.0〕	〔20.3〕	1.7～2.3	側面残存	堅緻。白色小粒子・小礫含む。	良好	10Y4/1 灰	10Y4/2 オリーブ灰	凹面－糸切り・枠板圧痕・布目。 凸面－端縁方向のナデ→不定方向のナデ。 ※粘土板桶巻作り。	第29図 図版28
56	E13	－	平瓦	〔15.6〕	〔12.9〕	2.0～2.5	側面残存	堅緻。白色・黒褐色粒子含む。	良好	5Y7/1~3/1 灰~オリーブ黒	5Y7/1~3/1 灰~オリーブ黒	凹面－糸切り・布目。 凸面－端縁・側縁方向のナデ。 ※粘土板一枚作り。	第29図 図版28
57	灰原	－	平瓦	〔11.1〕	〔11.9〕	1.7～2.0	側面残存	堅緻。白色粒子やや多、細礫含む。	良好	10Y4/1 灰	10Y4/1 灰	凹面－糸切り・布目・布の綴じ合わせ目。 凸面－端縁方向のナデ。一部に当て具痕残す。 ※粘土板一枚作り。	第29図 図版28
58	灰原	－	平瓦	〔12.0〕	〔10.6〕	2.1～2.3	側面残存	堅緻。白色・黒色粒子含む。	良好	10Y3/1 オリーブ黒	10Y4/1 灰	凹面－糸切り・布目。 凸面－不定方向のナデ。 ※粘土板一枚作り。	第29図 図版29
59	灰原右T	－	平瓦	〔12.2〕	〔15.6〕	2.2～3.4	側面残存	堅緻。白色微粒子・細礫含む。	良好	2.5Y3/1 黒褐	7.5YR6/2 灰褐	凹面－糸切り・布目・端縁平行の布の継ぎ合わせ。 凸面－端縁・側縁方向のナデ。 ※粘土合わせ目。粘土板一枚作り。	第29図 図版29
60	D81	－	平瓦	〔14.3〕	〔15.7〕	2.3～2.8	広端面・側面残存	堅緻。白色・黒色粒子含む。	良好	5Y4/2~3/2 灰オリーブ~オリーブ黒	5Y4/2~3/2 灰オリーブ~オリーブ黒	凹面－糸切り・布目・側縁平行のナデ。 凸面－端縁・側縁方向のナデ。 ※粘土合わせ目。粘土板一枚作り。	第30図 図版29
61	灰原	－	平瓦	〔17.0〕	〔16.2〕	2.6～2.8	側面残存	堅緻。白色粒子・細礫・小礫含む。	良好	5Y4/1~3/1 灰~オリーブ黒	5Y4/1~3/1 灰~オリーブ黒	凹面－糸切り・枠板圧痕・布目。 凸面－端縁方向のナデ。一部に布目痕。 ※粘土板合わせ目・粘土板桶巻作り。	第30図 図版29
62	灰原	－	平瓦	〔18.0〕	〔14.3〕	1.6～1.8	広端面残存	堅緻。白色粒子・小礫やや多く含む。	良好	10Y4/1 灰	10Y4/1 灰	凹面－糸切り・枠板圧痕・布目。 凸面－不定方向のナデ。 ※粘土板桶巻作り。	第30図 図版30
63	C70	－	平瓦	〔23.1〕	〔25.4〕	2.0～2.4	広端面・側面残存	堅緻。白色粒子・小礫含む。	良好	5Y4/2~3/2 灰オリーブ~オリーブ黒	5Y4/2~3/2 灰オリーブ~オリーブ黒	凹面－糸切り・枠板圧痕・布目・布の継ぎ合わせ目。 凸面－不定方向のナデ。 ※粘土板桶巻作り。	第30図 図版30
64	灰原	－	平瓦	〔22.8〕	〔11.6〕	1.8～2.0	側面残存	堅緻。黒色粒子・細砂粒やや多く含む。	良好	2.5Y5/1~5/2 黄灰~暗灰黄	2.5Y5/1~5/2 黄灰~暗灰黄	凹面－糸切り・布目・側縁方向のナデ。 凸面－側縁方向のナデ。不定方向のナデ。縄を巻き付けた痕跡が端縁方向に等間隔に残る。※一枚作り。	第31図 図版30
65	D86	－	平瓦	〔23.2〕	〔13.2〕	2.0～2.3	広端面・側面残存	褐色粒子・細砂粒やや多く含む。	酸化焰焼成ぎみ	5Y5/2 灰オリーブ	10YR6/4 にぶい黄橙	凹面－糸切り・枠板圧痕・布目。 凸面－側縁・端縁方向のナデ。縄を巻き付けた痕跡が端縁方向に等間隔に残る。※粘土板桶巻作り。	第31図 図版31
66	灰原	－	平瓦	〔21.0〕	（25.0）	1.2～1.4	両側面口端面残存	堅緻。白色微粒子やや多く、細礫含む。	良好	7.5Y5/1~3/1 灰~オリーブ黒	7.5Y5/1~3/1 灰~オリーブ黒	凹面－糸切り・布目。 凸面－側縁・端縁方向のナデ。広端縁側に斜位の平行文叩き。※紐づくり。折れ曲がっている。一枚作り。	第31図 図版31
67	灰原	－	平瓦	〔10.2〕	〔15.5〕	2.2～2.4	狭端面・側面残存	堅緻。細砂粒多く含む。	良好	5Y4/2 灰オリーブ	5Y4/2 灰オリーブ	凹面－糸切り・枠板圧痕・布目。 凸面－斜位の平行文叩き・不定方向のナデ。縄を巻き付けた痕跡が端縁方向に残る。※粘土板桶巻作り。	第31図 図版31
68	灰原左T	－	平瓦	〔9.2〕	〔8.6〕	2.3～2.5	狭端面・側面残存	堅緻。細礫･小礫含む。	良好	10Y4/1 灰	10Y4/1 灰	凹面－糸切り・枠板圧痕・布目。 凸面－側縁方向の平行文叩き。端縁方向のナデ。 ※粘土板桶巻作り。	第31図 図版31

番号	出土位置	層位	器種	法量（cm）			現存率	胎土	焼成	色調		成形・調整・備考等（cm）	挿図番号 図版番号
				長さ	幅	厚さ				凸面（外）	凹面（裏）		
69	窯跡付近	－	平瓦	〔28.4〕	〔13.5〕	2.2～2.4	狭端面・側面残存	堅緻。白色粒子・細砂粒・小礫含む。	良好	5Y0/1~6/1 灰白~灰	5Y0/1~6/1 灰白~灰	凹面－糸切り･枠板圧痕･布目。狭端縁側に２条の凹み。 凸面－一部斜位の平行文叩き。不定方向のナデ。 ※粘土板桶巻作り。	第32図 図版32
70	灰原左T	－	平瓦	〔11.6〕	〔16.3〕	2.0～2.3	狭端面・側面残存	細砂粒少量含む。	酸化焔焼成ぎみ	2.5Y8/1~7/1 灰白	2.5Y8/1~7/1 灰白	凹面－糸切り･枠板圧痕･布目。狭端縁側に１条の凹み。 凸面－一部斜位の平行文叩き。不定方向のナデ。 ※粘土板桶巻作り。	第32図 図版32
71	前庭部 A161	上層 －	平瓦	〔17.3〕	〔18.7〕	1.9～2.3	側面残存	堅緻。白色微粒子・小粒子、小礫含む。	良好	5Y4/1 灰	5Y4/1 灰	凹面－糸切り・枠板圧痕・布目・布の綴じ合わせ目。 凸面－一部斜位の平行文叩き。端縁方向のナデ。 ※粘土板桶巻作り。	第32図 図版32
72	灰原左T 灰原	－ －	平瓦	〔23.5〕	26.4	2.0～2.9	両側面残存	堅緻。小礫多く含む。	良好	7.5Y3/1 オリーブ黒	5Y5/1 灰	凹面－糸切り・枠板圧痕・布目。 凸面－一部平行文叩き。側縁・端縁方向のナデ。 ※粘土板桶巻作り。	第32図 図版33
73	灰原	－	平瓦	〔30.3〕	〔17.3〕	2.0～2.5	広端面・側面残存	堅緻。白色微粒子・小礫含む。	良好	7.5Y6/1~3/1 灰~オリーブ黒	7.5Y6/1~3/1 灰~オリーブ黒	凹面－糸切り・枠板圧痕・布目。 凸面－側縁・端縁方向の平行文叩き→側縁・端縁方向のナデ。※粘土板桶巻作り。	第33図 図版33
74	D93	－	平瓦	〔18.1〕	〔19.9〕	2.4～2.6	広端面残存	堅緻。白色粒子・小礫やや多く含む。	良好	5Y5/1 灰	5Y5/1 灰	凹面－糸切り・枠板圧痕・布目・布の綴じ合わせ目。 凸面－端縁方向の平行文叩き。端縁方向のナデ。 ※粘土板桶巻作り。	第33図 図版33
75	前庭部 A167	上層－	平瓦	〔9.5〕	〔14.4〕	1.6～1.7	広端面・側面残存	堅緻。細砂粒少量含む。	良好	5Y8/1 灰白	5Y8/1 灰白	凹面－糸切り・枠板圧痕・布目・布の綴じ合わせ目。 凸面－斜位の平行文叩き。端縁方向のナデ。 ※粘土板桶巻作り。	第33図 図版34
76	灰原	－	平瓦	〔20.0〕	〔9.5〕	2.0～2.2	広端面・側面残存	堅緻。細礫・小礫やや多く含む。	良好	10Y4/1 灰	10Y4/1 灰	凹面－糸切り・枠板圧痕・布目。指ナデ。 凸面－広端縁に側縁方向の平行文叩き。端縁方向のナデ。※粘土板桶巻作り。	第33図 図版34
77	焼成部	上層	平瓦	〔16.0〕	〔14.3〕	2.3～2.5	側面残存	堅緻。細砂粒・小礫含む。	良好	5Y4/1 灰	5Y4/1 灰	凹面－糸切り・枠板圧痕・布目。 凸面－一部平行文叩き。端縁方向のナデ。 ※粘土板桶巻作り。	第34図 図版34
78	A165	－	平瓦	〔10.2〕	〔6.0〕	2.0～2.2	狭端面・側面残存	堅緻。細砂粒含む。	良好	2.5Y5/2 暗灰黄	7.5Y5/2 灰オリーブ	凹面－糸切り・枠板圧痕・布目。 凸面－側縁方向の平行文叩き。 ※粘土板桶巻作り。	第34図 図版34
79	D65	－	平瓦	〔9.3〕	〔11.6〕	2.0～2.2	狭端面・側面残存	堅緻。細砂粒・小礫含む。	良好	7.5Y5/1 灰	7.5Y6/1 灰	凹面－糸切り・枠板圧痕・布目。 凸面－側縁方向の平行文叩き。 ※粘土板桶巻作り。	第34図 図版34
80	焼成部 焼成部 A180	－ － 前庭上層	平瓦	〔21.2〕	〔11.9〕	1.8～2.1	狭端面・側面残存	堅緻。白色微粒子少量含む。	良好	5/1~4/1 灰	2.5Y6/1~6/2黄 灰~灰黄	凹面－糸切り・枠板圧痕・布目。 凸面－側縁方向の平行文叩き（一部斜位）。 ※粘土板桶巻作り。	第34図 図版35
81	灰原	－	平瓦	〔9.3〕	〔12.3〕	1.9～2.2	側面残存	堅緻。白色粒子・細砂粒・小礫含む。	良好	2.5Y4/1~4/2黄 灰~暗灰黄	2.5Y4/1~4/2黄 灰~暗灰黄	凹面－糸切り・枠板圧痕・布目。 凸面－側縁方向の平行文叩き。 ※粘土板桶巻作り。	第34図 図版35
82	灰原	－	平瓦	〔19.6〕	〔14.1〕	2.0～2.4	狭端面・側面残存	堅緻。白色・黒色粒子やや多く含む。	良好	2.5Y5/1 黄灰	2.5Y6/3 にぶい黄	凹面－糸切り･枠板圧痕･端縁方向に２条の凹み･布目。 凸面－側縁方向の平行文叩き。一部斜位の叩き。 ※粘土板桶巻作り。	第34図 図版35
83	前庭部 （A179）	上層	平瓦	〔17.2〕	〔12.1〕	2.1～2.6	側面残存	堅緻。細砂粒含む。	良好	10YR3/2 黒褐	10YR3/2 黒褐	凹面－糸切り・枠板圧痕・布目。 凸面－斜位の平行文叩き。 ※粘土板桶巻作り。	第34図 図版35
84	灰原	－	平瓦	〔6.3〕	〔6.0〕	1.4～1.6	狭端面・側面残存	堅緻。白色・黒色粒子含む。	良好	7.5Y4/1 灰	7.5Y4/1 灰	凹面－糸切り・枠板圧痕・布目・布の綴じ合わせ目。 凸面－斜位の平行文叩き。 ※粘土板桶巻作り。	第35図 図版36
85	灰原	－	平瓦	〔9.7〕	〔14.9〕	1.8～2.1	側面残存	堅緻。細砂粒含む。	良好	2.5Y4/1 黄灰	2.5Y4/1 黄灰	凹面－糸切り・枠板圧痕・布目。 凸面－斜位の平行文叩き。 ※粘土板桶巻作り。	第35図 図版36
86	窯跡付近	－	平瓦	〔10.1〕	〔14.1〕	1.5～2.0	狭端面・側面残存	細砂粒含む。	酸化焔焼成	10YR7/6 明黄褐	10YR7/6 明黄褐	凹面－糸切り・枠板圧痕・布目。 凸面－斜位の平行文叩き。 ※粘土板桶巻作り。	第35図 図版36
87	灰原	－	平瓦	〔23.6〕	〔16.2〕	2.0～2.7	広端面・側面残存	堅緻。細砂粒・小礫含む。	良好	7.5Y5/2 灰オリーブ	7.5Y5/2 灰オリーブ	凹面－糸切り・枠板圧痕・広端縁側に端縁方向の凹み・布目→側縁・端縁方向のナデ。凸面－斜位の平行文叩き。※粘土板合わせ目。粘土板桶巻作り。	第35図 図版36
88	D70	－	平瓦	〔13.1〕	〔13.9〕	1.6～1.7	狭端面・側面残存	堅緻。白色粒子・小礫含む。	良好	7.5Y4/1~3/1 灰~オリーブ黒	5Y4/1 灰	凹面－糸切り・枠板圧痕・布目。 凸面－端縁方向の平行文叩き。 ※粘土板桶巻作り。	第35図 図版36
89	窯跡付近	－	平瓦	〔10.0〕	〔13.0〕	1.9～2.1	狭端面・側面残存	堅緻。白色微粒子・細砂粒・細礫含む。	良好	7.5Y5/1~4/1灰	7.5Y5/1~4/1灰	凹面－糸切り・枠板圧痕・布目。 凸面－端縁方向の平行文叩き。 ※粘土板桶巻作り。	第35図 図版37
90	D85	－	平瓦	〔16.6〕	〔12.7〕	1.5～1.9	狭端面・側面残存	赤色粒子・細礫含む。	酸化焔焼成	10YR7/6 明黄褐	10YR7/6 明黄褐	凹面－糸切り・枠板圧痕・布目。広端縁側に端縁方向の凹み。 凸面－端縁方向の平行文叩き。 ※粘土板合わせ目。粘土板桶巻作り。	第35図 図版37
91	D79	－	平瓦	〔9.2〕	〔15.9〕	1.8～2.4	広端面残存	堅緻。白色・黒色粒子やや多く含む。	良好	10Y4/1灰	10Y4/1灰	凹面－糸切り・枠板圧痕・布目。 凸面－斜位の平行文叩き。 ※粘土板合わせ目。粘土板桶巻作り。	第35図 図版37
92	B79	－	平瓦	〔12.3〕	〔9.9〕	3.2～4.0	広端面残存	白色微粒子・細砂粒・細礫含む。	酸化焔焼成ぎみ	2.5Y4/1 黄灰	7.5YR6/4 にぶい橙	凹面－糸切り･布目→側縁方向のナデ。枠板圧痕不明瞭。 凸面－斜位の平行文叩き。端縁方向のナデ。	第36図 図版37
93	灰原	－	平瓦	〔15.5〕	〔12.7〕	2.5～3.0	小破片	白色粒子・細砂粒含む。	酸化焔焼成ぎみ	5Y4/1 灰	10YR6/4 にぶい黄橙	凹面－糸切り・枠板圧痕・布目・布の綴じ合わせ目。 凸面－縦・斜位の平行文叩き。 ※粘土板桶巻作り。	第36図 図版37
94	B201	－	平瓦	〔19.5〕	〔17.3〕	1.5～2.0	狭端面・側面残存	細砂粒・小礫含む。	酸化焔焼成ぎみ	10YR6/6 明黄褐	Y4/2 灰オリーブ	凹面－糸切り・枠板圧痕・布目。 凸面－縦位（交互）の平行文叩き。 ※粘土板合わせ目。粘土板桶巻作り。	第36図 図版38
95	灰原	－	平瓦	〔11.4〕	〔13.5〕	1.1～1.6	狭端面・側面残存	細砂粒・小礫含む。	酸化焔焼成	10YR8/3~7/4 浅黄橙~ にぶい黄橙	10YR8/3~7/4 浅黄橙~ にぶい黄橙	凹面－糸切り・枠板圧痕・布目。 凸面－縦・斜位（交互）の平行文叩き。 ※粘土板桶巻作り。	第36図 図版38
96	B158	－	平瓦	〔26.0〕	〔15.4〕	1.6～2.3	狭端面・側面残存	堅緻。白色粒子・細礫含む。	良好	5Y5/3 灰オリーブ	2.5Y5/3 黄褐	凹面－糸切り・枠板圧痕・布目。 凸面－縦・斜位（交互）の平行文叩き。 ※粘土板合わせ目。	第36図 図版38
97	灰原	－	平瓦	〔13.0〕	〔14.5〕	1.5～1.8	側面残存	堅緻。白色微粒子・細礫少量含む。	良好	2.5Y8/1 灰白	5Y5/1 灰	凹面－糸切り・枠板圧痕・布目。 凸面－斜位（交互）の平行文叩き。 ※粘土板合わせ目。粘土板桶巻作り。	第36図 図版39
98	C28	－	平瓦	〔26.7〕	〔16.0〕	1.7～2.1	側面残存	細砂粒・小礫含む。	酸化焔焼成	10YR7/4~6/4 にぶい黄橙	10YR7/4~6/4 にぶい黄橙	凹面－糸切り・枠板圧痕・布目・上下に端縁方向の２条の凹み。 凸面－斜位の平行文叩き。粘土板合わせ目。 ※粘土板合わせ目。粘土板桶巻作り。	第37図 図版39

番号	出土位置	層位	器種	法量（cm）			現存率	胎土	焼成	色調		成形・調整・備考等（cm）	挿図番号 図版番号
				長さ	幅	厚さ				凸面（外）	凹面（裏）		
99	灰原	－	平瓦	〔15.0〕	〔11.1〕	2.1～2.4	狭端面・側面残存	堅緻。細砂粒・小礫含む。	良好	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白	凹面－糸切り・枠板圧痕・布目。 凸面－正位の長方形格子文叩きと斜位の平行文叩き併用。※粘土板桶巻作り。	第37図 図版39
100	窯跡付近	－	平瓦	〔18.5〕	〔8.0〕	2.1～2.3	側面残存	堅緻。細砂粒・細礫含む。	良好	7.5Y5/1 灰	7.5Y5/1 灰	凹面－糸切り・枠板圧痕・布目→側縁方向のナデ。 凸面－斜位の長方形格子文叩き。 ※粘土合わせ目。分割裁断無調整。	第37図 図版39
101	A154	－	平瓦	〔16.1〕	〔15.6〕	2.4～3.3	狭端面・側面残存	堅緻。白色微粒子・小礫含む。	良好	5Y5/1 灰	5Y5/1 灰	凹面－糸切り・枠板圧痕・狭端縁側に端縁方向の１条の凹み・布目。 凸面－斜位の長方形格子文叩き。 ※粘土板合わせ目。粘土板桶巻作り。	第37図 図版40
102	C33	－	平瓦	〔8.5〕	〔15.0〕	2.6～3.0	側面残存	堅緻。細砂粒含む。	良好	2.5Y7/1~6/1 灰白~黄灰	2.5Y7/1~6/1 灰白~黄灰	凹面－糸切り・端縁方向の１条の凹み・布目・布の綴じ合わせ目。枠板圧痕不明瞭。 凸面－斜位の長方形格子文叩き。	第37図 図版40
103	灰原 A174 D62	－ － －	平瓦	〔32.3〕	〔1 1 .5〕	1.6～2.6	広端面・側面残存	堅緻。細砂粒含む。	良好	2.5Y8/2~6/2 灰白~灰黄	2.5Y8/2~6/2 灰白~灰黄	凹面－糸切り・枠板圧痕・布目。 凸面－斜位の長方形格子文叩き。 ※粘土板桶巻作り。	第37図 図版40
104	D63	－	平瓦	〔14.7〕	〔9.8〕	1.4～1.9	側面残存	堅緻。白色小粒子少量含む。	良好	5Y6/1 灰	5Y6/1 灰	凹面－糸切り・枠板圧痕不明瞭・布目。 凸面－正位の長方形格子文叩き（側縁方向）。	第38図 図版41
105	灰原	－	平瓦	〔8.5〕	〔10.3〕	1.5～2.6	側面残存	堅緻。白色・黒色粒子少量含む。	良好	7.5Y6/1~5/1 灰	7.5Y6/1~5/1 灰	凹面－糸切り・枠板圧痕・布目。 凸面－斜位の長方形格子文叩き。 ※粘土板合わせ目。粘土板桶巻作り。	第38図 図版41
106	D29	－	平瓦	〔10.2〕	〔12.3〕	1.8～2.1	側面残存	堅緻。細砂粒含む。	良好	2.5Y6/1 黄灰	2.5Y8/1 灰白	凹面－糸切り・枠板圧痕・布目。 凸面－正位の長方形格子文叩き（側縁方向）。 ※粘土板桶巻作り。	第38図 図版41
107	灰原	－	平瓦	〔18.4〕	〔11.3〕	1.8～2.2	広端面・側面残存	堅緻。白色・黒褐色粒子やや多く含む。	良好	5Y3/1 オリーブ黒	2.5Y5/1 黄灰	凹面－糸切り・枠板圧痕不明瞭・布目・布の綴じ合わせ目。 凸面－縄叩き。一部側縁方向のナデ。 ※粘土板一枚作りの可能性大。	第38図 図版41
108	灰原	－	陶製品	9.2	3.0	3.4	略完形	堅緻。細砂粒含む。	良好	7.5Y6/1 灰	7.5Y6/1 灰	直方体の陶製品。四面をヘラで整え、中央部の角に斜めの穿孔も設ける。	第38図 図版41

第４章　総　括

信包中原田古窯跡の発掘調査は、旧古川町が吉城郡古川町大字信包字中原田地内（現飛騨市古川町信包字中原田）で実施した五ヶ村圃場整備事業がその発端である。土地改良工事により灰原が窯跡の近くまで削り取られ、多数の瓦や須恵器の破片が出土したことに因る。当時、古川町史編さん委員を兼務していた大野政雄氏が調査を担当し、昭和53年９月中旬から11月下旬にかけて約２ヶ月間に及ぶ発掘調査が行われた。その結果、窯は瓦と須恵器を焼いた瓦陶兼業窯とされ、ここで焼かれた瓦類は当時、県下ではもっとも古い７世紀中ごろと推測された。また、その供給先として、東に３㎞ほどの宮川右岸の古川町太江に所在する寿楽寺廃寺の屋瓦に用いたことを明らかにした。これらの所見は、飛騨地域における古代窯業生産に関して一石を投じることとなった。

調査終了から38年が経った昨年７月、未報告分であった信包中原田古窯跡の二次整理作業について飛騨市教育委員会より委託を受けた株式会社玉川文化財研究所が担当することとなった。７月から基礎整理に入り、記録類ならびに出土遺物の検討を加えた結果、窯は瓦陶兼業窯ではなく須恵器窯であることが判明し、信包中原田１号窯と命名して報告を行った。詳細は前章までに述べたとおりである。

本章では、報告の総括として信包中原田１号窯とそれに関連する事象についてまとめておきたい。

窯跡は丘陵部先端の南東斜面中腹に築かれ、その斜面下方に灰原が広がっている。灰原からは瓦や須恵器類の破片がまとまって出土し、また平瓦の中には桶巻作りの他に一枚作りの技法によるものや、須恵器では７世紀中半から後半のもの、あるいは９世紀代の資料も含まれていることから、１号窯の周囲には時期の異なる瓦窯や須恵器窯などが間違いなく存在しているものと推測される。

窯の構造は、半地下式無階有段登窯と考えられ、焚口から窯尻までは８～９ｍ程度と推測される。最大幅は焚口部で約1.2m、窯体内は上部が下部よりせり出した構造になっていることから、実際はもう少し幅が広かった可能性がある。窯体の勾配は約30度、焚口部から窯尻までの比高差はおおよそ４ｍ強である。全体に細長い形態の窯で、断面形はかまぼこ形を呈している。

窯の細部について再度整理すると、焚口部から前庭部にかけては扇状に広がり、前庭部先端で最大1.7m、焚口部付近で1.1ｍ内外を測り、焚口部から燃焼部へは次第にすぼまる。焚口部から燃焼部に至るまでの緩勾配を燃焼部と推測すると、長さは１ｍ程度と判断される。窯壁は厚さ10㎝前後と考えられ、焚口部から燃焼部の側壁には板石を立て、燃焼部の側壁には角礫の他に瓦も用いられている。焼成部は、燃焼部の傾斜変換部から窯尻に向かって幅を狭めながら立ち上がる。また、焼成部の床面上では、テラス状の段差が確認されたことから有段式の窯構造と推測した。焼成部から窯尻にも側壁に板石や角礫を使用している。この事例は、石組側壁窯の系譜（山田 2010）と考えられ、隣国では美濃や信濃などでもみられるが、飛騨では初例となろう。

つぎに、窯の操業年代について示しておきたい。まず結論から述べると、猿投窯編年（尾野 1997）でのⅣ期中段階に対比できるものと推測され、また暦年代推定であるが、猿投窯編年より援用すると、７世紀末葉（第４四半期後半／690）～８世紀初頭頃（第１四半期前半／720）と考えられる。

本窯の器種構成の特徴を示すと、もっとも主要な器種である坏が、古墳時代以来の伝統的な形態の坏Ｈから、坏Ｇ・坏Ａ・坏Ｂへと確実に転換した時期であり、坏Ｈや高坏などの器種が認められるが、

これらはⅣ期以前に属する窯の存在を示す資料となろう。坏類の主体は坏Ｇで、つぎに坏Ａ、坏Ｂと続く。主体となる坏Ｇは、底部の切り離し手法としてはヘラ起こし（ヘラ切り）が主流である。蓋の天井部上面には回転ヘラ削りが広く施され、その範囲は中心からほぼ６～８割の範囲に及んでいる。摘みはボタン状の径３～４㎝台の大きなもので、この形態の蓋は坏Ｇ・坏Ａ・坏Ｂの蓋ともほぼ共通している。蓋には口径が20㎝を超える大型のものから、12㎝程度の小型のものまであるが、これらは坏Ａおよび坏Ｂが多様に法量分化しているものと関連性があると考えられる。また、蓋と身の量比が釣り合わないことから、小型の坏は基本的に無蓋であったと考えられる。坏蓋以外に、盤・高盤・短頸壺・長頸瓶・壺・甕・円面硯などがあるが、これらの中にも時間幅があるため、器種組成を考える上で留意する必要がある。また、技法的な問題であるが、灰原出土の中には埦類に回転糸切り手法のものも確認されていることからⅤ期のものも含まれている。

最後に窯の導入に関しての見通しを示しておきたい。飛騨地方は県内でも最北端の山間部に位置し、古くから東海地方（美濃･尾張）と北陸地方（越中）を結ぶ南北交通･文化の結節点として発展してきた。とくに律令制下の古代においては東山道飛騨支路経由での交渉が中心であったと考えられる。律令制下の飛騨国は東山道に属し、当初は大野郡と荒城郡の二郡を管した。

窯場は荒城郡内の北西部にあって、東山道から飛騨に向かうルートをみると、美濃国内の武儀駅・加茂駅を経て、下留駅から飛騨川にほぼ沿って北上し、分水嶺の宮峠を越えると飛騨国府の比定地とされる高山盆地に入る。そして宮川を北に少し下ると荒城郡の中心である古川・国府盆地に至る。

律令制下の飛騨国は、『養老令』賦役令にみられるように、調庸を免じる代わりに里ごとに匠丁を差し出す国とされ、京における殿舎・寺院などの造営に携わった様々な労務に従事していた人びとの存在が知られている。また、飛騨地域には豊富な森林資源が存在することもあり、第１章でみてきたように、７世紀後半頃になると盆地内では瓦を中心とする窯業生産が開始される。その素地として、隣国の美濃には美濃須衛窯や尾張には猿投窯といった巨大な窯場が相次いで興隆し、数多くの窯場が築かれたことと無縁ではなかったと考えられる。

飛騨に瓦窯が導入された背景には、寺院の造営や官衙の整備などを契機に窯業生産が展開したものと推測される。とくに瓦の系譜論では、愛知県名古屋市尾張元興寺跡出土の忍冬文軒丸瓦との関係を論じた寿楽寺廃寺出土の同系瓦の問題（稲垣 1971、八賀 1972、大塚 1994、梶山 1997、山路 1999）や、また縦置型一本作り軒丸瓦の技術的な伝播の問題（櫛原 1990・1992、上原 1997、山路 2004）なども尾張や近江・信濃・甲斐などとの関連を示唆するものである。一方、信包中原田１号窯の須恵器製品をみる限りでは、美濃須衛窯をはじめとした西濃や中濃諸窯地域の影響が大きかったものと考えられ、陶邑窯系の技術導入が図られたものと推測される（城ヶ谷 1997・2010）。

須恵器および瓦窯の開窯の背景には、須恵器製作技術の導入や範型の移動を含む中央の造瓦技術の導入などの検討も必要であり、これらを究明する上で有効な手がかりとなる窯場であることを改めて念頭におく必要があろう。また、未だ途中である飛騨地方のタイムスケールとなる須恵器の編年研究にも繋げたいと思う。信包中原田窯跡がそうした糸口をつかむための一助となれば幸いである。

引用・参考文献

稲垣晋也 1971「古瓦よりみたる飛鳥・白鳳期の寺院」『古代の日本』第９巻　角川書店

八賀　晋 1972「第六章　歴史時代初期の美濃と飛騨」『岐阜県史　通史編原始』岐阜県

荻野繁春 1981「７・８世紀の須恵器編年－美濃国・尾張国－」『老洞古窯群発掘調査報告書』 岐阜市教育委員会

斎藤孝正 1983「猿投窯成立期の様相」『名古屋大学文学部研究論集』LXXXⅥ（史学29） 名古屋大学文学部

渡辺博人 1983『美濃須衛古窯跡群資料調査報告書』各務原市資料調査報告書第４号　各務原市教育委員会

櫛原功一 1990「瓦」『天狗沢瓦窯跡発掘調査報告書』 敷島町教育委員会

斎藤孝正 1992「猿投窯」『第９回東海埋蔵文化財研究会岐阜大会資料集２　古代仏教東へ－寺と窯－２・窯』 東海埋蔵文化財研究会岐阜大会実行委員会

櫛原功一 1992「天狗沢瓦窯と出土瓦」『天狗沢瓦窯跡と古代甲斐』敷島町教育委員会

大塚　章 1994「寿楽寺廃寺出土の軒丸瓦について－飛騨地方の古代寺院に関する一考察－」『岐阜県博物館調査研究報告』第15号　岐阜県博物館

上原真人 1997『瓦を読む』歴史発掘11　講談社

梶山　勝 1997「尾張元興寺跡出土の忍冬蓮華文軒丸瓦をめぐって」『竪田直先生古稀記念論文集』竪田直先生古稀記念論文集刊行会

尾野善裕 1997「Ⅴ 尾張・西三河（窯跡） 猿投・尾北・その他」『古代の土器５－１　７世紀の土器（近畿東部・東海編）』古代の土器研究会

城ヶ谷和広 1997「Ⅴ 尾張・三河・遠江・美濃　尾張・三河・美濃（消費遺跡）」『古代の土器５－１　７世紀の土器（近畿東部・東海編）』古代の土器研究会

尾野善裕 1999「古墳時代猿投窯編年の再検討」『第４回三河考古合同研究会　古墳時代の猿投窯と湖西窯－分類・編年・西暦年代の再検討』三河考古刊行会

山路直充 1999「東日本の飛鳥・白鳳時代の瓦について－下総龍角寺と尾張元興寺－」『飛鳥・白鳳の瓦と土器－年代論－』帝塚山大学考古学研究所歴史考古学研究会・古代の土器研究会

尾野善裕 2001「東海地方における須恵器製作技法の転換とその背景－猿投窯を中心として－」『古代の土器研究　律令的土器様式の西・東６　須恵器の製作技法とその転換』古代の土器研究会

渡辺博人 2001「美濃」『古代の土器研究　律令的土器様式の西･東６　須恵器の製作技法とその転換』古代の土器研究会

谷口陽一 2002『太江遺跡・寿楽寺廃寺跡』岐阜県文化財保護センター調査報告書第74集　財団法人岐阜県文化財保護センター

山路直充 2004「甲斐における瓦葺き寺院の出現－天狗沢窯出土鐙瓦の祖形を追って」『古代の社会と環境「開発と神仏とのかかわり」資料集』帝京大学山梨文化財研究所・古代考古学フォーラム実行委員会

城ヶ谷和広 2010「第７章　東海」『古代窯業の基礎研究－須恵器窯と技術と系譜－』窯跡研究会

山田真一 2010「第13章　石組側壁窯の分布と系譜」『古代窯業の基礎研究－須恵器窯と技術と系譜－』窯跡研究会
三好清超 2014「飛騨における古代寺院の成立に関する一考察」『富山大学大学院人文科学研究科論集』富山大学大学院人文科学研究科論集編集委員会
河合英夫 2015「第４章　遺跡からみた飛騨古川の古代」『飛騨古川歴史をみつめて』飛騨市